県道中野豊野線バイパス
志賀中野有料道路
埋蔵文化財発掘調査報告書

—長野県中野市内—

栗林遺跡
七瀬遺跡

1994

長野県中野建設事務所
長野県道路公社
㈶長野県埋蔵文化財センター

『栗林遺跡・七瀬遺跡』　正誤表

	誤	正
iii頁　5行目	（追加）　遺物注記・写真・図面などの保存記録は旧番号による。	
〃　6行目	（追加）　遺構図中の土層断面図の注記は本文末にまとめた。	
iv頁（遺構）の凡例	炭水物　炭化材	炭化物　炭化材
xx頁　図版目次	（第 286図は欠番）	
〃　〃	第 266図弥生時代後期の遺構配置	第 265図古墳時代前期の遺構配置
xxi頁　〃	第 359図谷状～土器出土状況	第 359図谷状～遺物出土状況
xxiv頁　写真目次	PL.55 第14号～土坑の土器	PL.55 第14号～土坑
〃　〃	PL.97 打製石斧・小形剥片石器	PL.97 小形剥片石器
〃　〃	PL.98 小形剥片石器・磨石類	PL.98 磨石類
3頁　35行目	沢田鍋土遺跡の調査に	沢田鍋土遺跡の調査終了。
5頁　下から 2行目	阿藤慎治	阿藤慎治
15頁　第 5図	（土層断面図 7～10の黒：土層柱状図 8・9・10の第一層）	
〃　〃	（凡例）　・扇状地礫層	扇状地礫層
28頁　第15図の1	第15図の1 F地区の概要	第15図　F区の遺構配置
36頁　22行目	（1行追加）　遺構出土の土器は第57図～80図に実測図・拓本の順に示し、そのうち主要なものは81～85図に再掲した。	
106頁　19行目	第86図 1～9	第86図 1～8
〃　20行目	4～8 は摩滅が	4～6 は摩滅が
〃　22行目	第86図 9～54	第86図 7～54
130頁　下から 4行目	23は類部に	24は類部に
〃　〃	24は	22は
131頁　1行目	第81図18・19	第81図18～20
185頁～ 265頁　ｷｬﾌﾟｼｮﾝ	縄文石器	縄文時代石器
201頁　147図	（番号）655～664	655～663
276頁　2行目	（1行追加）　住居址出土土器は第 226図～ 228図に示し、そのうち主要なものは 243～ 251図に再掲した。	
293頁　下から11行目	（1行追加）　土坑出土土器は第 230図に示し、主要なものは 243～ 251図に再掲した。	
296頁	（第24～31号土坑の図番号）第 239図	229図

	誤	正
303頁　下から13行目	（1行追加）　土坑出土の土器は第 241～ 242図に示し、そのうち主要なものは 243～ 251図に再掲した。	
308頁　2行目	第 120図	第 225図
312頁　6行目	第 243図 1～第 243図 123	第 243図～第 248図
331頁　下から11行目	（1行追加）　住居址出土の土器は第 282～ 283図に示し、主要なものは 262～ 284図に再掲した。	
338頁　下から 1行目	内湾口縁鉢	内彎口縁鉢
350頁　下から 5行目	（1行追加）　住居址出土の土器は第 283～ 285図に示し、そのうち主要なものは 277～ 281図に再掲した。	
412頁　311図	（土層断面図）	
413頁　312図	（16号溝土層断面図）	
417頁　1行目	皇宋通宝	皇宋通宝
〃　〃	熙寧元宝	熙寧元宝
426頁　8行目	（1行追加）　遺構出土の土器は第326・330 図に示し、そのうち主要なものは 331～ 334図に再掲した。	
438頁　45図の左下半	（糸状の線描）	（抹消）
454頁　4行目	（1行追加）　遺構出土の土器は第 361～ 375図に示し、そのうち主要なものは 374～ 414図に再掲した。	
〃　17行目	第3・4・13・14・16・17 号住居跡に	第3・4・11・13・14・16・17号住居跡に
552頁　左図上から２番目	（タイトル欠）	②段階
〃　右図上から４番目	（図中の文字欠）	栗林面
611頁　第 447図	（第３号住居址外来系土器の系統別比の棒グラフ）	（抹消）
620頁　下から 5行目	□２段階（古）土器群	第２段階（古）土器群
PL.89	5～7　第 3号住居址	5～7　第 1号住居址
〃	10～15　第17号住居址	10～15　第32号土坑
PL.90　ｷｬﾌﾟｼｮﾝ	（第23～36号）住居址	（第23～36号）土坑
PL.93　ｷｬﾌﾟｼｮﾝ	第37号住居址	第38号住居址
PL.95　写真 1	（写真欠落）	（欠番）
PL.122　写真12	（写真中の番号１）	（抹消）

県道中野豊野線バイパス
志賀中野有料道路
埋蔵文化財発掘調査報告書

—長野県中野市内—

栗林（くりばやし）遺跡
七瀬（ななせ）遺跡

1994

長野県中野建設事務所
長野県道路公社
㈶長野県埋蔵文化財センター

水さらし場状遺構（上・下）

七瀬遺跡遠景

七瀬遺跡堰状遺構

序

上信越自動車道中野インターチェンジから山ノ内町・志賀高原方面に向かう志賀中野有料道路は、高速道の供用開始を平成７年に控え、そのアクセス道路であり、また1998年冬季長野オリンピックの会場地を結ぶ道路であります。

この道路は、中野市の西郊にある長丘丘陵をトンネルで通過しますが、この丘陵は古墳や窯跡をはじめとする遺跡の宝庫であります。なかでも長野県史跡栗林遺跡および七瀬双子塚古墳は、弥生時代中期の標式遺跡および古墳時代中期の前方後円墳として、古くから研究者ばかりでなく市民・県民にも知られた著名な遺跡です。トンネルの東側出口部分に七瀬遺跡、西側出口から長野県史跡指定地近くまでの間に栗林遺跡があり、今回の発掘調査地点は、七瀬双子塚古墳の直下と長野県史跡栗林遺跡の周辺にあたります。

両遺跡では縄文時代から中世にわたる膨大な遺構・遺物を発掘調査いたしましたが、なかでも栗林遺跡の縄文時代後期の貯蔵穴をはじめとする遺構群、七瀬遺跡の古墳時代初めに遠方からもたらされた土器などは、それぞれ全国的にも類例の少ない貴重なものであります。これらによって、縄文時代の植物利用や古墳時代初めの地域間交流の実態を明らかにすることができました。

この事業は、当センターが事業者との直接契約の下で行った初めての大規模事業でありました。発掘調査は２年間、整理作業は２度の冬期と１年間、計３年におよんだ事業も、予定通り終了することができました。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、深い御理解と御協力をいただいた長野県中野建設事務所・長野県道路公社・同中野工事事務所・中野市、地区対策委員会をはじめとする栗林・七瀬地区の方々、発掘・整理作業に御協力いただいた多くの方々、直接の御指導を賜った長野県教育委員会、ことに３年間にわたり職員を派遣いただいた中野市教育委員会に心より感謝申し上げる次第であります。

平成６年３月31日

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長　佐藤　善處

凡　　例

1　本書は、県道中野豊野線バイパス・志賀中野有料道路工事に係る、長野県中野市内栗林遺跡(AKB)・七瀬遺跡(ANS)発掘調査報告書である。

2　栗林・七瀬遺跡の概要については、すでに当センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』8・9およびその他の刊行物で報告している。それらと本書の記述に相違があるが、本報告を最終とする。

3　調査時の遺構番号は、刊行にともなって本書中の番号に付け替えている。対照は表にまとめた。

4　註は節ごとに、参考引用文献はⅤ章の節ごとにまとめてある。

5　弥生時代後期の甕や内面整形が横ミガキの土器には、内面の図示を省略した場合がある。

6　執筆分担は以下に示す。

土屋　積　　第Ⅰ・Ⅴ章8節

渡辺敏泰　　第Ⅱ章、Ⅲ章1節1、3節1(1)、第Ⅴ章1

中島庄一　　第Ⅲ章1節2～6、2節、3節1(2)(3)、4節1～3・5(1)・6(1)(2)、5節1・2・4、6節1・2・3・5、7節1、第Ⅳ章4節2(1)、6節2、第Ⅴ章3・4・6節

岡村秀雄　　第Ⅲ章1節7・8・9、3節1(1)・2、4節4、6節4、7節2、第Ⅴ章2節

中島庄一・岡村秀雄・斎藤久美　　第Ⅲ章3節3(1)(2)

赤塩　仁　　第Ⅲ章4節6(3)土器、5節3・5、第Ⅳ章1節、4節1、5節1・2(1)、6節1第Ⅴ章7節

斎藤久美　　第Ⅲ章3節3(3)(4)、4節5(2)～(4)、6節5(4)～(6)、7節3(2)(3)、第Ⅳ章2節、3節2(2)～(5)、4節2(2)～(6)、5節2(2)、第Ⅴ章5節

赤塩　仁・斎藤久美　　第Ⅲ章4節6

7　本書の編集・構成は、関　孝一と執筆者で行った。

8　発掘調査および本書作成にあたり、次の諸氏・諸機関より御教示・御協力を頂いた。

赤塚　次郎　安孫子昭二　石野　博信　石原　正敏　岩崎　卓也　垣内光次郎　春日　真実
可児　通宏　加納　俊介　神村　透　川村　浩司　下平　博行　久々　忠義　興水　太仲
小林　達雄　金井　汲次　金井　正三　金箱　文夫　坂井　秀弥　酒井　重洋　笹沢　浩
品田　高志　菅沼　亘　田嶋　明人　滝沢　規朗　谷口　康浩　檀原　長則　千野　浩
寺島　孝典　寺崎　裕介　栃木　英道　中村　由克　永峯　光一　橋本　博文　前島　卓
宮尾　亨　宮下　健司　望月　静雄　森嶋　稔　渡辺　誠　山下　誠一　山田　昌久
(敬称略)
飯山市教育委員会　中野市教育委員会　長野市教育委員会

9　栗林・七瀬遺跡に係る記録および出土遺物は、㈶長野県埋蔵文化財センターが保管している。

10　本書に掲載した実測図・写真の縮尺は、原則として以下のように統一した。

遺構実測図

栗林遺跡

竪穴住居址・掘立柱建物址・配石　1：60　　土坑・土師器焼成遺構・水さらし場遺構　1：40

溝　1：60～120　　土坑(井戸)　1：80　　住居址内施設　1：30

七瀬遺跡

竪穴住居址　1：60か1：160　　土坑・堰状遺構・溝(第2号溝)　1：60

溝(第1号溝)　1：80　　集石　1：240　　谷状地形とその周辺　1：60～240

遺物実測図

土器・陶器　1：4～8　　土器拓影　1：3　　金属器　1：2～3　　銭貨　1：4

土製品　1：3　　石器・石製品　2：3～1：4

遺物写真

土器　約1：6　　石器　約1：3　　木器　約1：2～4

11　遺物実測図の番号は以下の項目ごとに1から通し番号をつけた。

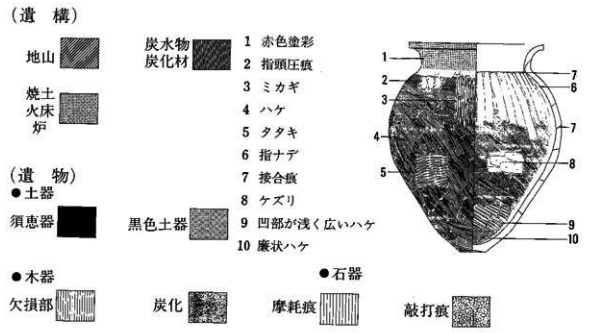
栗林遺跡

縄文時代の土器・石器・土製品。弥生時代中期の土器・石器・土製品。弥生時代後期の土器・石器・土製品。古墳時代前期の土器・土製品。古墳時代中期の土器・土製品。平安時代の土器・石器・金属製品。中世以降の遺物

七瀬遺跡

旧石器・縄文時代の遺物。弥生時代中期の土器・木器・石器・土製品。弥生時代後期の土器・土製品・ミニチュア土器・石器・金属製品。平安時代以降の遺物

12　実測図中のスクリーントーンは以下のように区別している。ただし、同一の遺物を縮尺を変えて複数箇所に掲載してある場合は、遺構あるいは遺物の各説で掲載したもので表している。また、弥生時代後期～古墳時代の遺物実測図については右下のように表現している。



遺構番号対照表1

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
〈縄文時代〉		第55号貯蔵穴	S K99	第6号配石	S H08
第1号貯蔵穴	S K54	第56号貯蔵穴	S K125	第7号配石	S H09
第2号貯蔵穴	S K59	第57号貯蔵穴	S K32	第8号配石	S H10
第3号貯蔵穴	S K55	第58号貯蔵穴	S K86	第9号配石	S H11
第4号貯蔵穴	S K58	第59号貯蔵穴	S K29	第10号配石	S H15
第5号貯蔵穴	S K121	第60号貯蔵穴	S K131	第11号配石	S H16
第6号貯蔵穴	S K127	第61号貯蔵穴	S K100	第12号配石	S H17
第7号貯蔵穴	S K30	第62号貯蔵穴	S X12	第13号配石	S H18
第8号貯蔵穴	S K128	第63号貯蔵穴	S K102	第14号配石	S H19
第9号貯蔵穴	S K41	第64号貯蔵穴	S K118	第15号配石	S H20
第10号貯蔵穴	S K49	第65号貯蔵穴	S K85	第16号配石	S H21
第11号貯蔵穴	S K129	第66号貯蔵穴	S K57	第17号配石	S H22
第12号貯蔵穴	S K126	第67号貯蔵穴	S K44	第18号配石	S H23
第13号貯蔵穴	S K69	第68号貯蔵穴	S K122	第19号配石	S H24
第14号貯蔵穴	S K42	第69号貯蔵穴	S K97	第20号配石	S H28
第15号貯蔵穴	S K89	第70号貯蔵穴	S K72	第21号配石	S H29
第16号貯蔵穴	S K56	第71号貯蔵穴	S K65	第22号配石	S H27
第17号貯蔵穴	S K43	第72号貯蔵穴	S K117	第23号配石	S H30
第18号貯蔵穴	S K88	第73号貯蔵穴	S K64	第24号配石	S H25
第19号貯蔵穴	S K106	第74号貯蔵穴	S K132	第25号配石	S H26
第20号貯蔵穴	S K35	第75号貯蔵穴	S K36	第26号配石	S H12
第21号貯蔵穴	S K74	第76号貯蔵穴	S K92		
第22号貯蔵穴	S K104	第77号貯蔵穴	S K31	第1号住居址	S B06
第23号貯蔵穴	S K68	第78号貯蔵穴	S K90	第2号住居址	S B05
第24号貯蔵穴	S K40			第3号住居址	S B01
第25号貯蔵穴	S K73	第1号土坑	S K96	第4号住居址	S B10(S X05)
第26号貯蔵穴	S K98	第2号土坑	S K70	第5号住居址	S B07
第27号貯蔵穴	S K103	第3号土坑	S K50		
第28号貯蔵穴	S K61	第4号土坑	S K109	第1号埋設土坑	S X06
第29号貯蔵穴	S K60	第5号土坑	S K87	第2号埋設土坑	S X07
第30号貯蔵穴	S K38	第6号土坑	S K112	第3号埋設土坑	S X08
第31号貯蔵穴	S K53	第7号土坑	S K114	第4号埋設土坑	S X09
第32号貯蔵穴	S K48	第8号土坑	S K111	第5号埋設土坑	1号埋ガメ
第33号貯蔵穴	S K115	第9号土坑	S K94		
第34号貯蔵穴	S K62	第10号土坑	S K83	〈弥生時代中期〉	
第35号貯蔵穴	S K71	第11号土坑	S K84	第1号住居址	S B12
第36号貯蔵穴	S K34	第12号土坑	S K66	第2号住居址	S B11
第37号貯蔵穴	S K28	第13号土坑	S K110	第3号住居址	S B16
第38号貯蔵穴	S K119	第14号土坑	S K113	第4号住居址	S B18
第39号貯蔵穴	S K27	第15号土坑	S K108	第5号住居址	S B25
第40号貯蔵穴	S K116	第16号土坑	S K95	第6号住居址	S B17
第41号貯蔵穴	S K123	第17号土坑	S K93	第7号住居址	S B21
第42号貯蔵穴	S K51	第18号土坑	S K47	第8号住居址	S B30
第43号貯蔵穴	S K33	第19号土坑	S K77	第9号住居址	S B42
第44号貯蔵穴	S K63	第20号土坑	S K76	第10号住居址	S B46
第45号貯蔵穴	S K105	第21号土坑	S K80	第11号住居址	S B26
第46号貯蔵穴	S K75	第22号土坑	S X16	第12号住居址	S B27
第47号貯蔵穴	S K133			第13号住居址	S B39
第48号貯蔵穴	S K82	水さらし場状遺構	S E01	第14号住居址	S B45
第49号貯蔵穴	S K120			第15号住居址	S B41
第50号貯蔵穴	S K107	第1号配石	S H03	第16号住居址	S B44
第51号貯蔵穴	S K37	第2号配石	S H05	第17号住居址	S B15
第52号貯蔵穴	S K101	第3号配石	S H07	第18号住居址	S B20・B
第53号貯蔵穴	S K46	第4号配石	S H04	第19号住居址	S B22
第54号貯蔵穴	S K124	第5号配石	S H06	第20号住居址	S B(イ)

道構番号対照表 2

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
第23号土坑	S K10	第59号土坑	S K45	第 8 号土坑	S K15
第24号土坑	S K02			第 9 号土坑	S K16
第25号土坑	S K03	〈弥生時代後期〉		第10号土坑	S K19
第26号土坑	S K12	第21号住居址	S B08	第11号土坑	S K135
第27号土坑	S K27	第22号住居址	S B24		
第28号土坑	S K35	第23号住居址	S B34	第 1 号土器集中	S X03
第29号土坑	S K26	第24号住居址	S B36		
第30号土坑	S K36	第25号住居址	S B38	第 2 号溝	S D08
第31号土坑	S K37	第26号住居址	S B40	第 3 号溝	S D21
第32号土坑	S K24	第27号住居址	S B48	第 4 号溝	S D22
		第28号住居址	S B49・A	第 5 号溝	S D23
第 1 号円形周溝	S D07	第29号住居址	S B47	第 6 号溝	S D20
		第30号住居址	S B01	第 7 号溝	S D04
第 1 号堀立柱建物址	S T14			第 8 号溝	S D13
第 2 号堀立柱建物址	S T04	〈古墳時代前期〉			
第 3 号堀立柱建物址	S T10	第31号住居址	S B04	〈中世〉	
第 4 号堀立柱建物址	S T05	第32号住居址	S B05	第 9 号溝(B区)	S D05
第 5 号堀立柱建物址	S T09	第33号住居址	S B07	第10号溝(B区)	S D02
第 6 号堀立柱建物址	S T06			第11号溝(B区)	S D04
第 7 号堀立柱建物址	S T11	〈古墳時代中期〉		第12号溝(B区)	S D01
第 8 号堀立柱建物址	S T13	第34号住居址	S B10		
第 9 号堀立柱建物址	S T12	第35号住居址	S B14	第 1 号土坑	S K10
第10号堀立柱建物址	S T08	第36号住居址	S B19	第 2 号土坑	S H01
第11号堀立柱建物址	S T02	第37号住居址	S B13	第 3 号土坑	S H02
第12号堀立柱建物址	S T01	第38号住居址	S B20・A	第 4 号土坑	S K06
第13号堀立柱建物址	S T07	第39号住居址	S B29	第 5 号土坑	S K04
第14号堀立柱建物址	S T03	第40号住居址	S B37	第 6 号土坑	S K05
第15号堀立柱建物址	S T15	第41号住居址	S B43	第 7 号土坑	S K21
		第42号住居址	S B23	第 8 号土坑	S K23
第33号土坑	S K38	第43号住居址	S B28	第 9 号土坑	S K07
第34号土坑	S K43			第10号土坑	S K24
第35号土坑	S K57	〈平安時代〉		第11号土坑	S K79
第36号土坑	S K58	第44号住居址	S B49・B	第12号土坑	S K20
第37号土坑	S K60	第45号住居址	S B10	第13号土坑	S K09
第38号土坑	S K59	第46号住居址	S B02	第14号土坑	S K45
第39号土坑	S K102	第47号住居址	S B09	第15号土坑	S K26
第40号土坑	S K100	第48号住居址	S B03	第16号土坑	S K03
第41号土坑	S K66	第49号住居址	S B06	第17号土坑	S K02
第42号土坑	S K63	第50号住居址(F区)	S B02	第18号土坑	S K01
第43号土坑	S K40	第51号住居址(F区)	S B03	第19号土坑	S K134
第44号土坑	S K49	第52号住居址(F区)	S B04	第20号土坑	S K22
第45号土坑	S K50	第53号住居址(F区)	S B09	第21号土坑	S K17
第46号土坑	S K52	第54号住居址(F区)	S B08	第22号土坑	S K67
第47号土坑	S K75			第23号土坑	S K08
第48号土坑	S K54	第 1 号土師器焼成遺構	S X01	第24号土坑	S K25
第49号土坑	S K65	第 2 号土師器焼成遺構	S X15	第25号土坑	S K18
第50号土坑	S K67	第 3 号土師器焼成遺構	S X02		
第51号土坑	S K55			第13号溝	S D06
第52号土坑	S K56	第 1 号土坑	S X11	第14号溝	S D07
第53号土坑	S K68	第 2 号土坑	S X10	第15号溝	S D09
第54号土坑	S K101	第 3 号土坑	S X04	第16号溝	S D18
第55号土坑	S K39	第 4 号土坑	S K11	第17号溝	S D19
第56号土坑	S K61	第 5 号土坑	S K12	第18号溝	S D01
第57号土坑	S K64	第 6 号土坑	S K13	第19号溝	S D02
第58号土坑	S K62	第 7 号土坑	S K14	第20号溝	S D03

遺構番号対照表3

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
第21号溝	県道迂回部溝	第4号住居址	SB22	第2号土坑	SK12
第22号溝	SD14	第5号住居址	SB10	第3号土坑	SK13
第23号溝	SD17	第6号住居址	SB12	第4号土坑	SK11
第24号溝	SD10	第7号住居址	SB11	第5号土坑	SK15
第25号溝	SD11	第8号住居址	SB14	第6号土坑	SK07
第26号溝	SD12	第9号住居址	SB13	第7号土坑	SK01
第27号溝	SD15	第10号住居址	SB17	第8号土坑	SK02
		第11号住居址	SB08	第9号土坑	SK06
第1号畦畔	SL01	第12号住居址	SB05	第10号土坑	SK05
		第13号住居址	SB03	第11号土坑	SK03
第1号畝	SL05	第14号住居址	SB02		
		第15号住居址	SB06と09	第1号溝	SD01
<七源遺跡>		第16号住居址	SB01	第2号溝	SD02
第1号住居址	SB15	第17号住居址	SB04	谷状　地形	SX01
第2号住居址	SB23				
第3号住居址	SB21	第1号土坑	SK14	堰状　遺構	SX03

本 文 目 次

巻首図版
序
凡 例
目 次

第 I 章 調査の経過……1
第1節 調査に至る経過……1
1 いわゆるオリンピック関連道路と埋蔵文化財調査……1
2 試掘調査と本調査の実施……1
第2節 調査の経過（調査日誌抄）……2
1 平成3年度の発掘調査……2
2 平成4年度の発掘調査……4
3 平成5年度の整理……5
第3節 調査体制……5

第 II 章 遺跡の位置と周辺の地形地質……7
第1節 遺跡の位置……7
第2節 遺跡周辺の地形と地質……8
1 長野盆地北西部の丘陵……8
2 高丘・長丘丘陵の地形……10

第 III 章 栗林遺跡……13
第1節 遺跡の概要……13
1 立地地形……13
（1） 概要……13
（2） I 区……13
（3） II 区……13
（4） III 区……17
2 調査の歴史……17
3 遺跡の広がりと調査区……19
（1） 遺跡の範囲……19
（2） グリッドの設定と呼称法……19
4 A区の概要……19
弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代中期・平安時代
5 B区の概要……23
弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代前期・平安時代
6 C区の概要……23
7 D区の概要……23

8　E区の概要……27
平安時代・中世
9　F区の概要……27
旧石器時代・縄文時代中期中葉・縄文時代中期後半・縄文時代後期前葉・縄文時代後期中葉・平安時代・中世
第2節　旧石器時代……30
1　立地と出土層位……30
2　遺物……31
第3節　縄文時代……31
1　概要……31
（1）　位置と立地……31
（2）　遺構……32
A　高位段丘面上
B　高位段丘から後背低地にかけての段丘斜面上部の緩斜面上
C　高位段丘から後背低地の間に形成された段丘斜面下部テラス状平坦面上
D　高位段丘の後背低地谷底部
（3）　遺物……34
2　遺構……34
（1）貯蔵穴……34
A　分布状況……34
B　形態……35
C　埋没状況……35
D　遺物の出土状況……35
E　時期……36
第1～78号貯蔵穴
（2）　土坑……73
第1～22号土坑
（3）　水さらし場状遺構……84
（4）　配石……99
（5）　住居址……100
第1～5号住居址
（6）　土器埋設土坑……103
第1～5号土器埋設土坑
3　遺物……106
（1）　土器……106
第Ⅰ群土器・第Ⅱ群土器・第Ⅲ群土器・第Ⅳ群土器・第Ⅴ群土器・第Ⅵ群土器・第Ⅶ群土器・第Ⅷ群土器・第Ⅸ群土器・第Ⅹ群土器・第Ⅺ群土器・第Ⅻ群土器
（2）　石器……160
打製石斧・円形掻器・石鏃・尖頭器・石鏃未製品・石錐・石匙・両端打撃のあるフレーク磨製石斧・磨石類・石皿・使用面をもつ礫・石棒・丸石・石錘

（3） 石製品 ……268
石製円板・玦状耳飾・玉類・軽石製品・その他の石製品
（4） 土製品 ……269
土偶・動物形把手・甕形土製品・耳飾・玉・土錘・土製円板・ミニチュア土器
第4節 弥生時代 ……275
1 概要 ……275
2 中期後半の遺構（A区） ……275
〔A区の遺構〕
（1） 住居址 ……275
第1～19号住居址
（2） 土坑 ……293
第27～32号土坑
（3） 円形周溝 ……296
〔B区の遺構〕 ……296
（1） 土坑 ……296
第23～26号土坑
〔D区の遺構〕 ……297
（1） 掘立柱建物址 ……297
第1～15号掘立柱建物址
（2） 土坑 ……302
第33～59号土坑
（3） 住居址 ……308
第20号住居址
3 中期後半の遺物 ……312
（1） 土器 ……312
分類・壷形土器・甕形土器・台付甕形土器・浅鉢形土器・片口形土器・有孔浅鉢
形土器・高坏形土器・蓋形土器・その他
（2） 石器 ……323
磨製石斧・環状石斧・石包丁・小形石器・磨石・敲石・石錘
（3） 石製品 ……328
軽石製品・その他
（4） 土製品 ……330
紡錘車・玉・土製円板・ミニチュア土器
4 後期の遺構 ……331
（1） 概要 ……331
（2） 住居址 ……331
第21～30号住居址
5 後期の遺物 ……338
（1） 土器 ……338
壷形土器・甕形土器・高坏形土器・器台形土器・鉢形土器・内彎口縁鉢・有孔鉢

形土器・蓋形土器
（2） 石製品 ……341
石製円板・管玉
（3） 土製品 ……341
紡錘車・ミニチュア土器
（4） その他 ……341
ガラス小玉
第5節 古墳時代 ……345
1 概要 ……345
2 前期の遺構 ……345
（1） 住居址 ……345
第31～33号住居址
3 前期の遺物 ……348
（1） 土器 ……348
壺形土器・甕形土器・高坏形土器・器台形土器・鉢形土器・有孔鉢形土器・蓋
形土器・ミニチュア土器
4 中期の遺構 ……350
（1） 住居址 ……350
第34～42号住居址
5 中期の遺物 ……357
（1） 土器 ……357
甕形土器・壺形土器・高坏形土器・坏形土器・塊形土器・鉢形土器・甑形土器・
鬲形土器・蓋形土器・その他
第6節 平安時代 ……369
1 概要 ……369
2 A区の遺構 ……369
（1） 住居址 ……369
第44・45号住居址
3 B区の遺構 ……371
（1） 住居址 ……371
第46～49号住居址
4 E・F区の遺構 ……374
（1） 住居址 ……374
第50～54号住居址
（2） 土師器焼成遺構 ……376
第1～3号土師器焼成遺構
（3） 土坑 ……377
第1～11号遺構
（4） 土器集中地点 ……381
第1号土器集中

（5） 溝 ……381
第2～8号溝
5 遺物 ……384
（1） 概要 ……384
（2） F区出土の土器 ……384
住居址出土の土器・土師器焼成遺構出土の土器・土坑・土器集中出土の土器・溝出土の土器
（3） A区出土の土器 ……395
住居址出土の土器・その他の土器
（4） 石器 ……399
A 編物石
（5） 土製品 ……399
B 紡錘車
（6） 金属製品 ……399
A 八稜鏡
B 鉄斧
C 刀子
D 釘
第7節 中世 ……401
1 B区の遺構 ……401
2 E・F区の遺構 ……401
（1） 土坑 ……401
第1～25号土坑
（2） 溝 ……406
第13～27号溝
（3） 畦畔・畝 ……409
第1号畦畔・第1号畝
3 遺物 ……415
（1） 土器 ……415
（2） 石器 ……415
石錘
（3） 金属製品 ……415
釘・銅銭

第Ⅳ章 七瀬遺跡 ……418
第1節 概要 ……418
1 中野市周辺の地形 ……418
2 周辺の遺跡 ……419
3 七瀬遺跡の地形的環境 ……420

4　遺跡の範囲と調査区の位置 ……421
5　基本層序 ……421
6　グリッドの呼称と調査の方法 ……421
（1）　グリッドの設定と呼称法 ……421
（2）　調査の方法 ……423
第2節　旧石器・縄文時代 ……424
1　旧石器時代の遺物 ……424
2　縄文時代の遺物 ……424
（1）　土器 ……424
（2）　石器 ……424
打製石斧・石鏃・石錐・不定形石器・楔形石器・凹石
第3節　弥生時代中期 ……426
1　遺構 ……426
（1）　住居址 ……426
第1・2号住居址
（2）　土坑 ……428
第1～5号土坑
（3）　溝 ……431
第1・2号溝
（4）　堰状遺構 ……434
2　遺物 ……434
（1）　土器 ……434
壺形土器・短頸壺・甕形土器・台付甕・浅鉢・高坏・片口土器・蓋形土器
（2）　石器 ……440
磨製石斧・石包丁・凹石
（3）土製品 ……440
紡錘車・土製円板・ミニチュア土器
（4）　木器 ……442
（5）　自然遺物 ……442
獣骨
第4節　弥生時代後期 ……454
1　遺構 ……454
（1）　住居址 ……454
第3～17号住居址
（2）　土坑 ……468
第6～9号土坑
（3）　谷状地形 ……470
（4）　集石 ……474
2　遺物 ……476
（1）　土器 ……476

壺形土器・広口短頸壺・甕形土器・高坏・器台形土器・鉢形土器・内彎口縁鉢・
有孔鉢形土器・蓋形土器・その他の土器
（2） 土製品 ……535
人面土製品・土製勾玉・匙形土製品・紡錘車・土製円板・ミニチュア土器
（3） 石器 ……543
磨製石鏃・管玉・砥石
（4） 金属製品 ……543
銅鏃・鉄鏃・やりがんな
（5） その他の遺物 ……544
ガラス小玉
第5節 平安時代・中世 ……546
1 遺構 ……546
（1） 土坑 ……546
第10・11号坑
2 遺物 ……547
（1） 土器 ……547
（2） その他の遺物 ……547

第 V 章 成果と課題 ……548
第1節 栗林遺跡周辺の地形形成過程 ……548
1 土層堆積と地形形成 ……548
（1） 縄文時代前期以前 ……548
（2） 縄文時代前期以後 ……548
（3） 弥生時代 ……551
（4） 古墳時代以後 ……551
2 地形形成過程 ……554
第2節 縄文時代の貯蔵穴と水さらし場状遺構 ……555
1 貯蔵穴の立地 ……555
2 花粉分析による景観復元 ……556
3 堅果類にかかわる森林植生 ……556
4 貯蔵穴の形態 ……557
5 貯蔵方法の復元 ……557
6 貯蔵量の推定 ……559
7 水さらし場状遺構の構築順 ……560
8 水さらし場状遺構の機能 ……561
9 遺構配置とその変遷 ……565
10 貯蔵穴と水さらし場状遺構発見の意義 ……571
第3節 縄文中期後葉から後期初頭の土器群 ……584
1 中期後葉の土器群 ……584

2　後期初頭の土器群 ……594
第4節　縄文時代の石器 ……596
1　時期と組成 ……596
2　分布 ……596
3　石器の製作 ……596
4　打製石斧の使用痕 ……598
5　小結 ……599
第5節　縄文時代の土製品 ……603
1　土偶 ……603
2　動物形把手と動物形土製品 ……603
3　鳥形土製品 ……605
第6節　弥生時代中期後半の土器群 ……607
1　組頸壺の分類 ……607
2　甕の分類 ……608
3　小結 ……608
第7節　弥生時代後期から古墳時代初頭の土器様相 ……610
1　土器編年 ……610
（1）　問題点の整理 ……610
（2）　段階設定 ……610
A　分析の視点 ……610
B　分析の方法 ……610
C　段階区分 ……611
（3）　在地系土器の変遷 ……611
A　各器種の変遷 ……611
B　在地系土器の変遷類型 ……617
（4）　外来系土器 ……617
A　概要 ……617
B　北陸系土器 ……618
C　東海系土器 ……619
D　その他の系統 ……620
E　並行関係 ……620
（5）　各段階の土器様相 ……620
2　まとめとして－いわゆる庄内併行期の土器様相 ……622
（1）　外来系土器の流入 ……622
（2）　在地系土器の変化 ……623
3　残された課題 ……623
第8節　善光寺平北部の古墳と地域集団　―七瀬・栗林遺跡の古墳時代集落― ……625
1　中野市周辺の古墳 ……625
2　前期古墳の築造 ……626
3　中期古墳の築造 ……627

4　地域集団のすがた ……628
5　周辺の古式須恵器 ……629
あとがき　—栗林・七瀬遺跡の歴史的位置— ……631
栗林遺跡遺構覆土説明 ……632
七瀬遺跡遺構覆土説明 ……646

挿図目次

第 1 図　栗林・七瀬遺跡の位置と地形
第 2 図　中野付近切峰面図
第 3 図　段丘地形区分
第 4 図　調査区
第 5 図　基本土層と地形区分
第 6 図　Ⅰ・Ⅱ区基本土層
第 7 図　Ⅲ区基本土層
第 8 図　グリッド呼称法
第 9 図　グリッド配置図(1)
第 10 図　グリッド配置図(2)
第 11 図　A区の遺構配置
第 12 図　B区の遺構配置
第 13 図　D区の遺構配置
第 14 図　E区の遺構配置
第 15 図　F区の遺構配置
第 16 図　旧石器時代の石器出土分布
第 17 図　旧石器時代の石器
第 18 図　縄文時代遺構配置概念図
第 19 図　縄文時代の貯蔵穴(1)
第 20 図　縄文時代の貯蔵穴(2)
第 21 図　縄文時代の貯蔵穴(3)
第 22 図　縄文時代の貯蔵穴(4)
第 23 図　縄文時代の貯蔵穴(5)
第 24 図　縄文時代の貯蔵穴(6)
第 25 図　縄文時代の貯蔵穴(7)
第 26 図　縄文時代の貯蔵穴(8)
第 27 図　縄文時代の貯蔵穴(9)
第 28 図　縄文時代の貯蔵穴(10)
第 29 図　縄文時代の貯蔵穴(11)
第 30 図　縄文時代の貯蔵穴(12)
第 31 図　縄文時代の貯蔵穴(13)
第 32 図　縄文時代の貯蔵穴(14)
第 33 図　縄文時代の貯蔵穴(15)
第 34 図　縄文時代の貯蔵穴(16)
第 35 図　縄文時代の貯蔵穴(17)
第 36 図　縄文時代の土坑(1)
第 37 図　縄文時代の土坑(2)
第 38 図　縄文時代の土坑(3)
第 39 図　縄文時代の土坑(4)
第 40 図　縄文時代の土坑(5)
第 41 図　水さらし場状遺構(1)
第 42 図　水さらし場状遺構(2)
第 43 図　水さらし場状遺構　部材(1)
第 44 図　水さらし場状遺構　部材(2)
第 45 図　水さらし場状遺構　部材(3)
第 46 図　水さらし場状遺構　部材(4)
第 47 図　水さらし場状遺構　部材(5)
第 48 図　水さらし場状遺構　部材(6)
第 49 図　水さらし場状遺構　部材(7)
第 50 図　水さらし場状遺構　部材(8)
第 51 図　縄文時代の配石遺構(1)
第 52 図　縄文時代の配石遺構(2)
第 53 図　縄文時代の配石遺構(3)
第 54 図　縄文時代の住居址
第 55 図　土器埋設土坑配置
第 56 図　縄文時代の土器埋設土坑
第 57 図　縄文時代遺構出土の土器(1)
第 58 図　縄文時代遺構出土の土器(2)
第 59 図　縄文時代遺構出土の土器(3)
第 60 図　縄文時代遺構出土の土器(4)
第 61 図　縄文時代遺構出土の土器(5)
第 62 図　縄文時代遺構出土の土器(6)
第 63 図　縄文時代遺構出土の土器(7)
第 64 図　縄文時代遺構出土の土器(8)
第 65 図　縄文時代遺構出土の土器(9)
第 66 図　縄文時代遺構出土の土器(10)
第 67 図　縄文時代遺構出土の土器(11)
第 68 図　縄文時代遺構出土の土器(12)
第 69 図　縄文時代遺構出土の土器(13)
第 70 図　縄文時代遺構出土の土器(14)
第 71 図　縄文時代遺構出土の土器(15)
第 72 図　縄文時代遺構出土の土器(16)
第 73 図　縄文時代遺構出土の土器(17)
第 74 図　縄文時代遺構出土の土器(18)

第 75 図　縄文時代遺構出土の土器(19)
第 76 図　縄文時代遺構出土の土器(20)
第 77 図　縄文時代遺構出土の土器(21)
第 78 図　縄文時代遺構出土の土器(22)
第 79 図　縄文時代遺構出土の土器(23)
第 80 図　縄文時代遺構出土の土器(24)
第 81 図　縄文土器(1)
第 82 図　縄文土器(2)
第 83 図　縄文土器(3)
第 84 図　縄文土器(4)
第 85 図　縄文土器(5)
第 86 図　縄文土器拓影(1)
第 87 図　縄文土器拓影(2)
第 88 図　縄文土器拓影(3)
第 89 図　縄文土器拓影(4)
第 90 図　縄文土器拓影(5)
第 91 図　縄文土器拓影(6)
第 92 図　縄文土器拓影(7)
第 93 図　縄文土器拓影(8)
第 94 図　縄文土器拓影(9)
第 95 図　縄文土器拓影(10)
第 96 図　縄文土器拓影(11)
第 97 図　縄文土器拓影(12)
第 98 図　縄文土器拓影(13)
第 99 図　縄文土器拓影(14)
第100図　縄文土器拓影(15)
第101図　縄文土器拓影(16)
第102図　縄文土器拓影(17)
第103図　縄文土器拓影(18)
第104図　縄文土器拓影(19)
第105図　縄文土器拓影(20)
第106図　縄文土器拓影(21)
第107図　縄文土器拓影(22)
第108図　縄文土器拓影(23)
第109図　縄文時代石器(1)－打製石斧〈1〉
第110図　縄文時代石器(2)－打製石斧〈2〉
第111図　縄文時代石器(3)－打製石斧〈3〉
第112図　縄文時代石器(4)－打製石斧〈4〉
第113図　縄文時代石器(5)－打製石斧〈5〉
第114図　縄文時代石器(6)－打製石斧〈6〉
第115図　縄文時代石器(7)－打製石斧〈7〉
第116図　縄文時代石器(8)－打製石斧〈8〉
第117図　縄文時代石器(9)－打製石斧〈9〉
第118図　縄文時代石器(10)－打製石斧〈10〉
第119図　縄文時代石器(11)－打製石斧〈11〉
第120図　縄文時代石器(12)－打製石斧〈12〉
第121図　縄文時代石器(13)－打製石斧〈13〉
第122図　縄文時代石器(14)－打製石斧〈14〉
第123図　縄文時代石器(15)－打製石斧〈15〉
第124図　縄文時代石器(16)－打製石斧〈16〉
第125図　縄文時代石器(17)－打製石斧〈17〉
第126図　縄文時代石器(18)－打製石斧〈18〉
第127図　縄文時代石器(19)－打製石斧〈19〉
第128図　縄文時代石器(20)－打製石斧〈20〉
第129図　縄文時代石器(21)－打製石斧〈21〉
第130図　縄文時代石器(22)－打製石斧〈22〉
第131図　縄文石器(23)－円形掻器〈1〉
第132図　縄文石器(24)－円形掻器〈2〉
第133図　縄文石器(25)－円形掻器〈3〉
第134図　縄文石器(26)－円形掻器〈4〉
第135図　縄文石器(27)－円形掻器〈5〉・石鏃〈1〉
第136図　縄文石器(28)－石鏃〈2〉
第137図　縄文石器(29)－石鏃〈3〉
第138図　縄文石器(30)－石鏃〈4〉
第139図　縄文石器(31)－石鏃〈5〉
第140図　縄文石器(32)－石鏃未製品〈1〉
第141図　縄文石器(33)－石鏃未製品〈2〉
第142図　縄文石器(34)－石鏃未製品〈3〉
第143図　縄文石器(35)－石鏃未製品〈4〉・石錐
第144図　縄文石器(36)－石匙・ピエスエスキーユ〈1〉
第145図　縄文石器(37)－ピエスエスキーユ〈2〉・磨製石斧〈1〉
第146図　縄文石器(38)－磨製石斧〈2〉
第147図　縄文石器(39)－磨製石斧〈3〉
第148図　縄文石器(40)－磨製石斧〈4〉
第149図　縄文石器(41)－磨石類〈1〉
第150図　縄文石器(42)－磨石類〈2〉
第151図　縄文石器(43)－磨石類〈3〉
第152図　縄文石器(44)－磨石類〈4〉

第153図　縄文石器(45)－磨石類〈5〉
第154図　縄文石器(46)－磨石類〈6〉
第155図　縄文石器(47)－磨石類〈7〉
第156図　縄文石器(48)－磨石類〈8〉
第157図　縄文石器(49)－磨石類〈9〉
第158図　縄文石器(50)－磨石類〈10〉
第159図　縄文石器(51)－磨石類〈11〉
第160図　縄文石器(52)－磨石類〈12〉
第161図　縄文石器(53)－磨石類〈13〉
第162図　縄文石器(54)－磨石類〈14〉
第163図　縄文石器(55)－磨石類〈15〉
第164図　縄文石器(56)－磨石類〈16〉
第165図　縄文石器(57)－磨石類〈17〉
第166図　縄文石器(58)－石皿〈1〉
第167図　縄文石器(59)－石皿〈2〉
第168図　縄文石器(60)－石皿〈3〉
第169図　縄文石器(61)－石皿〈4〉
第170図　縄文石器(62)－石皿〈5〉
第171図　縄文石器(63)－石皿〈6〉
第172図　縄文石器(64)－石皿〈7〉
第173図　縄文石器(65)－石皿〈8〉
第174図　縄文石器(66)－石皿〈9〉
第175図　縄文石器(67)－多孔石〈1〉
第176図　縄文石器(68)－多孔石〈2〉
第177図　縄文石器(69)－多孔石〈3〉
第178図　縄文石器(70)－多孔石〈4〉
第179図　縄文石器(71)－多孔石〈5〉
第180図　縄文石器(72)－多孔石〈6〉
第181図　縄文石器(73)－多孔石〈7〉
第182図　縄文石器(74)－多孔石〈8〉
第183図　縄文石器(75)－多孔石〈9〉
第184図　縄文石器(76)－立石
第185図　縄文石器(77)－使用面をもつ礫〈1〉
第186図　縄文石器(78)－使用面をもつ礫〈2〉
第187図　縄文石器(79)－使用面をもつ礫〈3〉
第188図　縄文石器(80)－使用面をもつ礫〈4〉
第189図　縄文石器(81)－使用面をもつ礫〈5〉
第190図　縄文石器(82)－使用面をもつ礫〈6〉
第191図　縄文石器(83)－使用面をもつ礫〈7〉
第192図　縄文石器(84)－使用面をもつ礫〈8〉
第193図　縄文石器(85)－使用面をもつ礫〈9〉
第194図　縄文石器(86)－使用面をもつ礫〈10〉
第195図　縄文石器(87)－使用面をもつ礫〈11〉
第196図　縄文石器(88)－使用面をもつ礫〈12〉
第197図　縄文石器(89)－使用面をもつ礫〈13〉
第198図　縄文石器(90)－使用面をもつ礫〈14〉
第199図　縄文石器(91)－使用面をもつ礫〈15〉
第200図　縄文石器(92)－使用面をもつ礫〈16〉
第201図　縄文石器(93)－使用面をもつ礫〈17〉
第202図　縄文石器(94)－使用面をもつ礫〈18〉
第203図　縄文石器(95)－使用面をもつ礫〈19〉
第204図　縄文石器(96)－使用面をもつ礫〈20〉
第205図　縄文石器(97)－使用面をもつ礫〈21〉
第206図　縄文石器(98)－使用面をもつ礫〈22〉
第207図　縄文石器(99)－使用面をもつ礫〈23〉
第208図　縄文石器(100)石棒〈1〉
第209図　縄文石器(101)石棒〈2〉
第210図　縄文石器(102)石棒〈3〉
第211図　縄文石器(103)石棒〈4〉・丸石
第212図　縄文時代の石製品他
第213図　縄文時代の土製品(1)
第214図　縄文時代の土製品(2)
第215図　弥生時代中期後半の遺構配置（A区）
第216図　弥生時代中期後半の住居址(1)
第217図　弥生時代中期後半の住居址(2)
第218図　弥生時代中期後半の住居址(3)
第219図　弥生時代中期後半の住居址(4)
第220図　弥生時代中期後半の住居址(5)
第221図　弥生時代中期後半の住居址(6)
第222図　弥生時代中期後半の住居址(7)
第223図　弥生時代中期後半の住居址(8)
第224図　弥生時代中期後半の住居址(9)
第225図　弥生時代中期後半の住居址(10)
第226図　弥生時代中期後半遺構出土の土器(1)
第227図　弥生時代中期後半遺構出土の土器(2)
第228図　弥生時代中期後半遺構出土の土器(3)
第229図　弥生時代中期後半の土坑
第230図　弥生時代中期後半遺構出土の土器(4)
第231図　弥生時代中期後半の円形周溝
第232図　弥生時代中期後半の掘立柱建物址の配置

（D区）
第233図　弥生時代後半の掘立柱建物址(1)
第234図　弥生時代後半の掘立柱建物址(2)
第235図　弥生時代後半の掘立柱建物址(3)
第236図　弥生時代後半の掘立柱建物址(4)
第237図　弥生時代後半の掘立柱建物址(5)
第238図　弥生時代後半の掘立柱建物址(6)
第239図　弥生時代中期後半の土坑(1)
第240図　弥生時代中期後半の土坑(2)
第241図　弥生時代中期後半遺構出土の土器(1)
第242図　弥生時代中期後半遺構出土の土器(2)
第243図　弥生時代中期後半の土器(1)
第244図　弥生時代中期後半の土器(2)
第245図　弥生時代中期後半の土器(3)
第246図　弥生時代中期後半の土器(4)
第247図　弥生時代中期後半の土器(5)
第248図　弥生時代中期後半の土器(6)
第249図　弥生時代中期後半の土器(7)
第250図　弥生時代中期後半の土器(8)
第251図　弥生時代中期後半の土器(9)
第252図　弥生時代中期後半の石器(1)
第253図　弥生時代中期後半の石器(2)
第254図　弥生時代中期後半の石器(3)
第255図　弥生時代中期後半の石器(4)・石製品・土製品
第256図　弥生時代後期の遺構配置
第257図　弥生時代後期の住居址(1)
第258図　弥生時代後期の住居址(2)
第259図　弥生時代後期の住居址(3)
第260図　弥生時代後期の住居址(4)
第261図　弥生時代後期の住居址(5)
第262図　弥生時代後期の土器(1)
第263図　弥生時代後期の土器(2)
第264図　弥生時代後期の土器(3)・土製品・石製品
第265図　弥生時代後期の遺構配置
第266図　古墳時代前期の住居址(1)
第267図　古墳時代前期の住居址(2)
第268図　古墳時代前期の土器(1)
第269図　古墳時代前期の土器(2)
第270図　古墳時代中期の遺構配置
第271図　古墳時代中期の住居址(1)
第272図　古墳時代中期の住居址(2)
第273図　古墳時代中期の住居址(3)
第274図　古墳時代中期の住居址(4)
第275図　古墳時代中期の住居址(5)
第276図　古墳時代中期の住居址(6)
第277図　古墳時代中期の土器(1)
第278図　古墳時代中期の土器(2)
第279図　古墳時代中期の土器(3)
第280図　古墳時代中期の土器(4)
第281図　古墳時代中期の土器(5)
第282図　弥生時代後期遺構出土の土器
第283図　弥生時代後期から古墳時代中期遺構出土の土器
第284図　古墳時代中期遺構出土の土器(1)
第285図　古墳時代中期遺構出土の土器(2)
第287図　平安時代の住居址(1)
第288図　平安時代の住居址(2)
第289図　平安時代の住居址(3)
第290図　平安時代の住居址(4)
第291図　平安時代の土師器焼成遺構・土坑(1)
第292図　平安時代の土坑(2)
第293図　平安時代の溝
第294図　平安時代の土器(1)
第295図　平安時代の土器(2)
第296図　平安時代の土器(3)
第297図　平安時代の土器(4)
第298図　平安時代の土器(5)
第299図　平安時代の土器(6)
第300図　平安時代の土器(7)
第301図　平安時代の土器(8)
第302図　平安時代の土器(9)
第303図　平安時代の土器(10)
第304図　平安時代の土器(11)
第305図　平安時代の土器(12)
第306図　平安時代の土器(13)
第307図　平安時代の土製品・金属製品
第308図　中世の溝（B区）
第309図　中世の土坑(1)
第310図　中世の土坑(2)

第311図　中世の溝(1)（E・F区）
第312図　中世の溝(2)（E・F区）
第313図　中世の溝(3)・畝（E・F区）
第314図　中世の土器
第315図　中世以降の石器・金属製品
第316図　七瀬遺跡の位置と地形
第317図　調査区周辺俯瞰図
第318図　調査区東側土層柱状図とプラントオパール分析表
第319図　遺跡の範囲と調査区
第320図　弥生時代中期と後期の遺構配置
第321図　基本層序と調査区土層断面図
第322図　グリッド呼称法
第323図　旧石器・縄文時代遺物出土分布
第324図　旧石器・縄文時代の遺物
第325図　弥生時代中期の遺構配置・住居址
第326図　弥生時代中期の溝(2)と遺物出土状況
第327図　弥生時代中期の土坑
第328図　弥生時代中期の溝(1)
第329図　堰状遺構の検出状況
第330図　弥生時代中期遺構出土の土器
第331図　弥生時代中期の土器(1)
第332図　弥生時代中期の土器(2)
第333図　弥生時代中期の土器(3)
第334図　弥生時代中期の土器(4)
第335図　弥生時代中期の石器
第336図　弥生時代中期の土製品
第337図　弥生時代中期の木器(1)
第338図　弥生時代中期の木器(2)
第339図　弥生時代中期の木器(3)
第340図　弥生時代中期の木器(4)
第341図　弥生時代中期の木器(5)
第342図　弥生時代中期の木器(6)
第343図　弥生時代中期の木器(7)
第344図　弥生時代中期の木器(8)
第345図　弥生時代中期の木器(9)
第346図　弥生時代後期の遺構配置・住居址(1)
第347図　弥生時代後期の住居址(2)
第348図　弥生時代後期の住居址(3)
第349図　弥生時代後期の住居址(4)
第350図　弥生時代後期の住居址(5)
第351図　弥生時代後期の住居址(6)
第352図　弥生時代後期の住居址(7)
第353図　弥生時代後期の住居址(8)
第354図　弥生時代後期住居址断面およびエレベーション
第355図　弥生時代後期の土坑(1)
第356図　弥生時代後期の土坑(2)
第357図　弥生時代後期の谷状地形
第358図　谷状地形とその周辺の土器出土状況
第359図　谷状地形周辺の土器出土状況
第360図　集石と遺物出土状況
第361図　弥生時代後期遺構出土の土器(1)
第362図　弥生時代後期遺構出土の土器(2)
第363図　弥生時代後期遺構出土の土器(3)
第364図　弥生時代後期遺構出土の土器(4)
第365図　弥生時代後期遺構出土の土器(5)
第366図　弥生時代後期遺構出土の土器(6)
第367図　弥生時代後期グリッド出土の土器(1)
第368図　弥生時代後期グリッド出土の土器(2)
第369図　弥生時代後期グリッド出土の土器(3)
第370図　弥生時代後期グリッド出土の土器(4)
第371図　弥生時代後期グリッド出土の土器(5)
第372図　弥生時代後期グリッド出土の土器(6)
第373図　弥生時代後期グリッド出土の土器(7)
第374図　弥生時代後期の土器(1)
第375図　弥生時代後期の土器(2)
第376図　弥生時代後期の土器(3)
第377図　弥生時代後期の土器(4)
第378図　弥生時代後期の土器(5)
第379図　弥生時代後期の土器(6)
第380図　弥生時代後期の土器(7)
第381図　弥生時代後期の土器(8)
第382図　弥生時代後期の土器(9)
第383図　弥生時代後期の土器(10)
第384図　弥生時代後期の土器(11)
第385図　弥生時代後期の土器(12)
第386図　弥生時代後期の土器(13)
第387図　弥生時代後期の土器(14)
第388図　弥生時代後期の土器(15)

第389図　弥生時代後期の土器(16)
第390図　弥生時代後期の土器(17)
第391図　弥生時代後期の土器(18)
第392図　弥生時代後期の土器(19)
第393図　弥生時代後期の土器(20)
第394図　弥生時代後期の土器(21)
第395図　弥生時代後期の土器(22)
第396図　弥生時代後期の土器(23)
第397図　弥生時代後期の土器(24)
第398図　弥生時代後期の土器(25)
第399図　弥生時代後期の土器(26)
第400図　弥生時代後期の土器(27)
第401図　弥生時代後期の土器(28)
第402図　弥生時代後期の土器(29)
第403図　弥生時代後期の土器(30)
第404図　弥生時代後期の土器(31)
第405図　弥生時代後期の土器(32)
第406図　弥生時代後期の土器(33)
第407図　弥生時代後期の土器(34)
第408図　弥生時代後期の土器(35)
第409図　弥生時代後期の土器(36)
第410図　弥生時代後期の土器(37)
第411図　弥生時代後期の土器(38)
第412図　弥生時代後期の土器(39)
第413図　弥生時代後期の土器(40)
第414図　弥生時代後期の土器(41)
第415図　弥生時代後期の土製品
第416図　弥生時代後期のミニチュア土器
第417図　弥生時代後期の石器・金属製品
第418図　土製勾玉・匙形土製品・紡錘車出土分布
第419図　土製円板・ミニチュア土器出土分布
第420図　弥生時代中期～後期の石器・金属製品出土分布
第421図　平安時代の遺構と遺物
第422図　平安時代・中世の遺物
第423図　Ⅶ層の堆積域と地層断面図(1)
第424図　Ⅶ層の堆積域と地層断面図(2)
第425図　地形形成過程(1)
第426図　地形形成過程(2)（高丘面・栗林面の形式）
第427図　微地形変遷
第428図　貯蔵穴の形態
第429図　貯蔵方法の復元
第430図　水さらし場状遺構の構築・部材・民俗例
第431図　水さらし場状遺構の類例
第432図　遺構変遷
第433図　基本土層Ⅶａ・Ⅶｂ層と堅果類の出土
第434図　自然流路断面
第435図　石器の出土状況
第436図　佐久市吹付遺跡出土の土器
第437図　真田町四日市遺跡出土の土器(1)
第438図　真田町四日市遺跡出土の土器(2)
第439図　戸倉町円光房遺跡出土の土器
第440図　立科町大庭遺跡出土の土器
第441図　明科町北村遺跡出土の土器
第442図　千曲川流域遺跡における加曽利Ｅ・圧痕隆帯文・唐草文系の組成
第443図　石器製作のあり方
第444図　打製石斧の摩耗痕の分類
第445図　長野県内出土土偶の類例
第446図　鳥形把手の類例と栗林遺跡における出土分布状況
第447図　甕口縁部の在来・外来系比(左)と外来系土器の系統別比(右)
第448図　在地系甕のモデルの抽出と法量
第449図　各類型の出土量分布
第450図　甕形土器の変遷
第451図　グリッド別外来系土器の出土量分布
第452図　高坏形土器の変遷
第453図　主要三器種の量的推移
第454図　北陸・東海地方との編年対照
第455図　外来系壺・高坏・甕形土器の消長
第456図　周辺の主要古墳

挿 表 目 次

第 1 表　丘陵地の段丘面区分
第 2 表　水さらし場状遺構部材一覧
第 3 表　縄文時代の配石遺構一覧
第 4 表　石棒一覧
第 5 表　石錘一覧
第 6 表　土製円板一覧
第 7 表　ミニチュア土器一覧
第 8 表　磨製石斧一覧
第 9 表　磨石一覧
第10表　敲石一覧
第11表　石錘一覧
第12表　紡錘車一覧
第13表　ミニチュア土器一覧
第14表　ミニチュア土器一覧
第15表　編物石一覧
第16表　銅銭一覧
第17表　磨製石斧一覧
第18表　紡錘車一覧
第19表　木器観察一覧
第20表　弥生時代後期土器分類一覧
第21表　紡錘車一覧
第22表　土製円板一覧
第23表　ミニチュア土器一覧
第24表-1　遺構出土石器一覧(1)
第24表-2　遺構出土石器一覧(2)
第25表　周辺の主要古墳

写 真 図 版 目 次

ＰＬ１　Ａ区全景
ＰＬ２　Ｄ・Ｅ区全景
ＰＬ３　Ｆ区（１次）、（２次）全景
ＰＬ４　Ｆ区（２次）全景
ＰＬ５　遠景
ＰＬ６　旧石器時代、第１号・31号貯蔵穴
ＰＬ７　第７号貯蔵穴、第８号貯蔵穴
ＰＬ８　第10号貯蔵穴、第12号貯蔵穴
ＰＬ９　第15号貯蔵穴、
ＰＬ10　第18号貯蔵穴
ＰＬ11　第19号・22号・27号・50号貯蔵穴全景、第20号貯蔵穴
ＰＬ12　第21号貯蔵穴、第23号貯蔵穴
ＰＬ13　第24号貯蔵穴、第27号貯蔵穴
ＰＬ14　第30号貯蔵穴、第37号貯蔵穴
ＰＬ15　第38号貯蔵穴、第39号貯蔵穴
ＰＬ16　第40号貯蔵穴、第42号貯蔵穴
ＰＬ17　第46号貯蔵穴、第49号貯蔵穴
ＰＬ18　第51号貯蔵穴、第52号貯蔵穴
ＰＬ19　第56号貯蔵穴
ＰＬ20　第56号貯蔵穴
ＰＬ21　第58号貯蔵穴、第59号貯蔵穴
ＰＬ22　第59号貯蔵穴、第62号貯蔵穴
ＰＬ23　第64号貯蔵穴、第69号貯蔵穴
ＰＬ24　第72号貯蔵穴
ＰＬ25　第74号貯蔵穴、第76号貯蔵穴
ＰＬ26　第76号貯蔵穴、第77号貯蔵穴
ＰＬ27　第77号貯蔵穴、第78号貯蔵穴
ＰＬ28　第１号土坑、第２号土坑
ＰＬ29　第３号土坑、第19号土坑
ＰＬ30　第20号土坑、第21号土坑
ＰＬ31　第22号土坑、ＸＩＩ－Ｅ・ＸＶ－Ａ周辺スナップ
ＰＬ32　水さらし場状遺構

ＰＬ33　水さらし場状遺構
ＰＬ34　第１号配石
ＰＬ35　第３号配石、第４号配石
ＰＬ36　第５号配石、第６号配石
ＰＬ37　第７号配石、第８号配石
ＰＬ38　第１号住居址、第３号住居址
ＰＬ39　第４号住居址
ＰＬ40　第５号住居址
ＰＬ41　第１号土器埋設土坑、第２号土器埋設土坑
ＰＬ42　第３号土器埋設土坑、第５号土器埋設土坑
ＰＬ43　自然流路１、自然流路２
ＰＬ44　第１号住居址、第３号住居址
ＰＬ45　第４号住居址、第５号住居址
ＰＬ46　第６号住居址、第７号住居址
ＰＬ47　第８号住居址、第９号住居址
ＰＬ48　第11号住居址、第13号住居址
ＰＬ49　第17号住居址、第27号土坑
ＰＬ50　第29号土坑、第32号土坑
ＰＬ51　第23号土坑、第24号土坑
ＰＬ52　第25号土坑、第２・４・６号掘立柱建物址
ＰＬ53　第２号掘立柱建物址、第４号掘立柱建物址
ＰＬ54　第６号掘立柱建物址、第11号掘立柱建物址
ＰＬ55　第14号掘立柱建物址、第33号土坑の土器
ＰＬ56　第35号土坑、第36号土坑
ＰＬ57　第36号土坑、第37号土坑
ＰＬ58　第39号土坑、第41号土坑
ＰＬ59　第48号土坑、第56・58号土坑
ＰＬ60　第21号住居址、自然流路３
ＰＬ61　自然流路３、第21号住居址
ＰＬ62　第24号住居址、第26号住居址
ＰＬ63　第29号住居址、第31号住居址
ＰＬ64　第27号住居址、第28号住居址
ＰＬ65　第33号住居址、第35号住居址
ＰＬ66　第36号住居址、第37号住居址
ＰＬ67　第38号住居址
ＰＬ68　第39号住居址、第40号住居址
ＰＬ69　第41号住居址、第43号住居址
ＰＬ70　第45号住居址、第50号住居址
ＰＬ71　第51号住居址、第53号住居址
ＰＬ72　第１号土師器焼成遺構、第２号土師器焼成遺構
ＰＬ73　第２号土師器焼成遺構、第６・７号土坑
ＰＬ74　第11号土坑、第７号溝
ＰＬ75　第２号溝、第１号土坑
ＰＬ76　第２号土坑、第３号土坑
ＰＬ77　第19号土坑、第23号土坑
ＰＬ78　第24号土坑、第25号土坑
ＰＬ79　第21号溝、第15号溝
ＰＬ80　第16・17号溝、第１号畦畔
ＰＬ81　縄文土器
ＰＬ82　縄文土器、縄文時代中期後半の土器
ＰＬ83　縄文時代中期後半の土器
ＰＬ84　縄文時代後期初頭の土器
ＰＬ85　縄文時代中期後半～後期初頭の土器
ＰＬ86　縄文時代中期後半の土器、縄文時代後期前葉の土器
ＰＬ87　縄文時代後期前葉の土器
ＰＬ88　縄文時代後期前葉の土器
ＰＬ89　遺構出土の土器（第２・３・５・８・13号住居址）
ＰＬ90　遺構出土の土器（第23・24・28・35・36号住居址）
ＰＬ91　遺構出土の土器（第38号土坑、第22・23・25・28・29号住居址）、グリッド出土の土器
ＰＬ92　遺構出土の土器（第38・39・40・43・44・45号住居址）、グリッド出土
ＰＬ93　遺構出土の土器（第37号住居址）
ＰＬ94　弥生時代後期の玉製品、遺構出土の土器（第29・31・32・33・34号住居址）
ＰＬ95　遺構出土の土器（第45・49号住居址、第１号土師器焼成遺構、第２号土坑、第１号土器集中）、グリッド出土の土器
ＰＬ96　打製石斧
ＰＬ97　打製石斧、小形剥片石器
ＰＬ98　小形剥片石器、磨石類
ＰＬ99　磨石類
ＰＬ100　磨石類、石皿
ＰＬ101　石皿（裏・表）
ＰＬ102　石皿（裏・表）

ＰＬ103　石皿、使用面をもつ礫
ＰＬ104　石皿、使用面をもつ礫
ＰＬ105　使用面をもつ礫
ＰＬ106　使用面をもつ礫
ＰＬ107　使用面をもつ礫、砥石、石棒
ＰＬ108　土製品（土偶・鳥形把手・土錘・耳飾り）、貯蔵穴出土のクルミ
ＰＬ109　石棒・石錘・石製品
ＰＬ110　第56号貯蔵穴出土種子・昆虫、水さらし場状遺構部材
ＰＬ111　水さらし場状遺構部材
ＰＬ112　水さらし場状遺構部材
ＰＬ113　水さらし場状遺構部材
ＰＬ114　水さらし場状遺構部材
ＰＬ115　金属製品（刀子・釘・鉄斧）第４号土坑（七瀬遺跡）
ＰＬ116　第５号土坑、第１号溝周辺
ＰＬ117　第２号溝址、第12号住居址
ＰＬ118　第14号住居址、第11号住居址
ＰＬ119　第16号住居址、第17号住居址
ＰＬ120　第６号土坑、第７号土坑
ＰＬ121　第９号土坑、Ｌ－０４土器集中
ＰＬ122　第10号土坑、遺構出土の土器（第１・２・３・４号住居址）
ＰＬ123　遺構出土の土器（第６・８・９号土坑、第１号溝、谷状地形）
ＰＬ124　遺構出土の土器（谷状地形・集石）グリッド出土の土器（Ｇ・Ｈグリッド）
ＰＬ125　グリッド出土の土器（Ｈ・Ｌグリッド）
ＰＬ126　グリッド出土の土器（Ｍグリッド）出土位置不明土器
ＰＬ127　弥生時代後期の土器
ＰＬ128　弥生時代後期の土製品（人面土製品・土製勾玉・紡錘車・土製匙）弥生時代後期の玉製品、第１号溝出土獣骨
ＰＬ129　高坏、銅鏃、鉄鏃やりがんな、弥生時代中期の木製品
ＰＬ130　弥生時代中期の木製品

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至る経過

1　いわゆるオリンピック関連道路と埋蔵文化財調査

1998年の冬季オリンピック長野開催決定に伴い、会場地周辺の交通網の整備が急がれている。また、平成7年度に予定される上信越自動車道中野インターの供用開始にあわせて、そのアクセス道を整備することも以前からの課題であった。これらの状況の中で、長野県中野建設事務所及び長野県道路公社は県道中野豊野線バイパスとそれに連続する志賀中野有料道路をそれぞれ建設することになった。従来、長野県教育委員会は埋蔵文化財保護について、広域にわたり統一的処理を要する事業(例えば高速道路など)以外の事業への対応は、当該市町村の責任において実施することを原則としてきた。県施工事業は通例、広域にわたらないものであるが、オリンピック開催が県的事業として取り組まれていること、それに伴う会場地及び道路の整備については、大規模かつ緊急を要することを等により、中野市教育委員会としての対応が困難であった。このため、事業を円滑に実施するための検討が関係機関の間で重ねられた。その結果、平成2年、(財)長野県埋蔵文化財センターを調査主体として、中野市内の栗林遺跡及び七瀬遺跡の調査を実施することが決定された。また、この事業を実施するために中野市職員をセンターに派遣することも合意された。

2　試掘調査と本調査の実施

栗林遺跡は長野県中野建設事務所施工の県道バイパスと長野県道路公社施工の有料道路にまたがる。栗林遺跡の従来の周知範囲は、この道路事業区域にはわずかにかかるだけであり、長野県史跡の指定範囲は事業区域外である。平成2年、長野県教育委員会は事業区域のうち周知の範囲外で試掘調査を行い、遺跡範囲が拡大することを確認し、栗林地区のほぼ全域にあたる表面積48,000㎡(うち建設事務所分13,500㎡、道路公社分34,500㎡)を調査対象とし、平成3・4年度に発掘調査を実施することを確定した。

七瀬遺跡は、長野県道路公社の事業区域であり、周知の範囲の南端部がその中にかかることになった。平成3年3月、中野市教育委員会が試掘調査を行い、低地部でも遺物の出土をみたため、江部川以西の表面積3,500㎡を調査対象とし、平成3年度に発掘調査を行うことになった。江部川以東については用地や工程との関係から3年度に試掘を行い、プラントオパール分析から、水田址が存在する可能性が確かめられた。しかし、水田面が予想される－2mまで掘削した場合、異常出水・地盤上昇の可能性が指摘され、発掘調査を行うことが不可能と判断された。また、掘削深が0.5m程度の連続ボックス工法であることから、江部川以東の区域については建設される路盤の下に保存されることとなった。

以上の事業にあたり、平成3・4年度に発掘調査、3・4年度冬期及び5年度に整理作業を実施することを内容とする年度ごとの契約が、長野県中野建設事務所を委託者、(財)長野県埋蔵文化財センターを受託者として締結された。また、中野市と(財)長野県埋蔵文化財センターとの間で、市職員のセンター派遣に伴う協定書が交わされた。

第2節　調査の経過(調査日誌抄)

1　平成3年度の発掘調査

≪栗林遺跡≫当初の調査計画表面積11,500㎡

4月　8日　発掘開始。七瀬遺跡と同時開始の予定が用地未解決のため、調査研究員10名が栗林A地区に集結せざるを得ず。作業員18名。支所は地元集会所を借用。

10日　A区は遺構・遺物が希薄。B区も開始。弥生時代中期土器が出土し始める。

26日　A区一部を残して終了。

5月　1日　E区掘削開始。古墳時代遺物を確認する。

9日　E区で縄文土器・石器を検出。A・B区と3か所での並行となる。

10日　長野調査事務所の百瀬長秀課長(前年度文化課在職時に試掘を担当)と土層の検討。

17日　B区の住居址と思われた落ち込みは、自然の窪地に大量の弥生時代中期土器が投棄されたものと判明、調査終了。

21日　A区、空測。E区の表土剝ぎ本格化。

27日　本日より渡辺調査研究員、奈良国立文化財研究所へ研修出張(環境考古、6月19日まで)。

28日　A区終了。以後、E・F区に集結。作業員34名。中世水田面・ピット群などの調査。

6月　4日　平安時代面の調査。

10日　井戸状石積を検出(後日、縄文時代の水溜めと判明)

13日　次年度予定分の字松原(料金所予定地)地区の試掘開始(～17日)、弥生時代中期・平安時代の住居址を確認。

21日　縄文時代敷石住居址を確認。

25日　作業員不足を補うため、榎田遺跡からの作業員をうけいれる。

27日　作業員51名。これまでの最多記録。

7月　3日　縄文土器・土師器、包含層より多出。

10日　平安時代住居址5棟検出。

18日　B区のうち字松原地区(次年度予定分を先行調査)の調査開始。中島・越・藤沢調査研究員、作業員の半分移動。2地区での並行作業となる。

8月　1日　七瀬遺跡の調査開始、赤塩・斎藤調査研究員移動。長野調査事務所より贄田調査研究員の応援を得る(4年1月31日まで)。

2日　本日までにB区で住居址7棟・溝などを検出・調査。

23日　高丘小学校児童見学。

9月　9日　井戸状石積(縄文時代の水溜)で板材・丸太を確認。松原地区の料金所以南はほぼ終了。

10日　B区のうち料金所予定地の検出作業開始。

17日　E・F区最終面の表土剝ぎ開始、バックホー3台。

20日　高丘小学校児童見学。

21日　支所新築なり、全員で引っ越し作業。

24日　井戸状石積(縄文時代の水溜)の板囲い、全形を露出。

10月　1日　七瀬遺跡の体制を補うため、料金所予定地の調査中断、次年度送りとし、F区及び七瀬遺

跡に全力を投入することになる。

5日　新支所の開所式。

7日　中島・越・藤沢調査研究員、作業員とともに七瀬へ移動。

13日　現地説明会。

17日　雨。この頃雨天多く、作業は困難で遅延。

24日　E区の空撮。

11月　7日　F区の空撮。

12日　最終面の縄文包含層下で土坑確認(後日、縄文時代後期の貯蔵穴と判明)。以後、多数検出。

25日　貯蔵穴から注口土器・石棒など出土。

12月　9日　雪のため調査中止。以後、凍結・降雪のため調査は困難をきわめる。

13日　岡村班長入院。

17日　渡辺誠先生の現地指導。終了式。以後、実測など作業員5～10名。

18日　空撮。

19日　鶴田・中村・入沢調査研究員の応援を得る(25日まで)。

26日　新たに貯蔵穴5基検出。

28日　渡辺・奥原調査研究員、第21号貯蔵穴の写真撮影をもって終了、撤収。事務所にて仕事納め。

終了表面積23,850㎡。

≪七瀬遺跡≫当初の調査計画表面積3,500㎡

6月　18日　江部川以東の試掘(赤塩・土屋・斎藤)。

28日　試掘のプラントオパール分析結果速報により、水田址の存在を強く示唆される。

8月　1日　発掘開始。長野調査事務所より藤沢袈裟一調査研究員の応援を得る(4年1月31日まで)。

調査研究員3名、作業員10名。

8日　調査区西半で礫群中に多量の土器を検出、以後も大量出土が続く。作業員19名。

21日　礫群の検出続行。住居址5棟検出。弥生時代後期と考えられた。

9月　9日　調査区東半のトレンチ掘削開始。

10日　礫群中から人面土製品出土。その他ミニチュア土器・土製品などの出土多し。

25日　礫群の空測。

10月　8日　栗林B区から中島・越・藤沢調査研究員、作業員の応援を得る(終了まで)。作業員28名。

21日　礫群除去開始。

24日　礫群下層の空測。礫群は調査区東半にも広がる。第1号溝で栗林式土器出土。

11月　11日　調査区西半住居址の切り合い激しい。

17日　現地説明会。

19日　調査区西半住居址の調査終了。

25日　調査区東半で住居址確認。

12月　2日　沢田鍋土遺跡の調査に作業員増員、本日58名。

6日　市道撤去。下から住居址3棟確認。

9日　調査区東半住居址の調査終了。

11日　第1号溝(弥生時代後期面)の調査。以後、土器・木製品多出。

16日　第1号溝、弥生時代中期面に達し、鍬出土する。土器も多出。

17日　市道下終了、空測。第1号溝で堰状施設検出。

20日　木製品の取り上げ開始。出水・凍結・降雪のため作業困難。

25日　調査区東半の空測。

26日　実測・撤収。

終了表面積4,000m²。

2　平成4年度の発掘調査

<栗林遺跡>当初の調査計画表面積27,270m²

4月　6日　料金所予定地区(B区)とF区で調査開始。それぞれ調査研究員3名ずつ、作業員22名と42名。

8日　F区南端の段丘上で埋甕・中世溝などを検出。

23日　段丘上の流路跡と思われる堆積土中に縄文土器を多量に包含することを確認。

5月　6日　県道東の一部調査終了。

13日　低地部掘削開始。段丘上、流路跡以外の調査終了。

6月　23日　低地部、平安時代面・弥生時代面の調査開始。

25日　現場プレハブ、県道迂回に伴い移設。

7月　4日　県道迂回路部分の調査終了。

5日　B区、現地説明会。

13日　B区から、奥原・藤沢調査研究員・作業員、D・E・F区に合流、作業員55名。

22日　段丘上の空測。

30日　貯蔵穴の検出開始。

8月　25日　低地部の空測。

9月　20日　現地説明会。

22日　低地部の調査一部終了、以後順次埋め戻し開始。

28日　低地部の空測。

10月　2日　水さらし場状遺構の残存部から木枠出土。

8日　段丘上の調査終了。

13日　斜面部の調査終了。

16日　水さらし場状遺構の調査終了。D区北端部で弥生時代中期土器を多量に包含する河川跡の調査開始。

23日　第56号貯蔵穴からトチ・クルミ・ドングリなど多量に出土。

29日　低地部、最後の空撮、翌日終了。埋め戻し。

11月　2日　D区北端部で弥生時代中期掘立柱建物址・土坑群の調査進む。

20日　同　上　河川跡の空撮。

25日　同　上　土坑群の調査終了。

27日　終了式。

12月　7日　残件家屋撤去、調査開始。

17日　残件家屋部で弥生時代中期掘立柱建物址・土坑群などの調査終了。

18日　撤収。

1月　25日　残件の市道下、調査開始。岡村・渡辺調査研究員、作業員3名。厳冬期、連日降雪のため、困難な調査となる。弥生時代中期掘立柱建物址・土坑群など調査。

2月　23日　途中、中断期間をはさみ、最終的に発掘終了となる。

終了表面積26,150㎡。

県道安源寺上今井停車場線拡幅(1,120㎡)については用地未調印のため実施せず。

3　平成5年度の整理

整理対象遺構・遺物の年度当初の数量は下記のとおりであった。これらについて、平成3・4年度の冬期間から始まった整理が、通年で継続された。

≪栗林遺跡≫

遺構　住居址61・掘立柱建物址9・土坑147・溝24・その他(流路・ピット・土器焼成坑など)

遺物　土器837箱・石器411箱・木製品33箱・金属器1.5箱・その他(自然遺物など)

≪七瀬遺跡≫

遺構　住居址17・土坑11・溝2・その他(流路・ピットなど)

遺物　土器200箱・石器20点・木製品90箱・金属器6点・その他(自然遺物など)

第3節　調査体制

平成3年度	平成4年度	平成5年度
事務局長　塚原隆明	事務局長　峯村忠司	事務局長　峯村忠司
同　総務部長　塚田次夫 (兼長野調査事務所庶務部長)	同　総務部長　神林幹生	同　総務部長　神林幹生
同　調査部長　小林秀夫 (兼長野調査事務所調査部長)	同　調査部長　小林秀夫 中野調査事務所長　関　孝一	同　調査部長　小林秀夫 中野調査事務所長　関　孝一
長野調査事務所長　峯村忠司	同　庶務課長　高野幹郎	同　庶務課長　高野幹郎
中野支所長　堀内規矩雄	同　調査課長　土屋　積	同　調査課長　土屋　積
同　調査課長　土屋　積	同　調査研究員 ≪栗林遺跡≫ 岡村秀雄・渡辺敏泰・奥原　聡・中島庄一(中野市派遣)・斎藤久美(同)・藤沢高広(同)	同　調査研究員 ≪栗林遺跡≫ 中島庄一(中野市派遣) 斎藤久美(同)・岡村秀雄・渡辺敏泰・林　正則・赤塩　仁 ≪七瀬遺跡≫ 赤塩　仁・中島庄一(中野市派遣)・斎藤久美(同)
同　調査員 ≪栗林遺跡≫ 岡村秀雄・北島英巳・渡辺敏泰・越　修一・奥原　聡・林　正則・赤塩　仁・贄田　明・阿藤慎治・鶴田典昭・中村敏生・入沢昌基・中島庄一(中野市派遣)・斎藤久美(同)・藤沢高広(同) ≪七瀬遺跡≫ 赤塩　仁・藤沢製装一・越　修一・阿藤慎治・中島庄一(中野市派遣)・斎藤久美(同)・藤沢高広(同)		

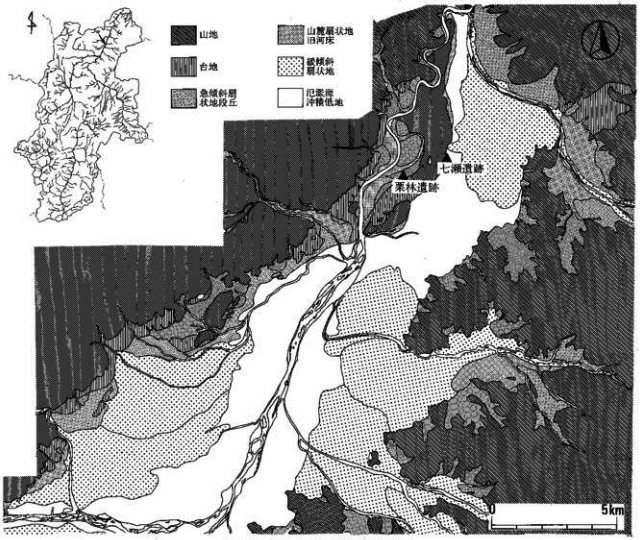
第Ⅱ章　遺跡の位置と周辺の地形地質

第１節　遺跡の位置

高丘・長丘丘陵は千曲川の右岸にあり、栗林遺跡は丘陵の西側、長野県中野市大字栗林字清水尻から松原・山下にまたがり、北緯36°45′、東経138°20′に位置している。七瀬遺跡はここから東へ約１km離れた丘陵の東側、中野市大字七瀬字前山にあり、北緯36°45′、東経138°21′に位置する。

この付近の地形は、長野盆地のほぼ中央を流れてきた千曲川が、高丘・長丘丘陵の狭間に入り、蛇行しながら飯山盆地に向かって流下する部分で、丘陵の西側と東側では異なった地形環境を形成している（第１図）。

すなわち、丘陵の西側は千曲川の形成した河岸段丘が卓越し、栗林遺跡は高丘丘陵西斜面の河岸段丘上に立地している。丘陵地帯の隘路を流れる千曲川は、いわゆる先行性河川で、丘陵地が隆起する以前から



第１図　栗林・七瀬遺跡の位置と地形

ここを流れていたが、隆起後も変わることなく原位置を保って流れているものである。長野盆地中央部の標高は北端で330ｍあるが、隆起以前の丘陵地もかつての長野盆地と同じ高度であったことがうかがわれる。このような丘陵地と河岸段丘地形からなるこの地域は、旧石器時代以来人間の活動が活発で、中野市における遺跡の一大密集地になっている。丘陵地は千曲川の右岸から左岸に連なり、長野盆地の西縁部をなしている。

一方、丘陵地の東側には高社山麓を流れる夜間瀬川が東方一帯に中野扇状地を形成し、その扇端部は長丘丘陵に接している。七瀬遺跡はその接触地点から丘陵の崖錐部にかけて立地し、ここから南方一帯には、延徳沖と呼ばれる千曲川の氾濫原が小布施扇状地まで広がっている。ここでは自然堤防帯の背後が長野盆地最大の低湿地帯になっており、安源寺遺跡や西条・岩舟遺跡群のように、丘陵や扇端部との接点に稲作農耕集落を発展させた。

このように栗林遺跡と七瀬遺跡が立地する地形環境は必ずしも同じではないが、生活環境を大きく左右する気候条件についてはそれほどの差異はみられない。中野市の気候は、年平均気温が11.7℃、１月の平均気温は-1.4℃で、同緯度の富山市や金沢市より低く、仙台市とほぼ同じである。また年平均降水量は1,023mmで、長野市や松本市とほぼ同じである。積雪期間は79日と長いが、最大積雪量は90cmとそれほど多くはない。信越国境の深雪地帯と比較すると、飯山市は中野市の1.5倍、上越市は３倍である。したがって中野市は全般的に内陸性温帯気候に含まれるが、高社山以北から隣接の飯山市では裏日本型の気候に移化している。

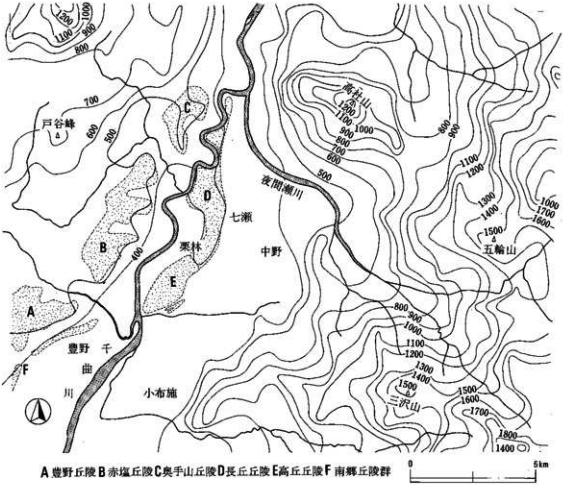
第２節　遺跡周辺の地形と地質

１　長野盆地北西部の丘陵

長野盆地北西の縁部にあたる遺跡周辺には典型的に丘陵が発達している。丘陵上には平坦な地形が残り、丘陵斜面には段丘地形が形成されている。丘陵地帯のさらに西側には、平坦な山頂をもつ山地が連なっている。この山地の平坦面は、古い浸食面で、今から約70万年前の前期更新世から中期更新世にかけてできた原初の準平原と考えられている。このように、盆地北西縁部の地形は、大きくみれば西側の山地と丘陵地帯と盆地部で構成されている。丘陵地帯は階段状の地形をなしており、盆地とは急崖で接している。その境界線は直線的で、盆地東縁部の屈曲に富んだ境界線とは対照的である（第１図）。

西側山地と長野盆地の間の丘陵地帯では、山寄りに豊野丘陵・赤塩丘陵・奥手山丘陵などが、盆地の主軸方向と同じく、南西から北東方向に列をなしている。その南東側には高丘丘陵、長丘丘陵、南郷丘陵群などが同方向に並んでいる。遺跡が立地する高丘・長丘丘陵は、この丘陵地帯の東縁部に位置する（第２図）。これらの丘陵は西側の山地寄りにあるものほど比高・規模とも大きく、基盤の地質も古い傾向を示している。また、西側山地斜面上・丘陵上・丘陵東斜面上にはそれぞれ平坦な地形面があり（第２・３図）、いずれの面も生活の場として利用されている。

平坦な地形面は比高によって数段の地形面群に区分できる（第３図、第１表）。これらの面は標高の高い面から、Ⅰ面…Ⅴ面と呼ぶことにする。同じ高度の平坦面は、盆地の主軸方向と河川の流域にそってよく連続しており、500m以下の面は盆地西縁部に並行して長野市安茂里付近まで断続的に続く。平坦面の表層はローム層や崖錐性の堆積物などに覆われているが、基盤の岩石は前期更新世以後の堆積岩である。山寄りの丘陵上の平坦面は中期更新世初期の豊野層とそれ以前の堆積岩が浸食された面で、その上をローム



A 豊野丘陵 B 赤塩丘陵 C 奥手山丘陵 D 長丘丘陵 E 高丘丘陵 F 南郷丘陵群

第２図　中野付近切峰面図

層が覆っている。一部には豊野層堆積以降の湖沼性堆積物が浸食された面も存在する。

豊野丘陵から長丘丘陵にかけての縁辺部では基盤の豊野層が浸食されて下位の平坦面が形成されているが、高丘面とよばれているⅣ面など、下位段丘面の一部には段丘礫層がのる。また、Ⅲ２面やⅢ１面の一部には南郷層とよばれる後期更新世の湖沼性堆積物と考えられる砂礫層がのる。南郷層は高丘丘陵が平坦部と接するあたりでは盆地側に30°～40°傾いており、南郷層堆積後も地盤運動が続いていることがわかる。

丘陵部の地質構造はきわめて複雑である。丘陵の長軸方向には幾本もの褶曲軸や断層線が認められ、これらと斜交する方向にも断層線が確認される。断層線部は崖錐性堆積物で覆われているため断層面の確認は困難であるが、凹地や小尾根を連続させ、地形的には明確な境界線となっている。背斜軸部の構造は左右非対称の場合が多く、東翼では断層線に近づくにつれて地層が急傾斜をなしている。高丘丘陵の南端の境界部では、豊野層が70°～80°盆地側に傾いており、境界線の前後では同層の堆積面が約170ｍの落差を示すことが確認されている。これらのことから、断層は丘陵側が盆地部につきあげる逆断層であると考えられている。

豊野層の分布高度の違いや段丘面の存在は丘陵部が徐々に隆起したことを示している。小丘陵では褶曲構造の影響を強くうけており、小丘陵の地表面は、背斜軸部で盛り上がっている。丘陵部は、長野盆地北西縁部が地盤運動によって圧縮されたために隆起してできたものと考えられ、古い時期の活動で形成された丘陵面ほど高くなり、新しい丘陵面との間に落差が生じて階段状の地形が形成されたものと思われる。

隆起運動が現代にいたるまで継続していることは、沖積段丘面であるⅤ面の形成や、それ以下の段丘面の形成をみても明らかである。一部に段丘礫層をのせる面もあるが、それぞれの段丘面はかつての盆地面に対応して浸食された面と考えられる。

2　高丘・長丘丘陵の地形

高丘・長丘丘陵は、千曲川の右岸に凸状に張り出した丘陵をさす。通常、南側の低い部分を高丘丘陵、北側の一段高い部分を長丘丘陵と呼ぶ。盆地との境界線は高丘丘陵では左岸と同じ北東方向をとり、長丘丘陵ではほぼ南北方向をとって飯山盆地の西縁線に連続する。境界部は直線状の急崖をなし、断層の存在が推定されている。活断層研究会(1980)では確実度Ⅱ(註1)の活断層としている。丘陵西縁部は赤塩丘陵東縁の急崖で境されるが、ここでも確実度Ⅱの活断層が推定されている。北縁部は千曲川で分断されるが、地形や地質のうえでは奥手山丘陵に連続する。

長丘丘陵の中央部には背斜軸が通っており、平坦面を変形させている。牧山地緒ではこの背斜軸の運動で沖積段丘が千曲川下流側に逆傾斜している。一方高丘丘陵では、丘陵の主軸方向に大小の向斜・背斜軸が平行して走っており、全体的には大きな背斜部を形成している。丘陵面はこの構造とよく調和している。

丘陵上には段丘面がよく発達している。分布状況は第3図のとおりであるが、実際にはさらに細区分される可能性がある。例えば、高丘丘陵の南縁部は北側のⅣ面域よりおよそ30m高く、標高380m前後であるが、北側の標高370m付近には明確な段丘面があり、丘陵の主軸と同様に北側に湾曲している。この面と同じ高度面は千曲川左岸にも認められ、ひとつの面として分離できる可能性がある。これらの面は活褶曲や断層運動の影響で、同一時期の形成面が必ずしも同じ高度にあるとは限らない。長丘丘陵上のⅢ1面は標高400m前後の旧河床跡を残す浸食面であるが、一段低い高丘丘陵上のⅢ2面とは表層の堆積物が酷似しており、同一面の可能性が残る。

Ⅳ面(高丘面)は、更新世末期頃に基盤の豊野層が浸食されて形成された面で、基盤の上に段丘堆積物が礫・砂・シルトの順に6～7mの厚さに堆積している。厚いところでは10mに達する。Ⅳ面上には数本の旧流路跡が認められ、かつての氾濫原の痕跡をとどめている。

今回の調査では、表層のシルト質土の表面下10～15cmから後期旧石器時代と考えられる石器類が検出された。また、Ⅳ面南部の原地緒にある低湿地帯下底部からは放射性炭素測定年代で27,000年前を示す木片が出土している。

安源寺付近でみられる南東から北西方向の直線的な境界線は、地層の傾斜運動と河川の浸食によって形成されたものと考えられる。この運動は段丘礫堆積後も継続しており、地表面の傾きは段丘礫層の傾きとほぼ同じであることが、道路工事に伴う切り通しの断面観察から明らかになった。

浸食域が、Ⅳ面(高丘面)城から栗林面とよばれるⅤ面域に移ったのは、先述の木片年代と同じ頃であろう。Ⅴ面最下部に堆積したピート質層の形成年代は放射性炭素測定年代で11,000年前とでており、おそらく、この頃からⅤ面(栗林面)上に細粒物質が堆積し始めたと考えられる。したがって、Ⅴ面が段丘化するのはさらに後のことで、Ⅴ面上の南大原地緒や立ヶ花地緒に縄文時代前期の遺跡が営まれる5,000～6,000年前以降のことであろう。

また、栗林付近にはⅣ面とⅤ面の間に段丘面が確認される。これはⅤ面形成の過程で滑走斜面側に形成

第1表　丘陵地の段丘面区分

段丘面区分		盆地底との比高(m)	標高 (m)	解析度	分布する丘陵
Ⅰ	Ⅰ1	220 ～ 270	550 ～ 600	大	豊野丘陵・赤塩丘陵・奥手山丘陵
	Ⅰ2	170 ～ 210	500 ～ 540		
Ⅱ	Ⅱ1	130 ～ 160	460 ～ 490	↑	Ⅱ1　豊野丘陵・奥手山丘陵
	Ⅱ2	90 ～ 120	420 ～ 450		Ⅱ2　長丘丘陵・奥手山丘陵 豊野丘陵東斜面
Ⅲ	Ⅲ1	70 ～ 90	400 ～ 420	↓	Ⅲ1　長丘丘陵・豊野丘陵東斜面
	Ⅲ2	40 ～ 60	370 ～ 390		Ⅲ2　高丘丘陵・南郷丘陵群
Ⅳ		10 ～ 30		小	高丘丘陵
Ⅴ		10m未満			草間丘陵

I1
I2
II1
II2
III1
III2
IV
V
扇状地
断　層
推定断層
背斜軸
向斜軸
尾川
赤塩
鳥居川
豊野
千曲川
長沼
小布施
延徳沖
孫井川
栗林
安源寺
厚
牧山
磐佐
A
A'
600m
500
400
300
V
IV
III2面
0
1
2km

第3図　段丘地形区分

された面である。なお、栗林以北では、洪水対策上、明治初年に曲流していた千曲川を人工で直線状に変えている。

丘陵上の段丘面は分布高度・地質ともに豊野丘陵東縁部から蓉佐にかけての千曲川左岸の段丘面によく対応する。このことは、両地区が同じ地形面を形成していた時期があったことをうかがわせる。また左岸に比べて広い面積をもつ右岸の段丘面は西に向かって徐々に分布高度を下げており、浸食域が最終的に西に移動してきたことを意味している。これは丘陵東縁部が現河床部より大きく隆起したためであると考えられる。井上春雄は「千曲川が現流路をとったのは、丘陵西部の向斜軸の構造運動に関して行なわれた低降運動が働いたためである」としている。高丘・長丘丘陵の東側斜面には河岸段丘の形成がなく、千曲川が東側の中野扇状地の末端を北流した痕跡はみあたらない。千曲川は丘陵部が隆起する前から丘陵にあたる部分を流れていたが、隆起が始まった後も丘陵内に流路を維持しながら流れ、主流路を徐々に現河床部に移したと考えられる。

註

註１　活断層研究会編　1980　『日本の活断層』による。

確実度IIとは、活断層であると推定されもの。すなわち、位置・変位の向きも推定できるが、活断層であることを決定づける資料に欠けるもの。断層崖と思われる地形の両側の地形面が時代を異にする場合などが含まれる。

引用・参考文献

赤羽　貞幸　1982「長野盆地西縁部における地質構造と丘陵の形成過程」『地団研専報』第24号

井上　春雄　1962「信濃川河系にそう礫層堆積地形とその意義－その３－」『信州大学教育学部研究論集』第13号

豊野層団体研究グループ　1977「長野盆地西縁部の第４系」『地質学論集』14

活断層研究会　1980『日本の活断層－分布図と資料』東京大学出版会

小林博美・斎藤豊　1982「長野盆地北西縁部長丘丘陵の変動地形」『信州大学志賀自然教育研究施設研究業績』第20号

中野市　1981『中野市誌自然編』

第Ⅲ章　栗林遺跡

第1節　遺跡の概要

1　立地地形

(1) 概　要

栗林遺跡は栗林面(段丘分類Ⅴ面)から高丘面(段丘分類Ⅳ面)にかけて立地する。栗林面は、下流部に向かって逆に傾く沖積段丘面である。栗林集落付近での千曲川水位面との比高はおよそ10m、段丘北端部は18～20mである。栗林面が下流側に逆傾斜するのは、段丘の北端部を活褶曲軸が通過しているためである(第5図)。北端部ではこの活動にさらに小扇状地の形成が加わって比高を増大させている。

段丘の西縁部は旧千曲川によって浸食され、ほぼ垂直の段急崖が連続している。一方、段丘の中央部分は、逆傾斜がほぼ水平に戻る傾斜変換点となっている。この付近の段丘面上を、南側の高丘面上から流れ下った小河川が横断し、段丘面上に形成されている自然堤防帯を分断する。この小河川の南側には、部分的になだらかな傾斜をもつ段丘斜面が形成され、また段丘崖と千曲川の旧河道の間には小規模な自然堤防帯と後背低地が形成されている。また、段丘面は北部で突然切れて、それ以北には連続しない。

大まかな地形の連続から、便宜的に、段丘面の途切れたところ以北の崖錐面上をⅠ区、段丘北端から自然堤防域までの南斜面をⅡ区、後背低地部から高位段丘上までをⅢ区に分けて立地地形を説明する。なお、遺構や遺物の説明では、遺構のまとまりや微地形の違いによって、これをA～F区に細分している。Ⅱ区はA～D区、Ⅲ区はE～F区となる(第4図・第5図)。

(2) Ⅰ　区

Ⅰ区は旧河川の攻撃斜面にあたり、山脚部が激しく側浸食をうけている。このため山腹には崩落地形が連続して急斜面を形成している。斜面下部には崩落土によって段丘状の地形が形成されている。

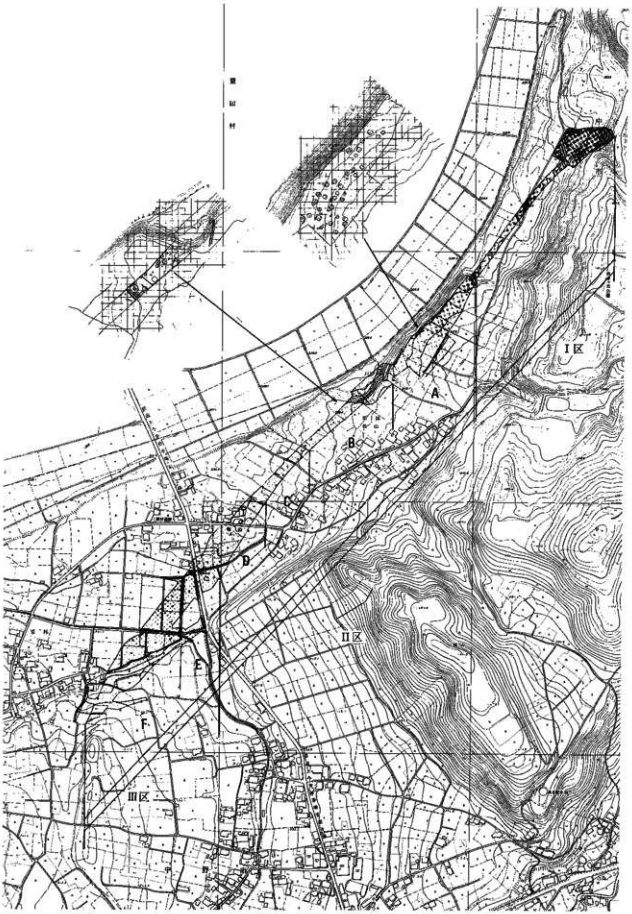
段丘状地形の緩傾斜地は耕作土が40cmあり、その下位は礫、粗粒砂、粘土などが混合した崩落土である。地表下3mにはピート質層が認められ、その放射性炭素年代測定は1820±130B.P.で、その直上から出土した木片の年代は、900±140B.P.であった。山腹には新しい崩落箇所がみられることから、少なくとも弥生時代以降たびたび崩落を繰りかえしていたものと考えられる。

(3) Ⅱ　区

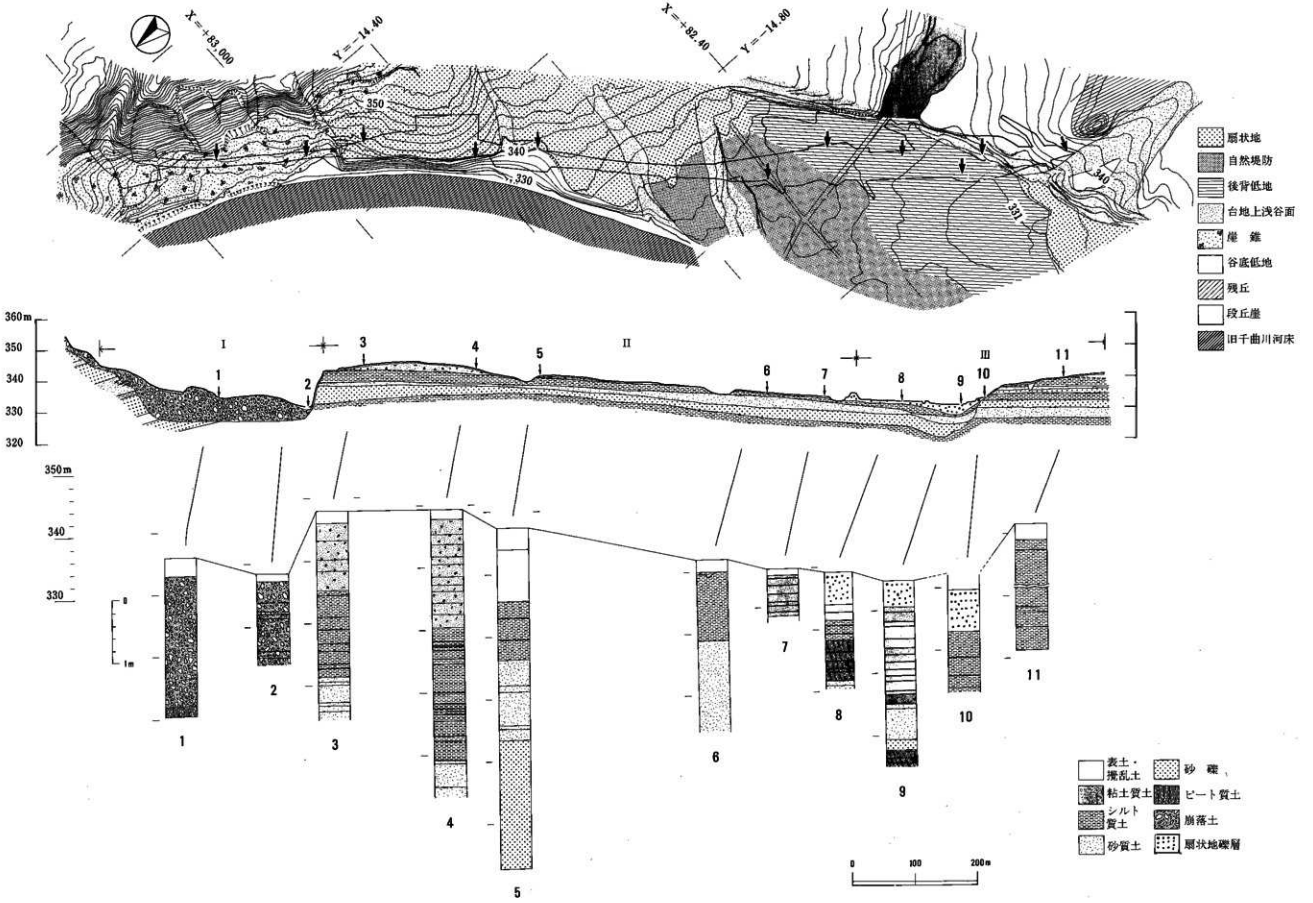
Ⅱ区は段丘面が逆傾斜した部分にあたり、地表面は西及び南西方向に傾斜している。段丘面上には丘陵部から平行して流れ下る2本の小河川によって、小規模な複合扇状地が形成されている。A区と、自然堤防上のD区との標高差は約14mである。栗林面は段丘堆積物で構成されており、下から、礫・砂・シルトの順に7～8mの厚さに堆積している。扇状地礫層はこの上に堆積する(第6図)。

扇状地礫層はA区で約2mの厚さで、C区に向かって厚さを減じる。C区の西側には砂礫層の堆積はみられず、扇状地の広がりはせいぜいC区の南端までである(第5図)。

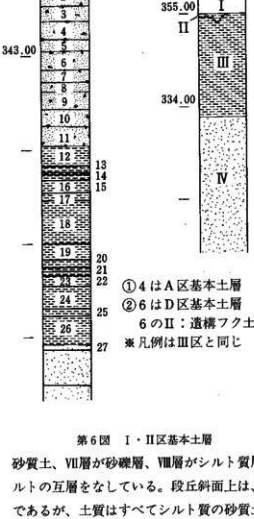
D区との境は粘土採掘によって地形が改変されており、現在は溝部となっている。この下部には弥生時代の自然流路が埋没している。埋没河川の弥生時代中期の遺物包含層からは、稲のプラントオパールが、



第４図　調査区　(1/7500)



第5図　基本土層と地形区分



第6図　Ⅰ・Ⅱ区基本土層

1g中5,200個の割合で検出されている。水が得やすいなどの自然条件からも、C区南部では稲作が行われた可能性が考えられる。

D区は典型的な自然堤防域であるが、段丘崖縁辺部では低湿地帯に移化する。なお、扇状地の形成は、8,000～9,000年前以降と考えられる。

(4) Ⅲ　区

Ⅲ区は微地形で区分すると、ア、自然堤防東側の後背低地部、イ、後背低地部南縁の溝部、ウ、高位段丘の段丘斜面部、エ、高位段丘面上に4区分できるが、遺構のまとまりからは、E・Fの2地区に区分できる。E区にはアが、F区にはイ～エが該当する(第423図の①)。

E区は自然堤防の南東斜面にあたり、溝部に向かってわずかに傾斜する。F区は先述した3つの異なった地形で構成されるが、縄文時代前期頃から基本的に変わらない。イ区の表面下には、幅40m，深さ1m前後の幅広い谷地形が埋没している。ウ区は、斜面下部のテラス状平坦部と、上部の緩斜面部からなる。エ区の高位段丘面は、北側と東側の小河川に向かって緩やかに傾斜する。

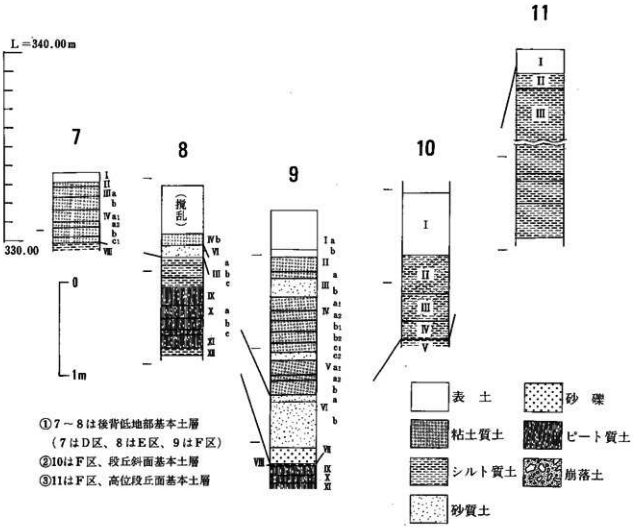
層位的にはアとイが共通で、他の2区を合わせると、大きくは3区分できる。ただし、小さな溝の存在や高低差、耕作の有無によって微妙に変化している。

低地部の土層はⅤ層以上が洪水砂を含む粘土質層、Ⅵ層が砂質土、Ⅶ層が砂礫層、Ⅷ層がシルト質層、Ⅸ～ⅩⅠ層がピート質の砂質シルト層、ⅩⅡ層以下は砂・シルトの互層をなしている。段丘斜面上は、上部が耕作による撹乱土層、Ⅲb・Ⅳ層が縄文時代遺物包含層であるが、土質はすべてシルト質の砂質土である。段丘上部は表土を除いては黄灰色のシルト質層から構成されている(第7図)。なお、段丘斜面のⅣ層以下には上位段丘面上から供給されたシルト質層が堆積している。

2　調査の歴史

栗林遺跡発見の端緒は1931年、瓦焼用粘土採掘場から弥生時代中期の土器片を採集したことに始まる。神田五六が最初に土器を採集した地点は、大量の粘土採掘のために地形が変化しているが、現在考えられる栗林遺跡の東南隅に相当する。偶然、当時粘土採掘に従事していた人の話を聞くことができたが、それによると、神田は遺物の採集を粘土掘りの職人に依頼していたという。粘土を採掘していると部分的に黒土の部分があり、そこから遺物が出土することを職人達は経験的に知っており、黒土は不要な部分であったが、親方の目を盗んで、とくにその部分は慎重に採掘したという。この資料は1936年、「北信栗林の土器」と題して雑誌『考古学』に発表された。

以後、栗林遺跡出土の弥生土器はその特徴的な形態や文様から、学会の注目するところとなり、1948年、神田五六・坪井清足等、京都大学と地元研究者によって、第1次調査が行われた。小規模ながら、調査はA～H地点まで広い範囲に試みられ、D地点において竪穴住居址を検出し、住居址覆土一括資料を得た。



第７図　Ⅲ区基本土層

さらに、1950年、小野勝年等が中心となって、Ｄ地点に隣接する部分をトレンチで調査している。その際は謄写印刷による調査概報が出版されたのみであるが、後に、この第２次調査資料は桐原健によって再検討が加えられ、栗林式土器を考えるうえで重要な資料となった。

以後、開発に伴う調査が10回ほど実施されてきたが、いずれも小範囲を調査したもので、検出した遺構数や遺物の出土量は少ない。これらの調査の中で、範囲確認を行った第４次調査と、多くの資料および環濠状の溝や竪穴住居址を検出した第10次調査の成果は注目される。

範囲確認調査は遺跡の位置する段丘面の広範囲に、合計242ヶ所テストピットを設定した。その結果、遺物の密度が高い地域は段丘面上に発達した自然堤防上であることが明らかとなり、弥生時代中期の栗林遺跡もこの範囲を中心としたものと推測され、自然堤防の背後にある低地(後背湿地)には水田址の存在が予測された。

また、第10次調査で検出された大溝は環濠の可能性も指摘されており、住居址とともに、栗林遺跡が大規模な弥生時代中期の集落址である可能性が高まった。

しかしながら、古くからの研究史をもつにもかかわらず、部分的調査にとどまっていたため、遺跡の全体像は不明瞭なままであった。

3　遺跡の広がりと調査区

(1)　遺跡の範囲

栗林遺跡は先述したように、河岸段丘面上の自然堤防(長さ500m、幅50m)を中心に広がり、その南側に位置する低地に水田址が埋没する単独の遺跡であるとされていた。

ただし、調査に先立つ遺跡の確認調査では、低地から縄文時代の遺物が検出され、近隣に縄文時代の遺跡の存在が予測された。

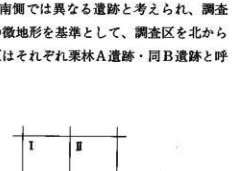
しかしながら、調査の結果は予想に反し、栗林遺跡を中心とした地区全体に縄文時代から中世までの遺跡が断続的に、しかも広い範囲に営まれていたことが明らかになった。したがって、栗林遺跡は一つの遺跡というよりも、高い密度で各時代の複数の遺跡が含まれる遺跡群としてとらえた方がよいであろう。

また、調査区は南北に約1.5kmにおよんでおり、調査区の北側と南側では異なる遺跡と考えられ、調査区を一括して取り扱うには無理がある。そこで出土遺構や調査区の微地形を基準として、調査区を北からA～Fの6区に便宜的に分けて説明したい(第6図)。これらの地区はそれぞれ栗林A遺跡・同B遺跡と呼称すべきかもしれない。

(2)　グリッドの設定と呼称法(第8図)

グリッドは国家座標を利用して、200m×200mの大グリッド(ローマ数字で表記)を調査区全体にかかるように設定し、大グリッドを40m×40mの中グリッド(アルファベットで表記)に分割した。大グリッドの西から東の方向にA・B・・・と順に付し、Fから西に戻る。以下、同様に呼称し、Yで終わる。中グリッドはさらに8m×8mの小グリッド(算用数字で表記)に分割した。小グリッドも中グリッドと同様に西から東へ順に1・2・3…と呼称し、6から西にもどり、25で終わる。したがって、本調査区の最初のグリッドはⅠ－A－01と表現される。

なお、包含層一括遺物の取り上げは小グリッド単位で行った。



第8図　グリッド呼称法

4　A区の概要

調査区の最も北側に位置し、千曲川の河岸段丘上に形成された小扇状地形の地区をA区とした。弥生時代中期～平安時代にかけての集落が検出されている。

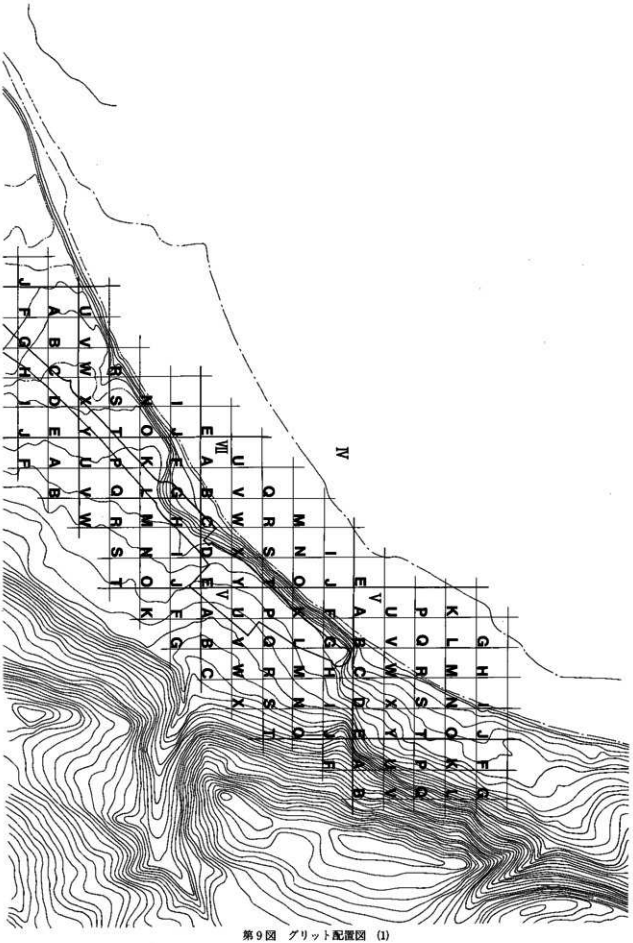
西に面した河岸段丘と旧千曲川の比高差は約10m、奥行きは広いところで約200m、狭いところで100mほどある。調査区は河岸段丘の先端にそって設けられ、広いところで段丘の先端から100m、狭いところで50mほどの奥行きがあり、河岸段丘面の川寄りの半分を調査したことになる。

したがって、いずれの時代の集落址もその一部を検出したものと考えられ、集落址は、さらに河岸段丘の奥側、東側の未調査地に広がっていると思われる。

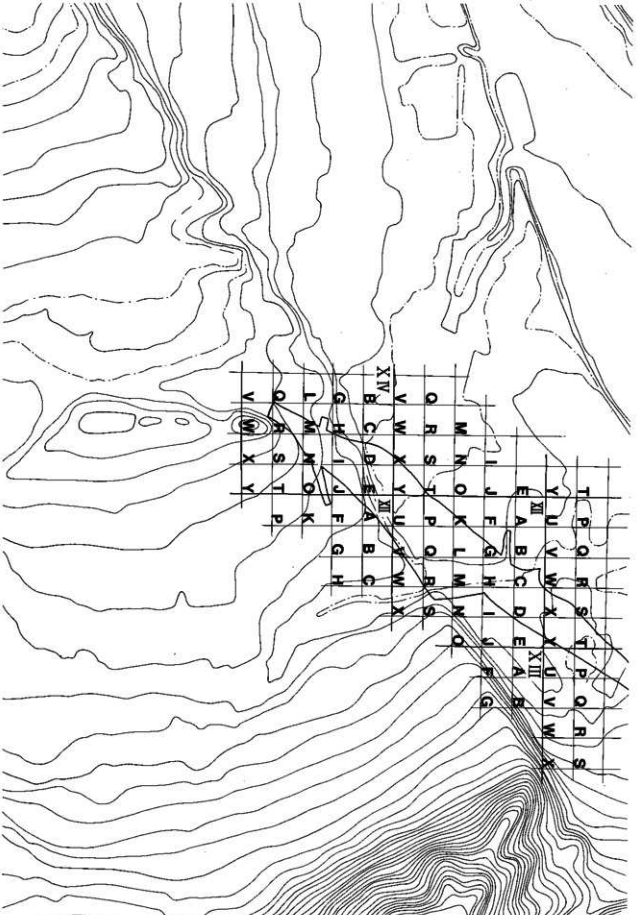
弥生時代中期

住居址17棟、土坑4基、円形周溝1基が検出された。第13号住居址を除いて住居址は調査区の南側部分に集中し、土坑は住居址群内に散在する。おそらく、集落は第13号住居址を北限として、A区南側部分に広がると思われる。

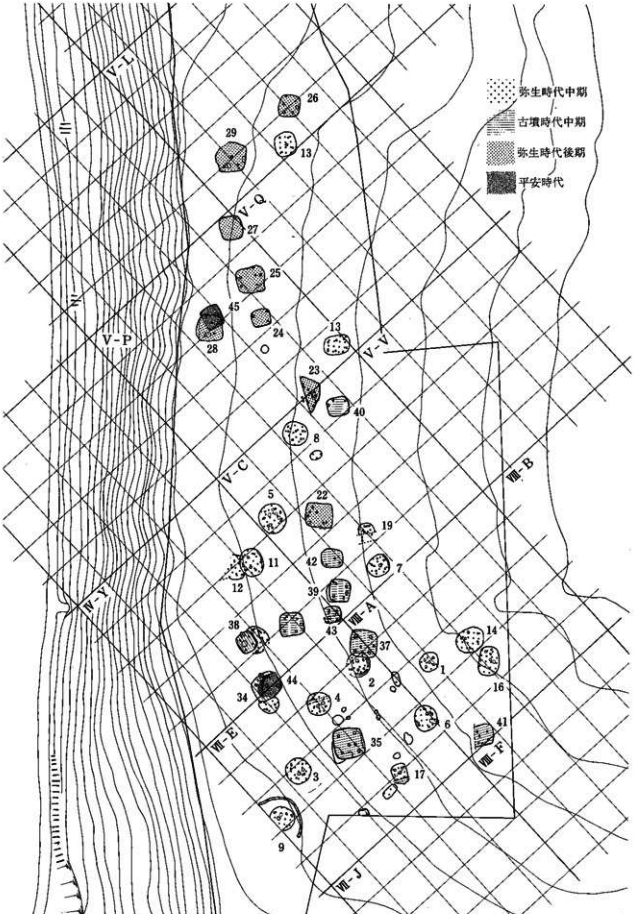
住居址の平面形には円形と長方形の二者がある。また、地床炉が検出できたものとそうでないものとがある。柱穴の配置はいずれも不明瞭であった。



第９図　グリット配置図 (1)



第10図　グリット配置図 (2)



第11図　Ａ区の遺構配置

弥生時代後期

住居址８棟が検出されている。第22号住居址を南限として、弥生時代中期とは反対に調査区の北側を中心に分布し、東側の未調査区に広がるものと思われる。

住居址の平面形はいずれも方形である。

遺物は箱清水式土器と東海・北陸地方の外来系土器が出土している。

古墳時代中期

住居址９棟が調査区の南側で、弥生時代中期の住居址群と重なるように検出されている。平面形はいずれも方形で、柱穴も弥生時代のそれと比較すると整っている。

注目される遺物としては第34号住居址から検出された５世紀末の須恵器高坏がある。また、第38号住居址では完形土器約20個体が床面上に置き去られたかのように出土し、当該期の良好な土器のセットをなしている。

平安時代

住居址２棟が距離をおいて検出されている。うち、第45号住居址からは八稜鏡が出土している。

5　Ｂ区の概要

Ａ区に続く河岸段丘面であるが、Ａ区・Ｃ区と河岸段丘を横切る小河川で画される長さ約300ｍ、奥行き約200ｍの西向き河岸段丘面をＢ区とした。南に向かって傾斜する。調査区は幅約20ｍで段丘面の中程を横切るように設けられた。

遺構はＢ区のほぼ中央部のやや標高が高い部分を中心に検出され、遺構の分布密度はほぼ同じであるが、調査面積が狭いため遺構の数はＡ区に比べて少ない。

弥生時代中期

井戸状の土坑が３基検出されている。時期的にはＡ区の住居址群よりも新しい。

弥生時代後期

住居址４棟が検出されている。いずれも方形である。

第30号住居址からガラス小玉が出土している。

古墳時代前期

住居址１棟が検出されている。

平安時代

住居址５棟が検出されている。

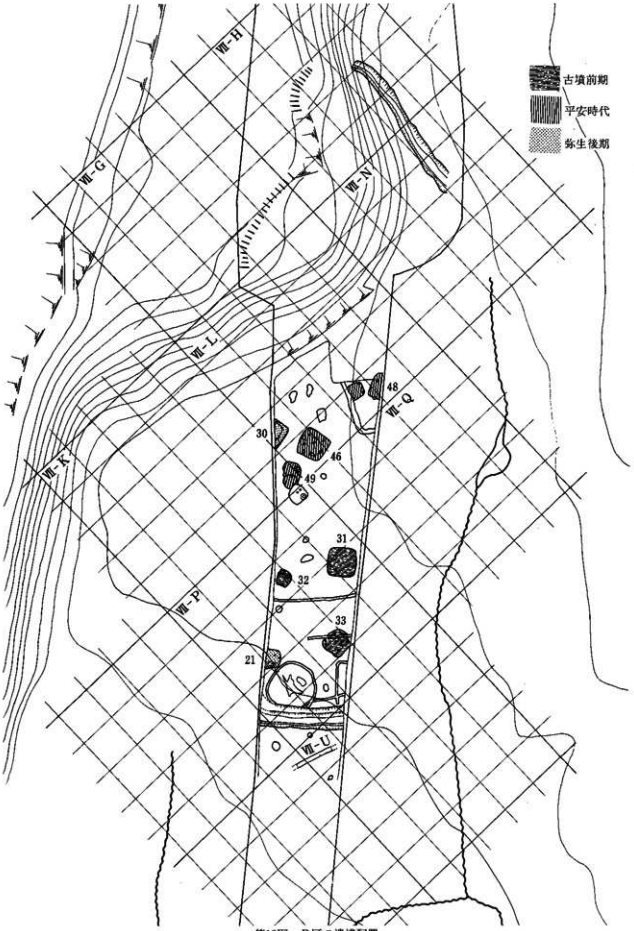
6　Ｃ区の概要

Ｃ区はＢ区に続く河岸段丘であるが、Ｂ区・Ｄ区とは段丘面を横切る小河川で区切る。南に向かって傾斜する。

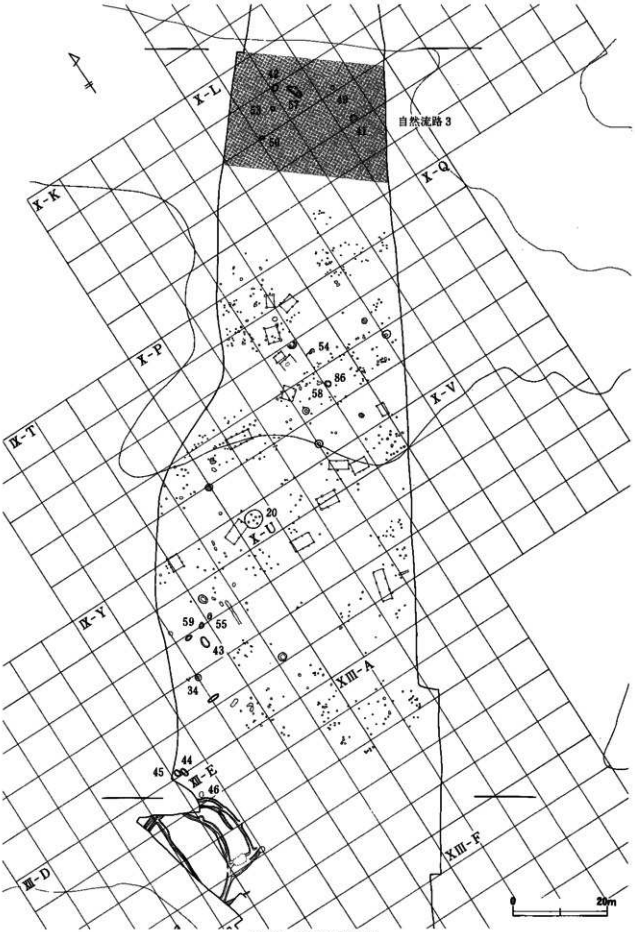
Ｃ区は試掘トレンチによって調査したが、遺物・遺構は検出されなかった。

7　Ｄ区の概要

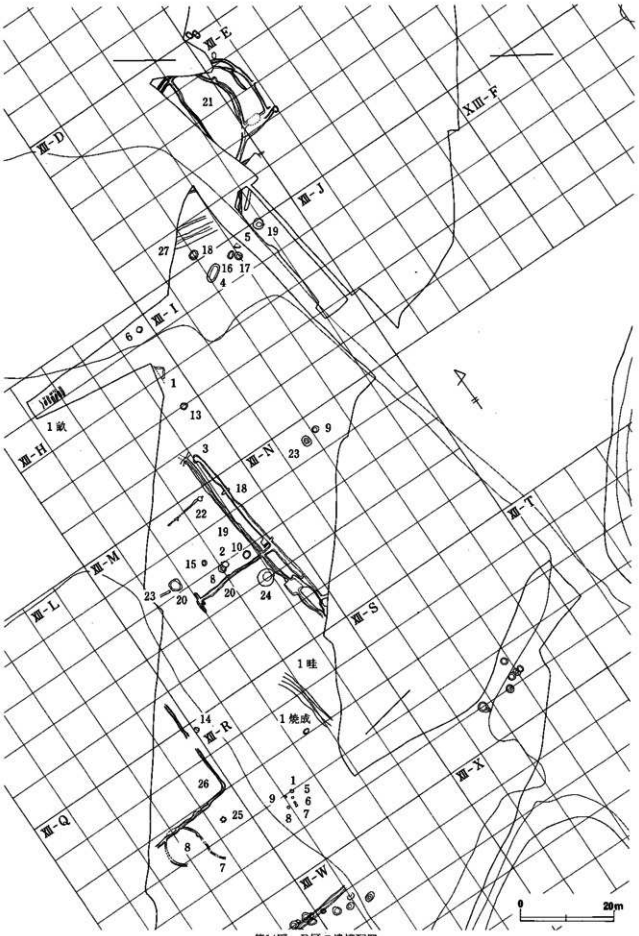
Ｄ区はＡ区などと同じ段丘面上にある。段丘面はＣ区から徐々に奥行きが深くなり、Ｄ区付近では先端から350ｍほどになる。さらに、Ｃ区とＤ区の境界あたりから、河岸段丘面上には自然堤防が形成されており、Ｄ区はこの自然堤防を幅約50ｍで横切る形になっている。位置的には段丘面の中程よりやや内側部分にあたる。



第12図　Ｂ区の遺構配置



第13図　D区の遺構配置



第14図　E区の遺構配置

D区からは弥生時代中期後半(栗林式期)の掘立柱建物址15棟、住居址1棟、井戸状の土坑、墓と考えられる土坑23基が検出されている。

県史跡の栗林遺跡はD区と同じ自然堤防上に位置し、その間に小支谷状の窪地が存在していたかもしれないが、これまでの調査結果等から、同じ集落址ではないかと考えられる。

県指定史跡の部分は主に竪穴住居址を中心とした集落と考えられ、D区の堀立柱建物址を中心に構成されている部分とは好対照をなしている。栗林遺跡の集落構造を考える上で重要である。

堀立柱建物址は栗林式期の後半と考えられ、1×2間、1×3間、1×4間のものなどがある。

8　E区の概要

D区に形成された自然堤防の後背湿地にあたる部分をE区とした。そのほぼ中央にある小河川(谷底部)によってF区と便宜的に区分している。

平安時代

土師器焼成遺構1基・土坑6基・溝2本が検出されている。

中世

井戸2基・土坑22基・溝8本・畦畔1基・畑址1基が検出されている。

9　F区の概要

D区から続く後背湿地と高位段丘面を含めてF区とした。高位段丘面と後背湿地という異なる地形を含むが、縄文時代の遺構の広がりを目安として区分した。

F区では旧石器時代・縄文時代中期中葉から中世の遺構や遺物が検出されている。とくに、縄文時代中期後半から後期前葉にかけては、住居址(5棟)・貯蔵穴(78基)・水さらし場状遺構が検出され、縄文時代の食料貯蔵や加工を考えるうえで重要な情報を得ることができた。

旧石器時代

高位段丘面上に遺物の集中域が1箇所ある。出土した石器類は同じチャート製で、ナイフ形石器・掻器各1が検出されている。

縄文時代中期中葉

わずかな土器片を検出している。

縄文時代中期後半

住居址が高位段丘面上に1棟確認されているが、その他に住居址の痕跡と思われる柱穴や焼土を検出しているので、集落が営まれていた可能性は高い。

出土土器は加曽利E式土器様式第V段階のものである。

縄文時代後期前葉

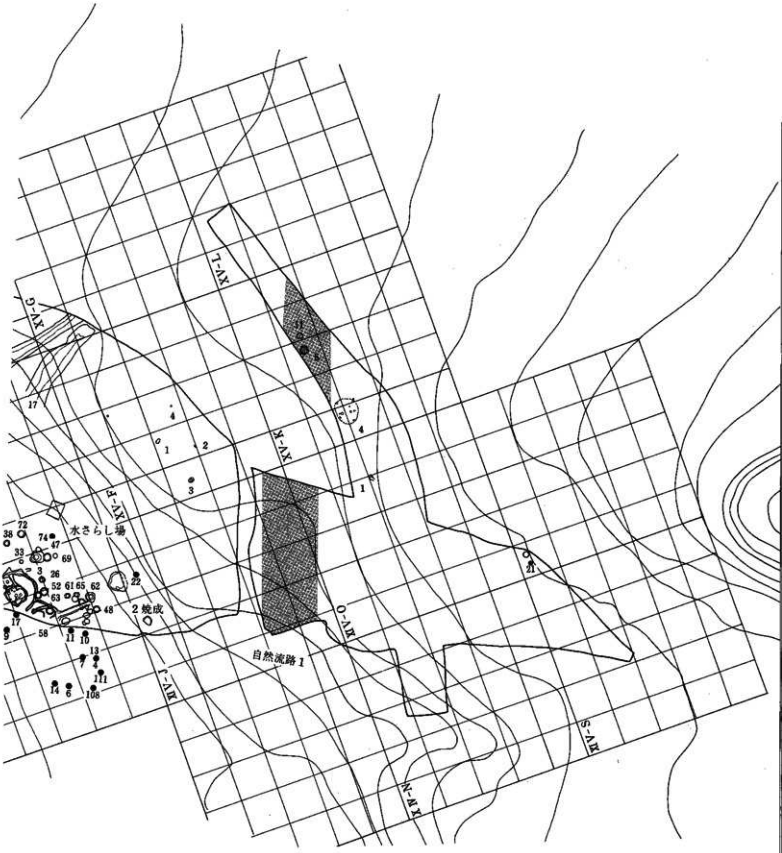
植物性食料の貯蔵や加工に伴うと考えられる遺構が検出された。貯蔵穴・住居址・埋甕・配石等が検出されている。

貯蔵穴群は高位段丘面の麓の後背湿地の部分に位置し、7群に細分される。

縄文時代後期中葉

水さらし場状遺構1基と貯蔵穴が検出されている。後期前葉から継続して利用されたものであろうか。水さらし場状遺構は高位段丘崖の裾にある湧水と、湧水が流れる小河川を利用し、小河川の谷を堀りこんで、木枠を埋めこみ、底部、側面部に板材を隙間なく組んだものである。

第15図の1　F地区の概要


水さらし場
2 焼成
自然流路 1
IV-L
IV-G
IV-K
IV-J
IV-O
IV-F
IV-S
IV-N

平安時代

高位段丘面と後背湿地の間に形成されたテラス状の平坦面に、住居址5棟・溝5本・土師器焼成遺構2基・土坑5基が検出されている。

遺物はロクロを利用した甕や坏がある。

中世

平安時代と同様の立地で、土坑3基と溝7本が検出されている。

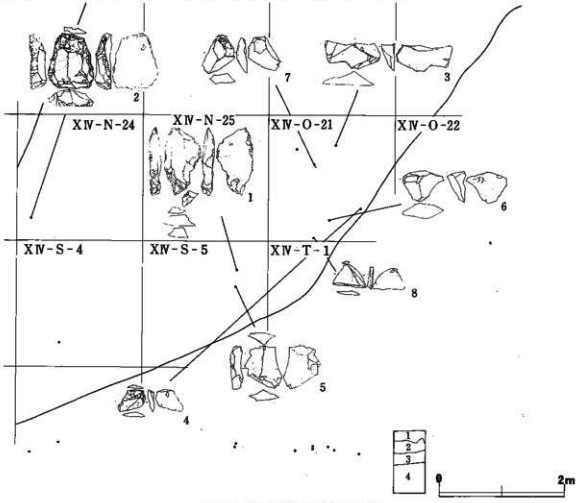
遺物としては中世カワラケや珠洲焼の甕・青磁碗が検出されている。

第 2 節　旧 石 器 時 代

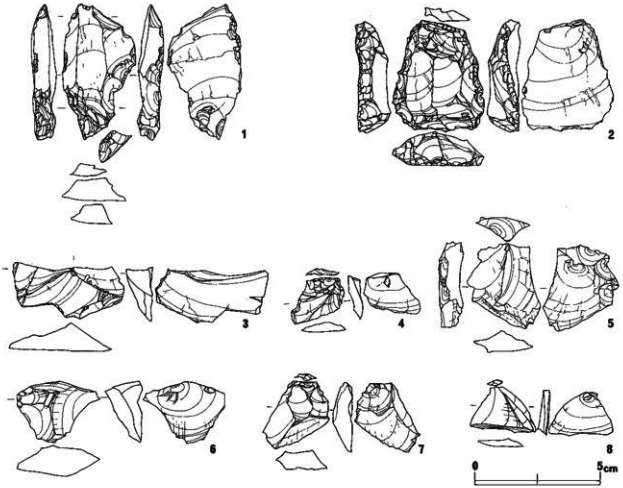
1　立地と出土層位

旧石器時代の遺物集中域がE地区のXIV区－O－21グッリドを中心に一箇所検出された。遺物出土総数10点、4m×2m範囲の規模の小さなものである。分布状態を見ると調査区の外側に分布が広がるようであり、遺物分布集中域の周縁を調査したものと思われる。

集中域は高位段丘面の段丘崖からやや奥まった部分に位置する。周辺は耕作のためか削平が著しく、耕作土下の第2層から検出されている。基本層序は第1層耕作土、第2層明黄褐色砂質シルト層、第3層浅黄色砂質シルト層である。第3層の堆積年代は18,000年前と推測される。



第16図　旧石器時代の石器出土分布



第17図　旧石器時代の石器

2　遺　物

ナイフ形石器１点・掻器１点・剥片８点である。うち、２点が黒曜石製、他はすべてチャート製、同一母岩から剥離されたものと推測される。

１はやや幅の広いチャートの縦長剥片を素材として、基部の両側を調整加工したナイフ形石器である。正面左側縁裏側に小剥離痕が観察される。２も同様に幅の広いチャートの剥片を素材として両側、および先端の三側面に急角度の調整剥離が認められる。３～８は剥片である。

第３節　縄文時代

1　概　要

(1)　位置と立地

遺構遺物はⅢ区Ｆ区で検出された。Ｆ区は１節でふれたように、段丘崖下の溝部，緩傾斜の段丘斜面、平坦な高位段丘面の３つの地形面よりなる。この構成は、少なくとも遺構が存在する縄文時代中期以降は変わらない。中期から後期前葉にかけての地形は次のとうりである。

溝部では幅40ｍを越す低平な谷地形が、縄文時代前期の段階では形成されていた。これはⅧ層土が浸食されてできた谷で、縁部は１ｍを越す小浸食崖が形成されており、段丘斜面上のテラス状平坦地とは緩傾斜で連続する。流路は谷底内を移動しており、最初の浸食部は前期の砂礫層(Ⅶｃ・Ⅶｂ層)で埋まる。Ⅷ

層土は谷底内にわずかに残るだけで、浸食はⅨ層にまでおよぶ。この浸食面上に土坑群が時期差をもって掘られる。これらは、後期中葉ごろ、丘陵側からもたらされた砂礫層(Ⅶａ層)によって一時に埋まり、谷底部の利用は途絶える。(第423図①図)

段丘崖下では、段丘斜面下部のテラス状平坦面と谷底部の間に、湧水地から派生する小河川がⅩⅡ層を浸食して流れる。小河川の谷壁部には土坑群が掘られる。(第423図Ｇ－Ｇ′)

段丘斜面部は前述のテラス部と、上部の緩傾斜部からなる。前者の基盤は低地部Ⅷ層土からなり、後者は段丘上部から供給された二次堆積物であるが、一部に段丘礫層を露出する。

高位段丘面上には、傾斜変換部に幅６ｍほどの自然流路が東西方向に通っており、これを中心に遺構が分布する。段丘面は北東方向の小河川に向かって緩やかに傾斜している。

(2) 遺　構

Ｆ地区から検出された縄文時代の遺構は、住居址５棟・土坑100基・土器埋設５基・配石26基・水さらし場状遺構１基・遺物包含流路２本と多数のピットである。各遺構の分布は立地条件から、以下のとおり４区分される。

A　高位段丘面上

後背低地部を見下ろす高位段丘面上には、住居址１棟・土坑２基・土器埋設土坑遺構４基・遺物包含流路１本のほかに約200基のピットが検出された。住居址は中期末に属し、炉・ピットのみでプランは確認されなかった。土坑は調査区南端と流路内の二ヵ所にあり、両者ともに住居址と同時期と考える。流路は調査区の中央付近を西に傾斜しつつ東西方向に走り、遺物量はおよそ遺物コンテナ100箱におよんだ。流路内の出土土器は中期後葉から後期前葉まで含まれていた。高位段丘北端の約1,000㎡の範囲では、200基あまりのピットとともに、土器埋設土坑遺構４基が点在していた。流路内土坑を除き、耕作土直下での検出である。

B　高位段丘から後背低地にかけての段丘斜面上部の緩斜面上

それぞれ８ｍ前後の間隔をもって敷石住居址３棟・土坑１基がある。敷石住居址は耕作土直下で検出され、いずれも遺存状態が悪く、敷石・炉などの一部にとどまった。時期は後期初頭が１棟と後期前葉２棟で占地が分かれ、時間差をもっている。土坑は平面が半円を呈し、本遺跡の中でも特異な形態である。

C　高位段丘から後背低地の間に形成された段丘斜面下部テラス状平坦面上

テラス状平坦面は、水さらし場状遺構のある谷を境に、便宜的に東テラスと西テラスに分けられる。

東テラスでの遺構検出面は平安時代の遺構と同一である。住居址１棟・土器埋設土坑遺構(埋甕)１基があり、時期はともに後期前葉に属する。住居址は炉・ピットのみで、埋甕も本来の掘り方を失ったものと考えられる。この平坦面から後背低地にかけての北斜面では多量の土器片が採集された。

西テラスでの遺構検出面は、平安時代以降と縄文時代との遺物包含層の計２層下である。土坑26基が検出された。形状・規模などの点で、高位段丘の後背低地の土坑と類似した一群や、緩斜面との変換点には長径３ｍもの大きな土坑が検出されている。

D　高位段丘の後背低地谷底部

遺構の検出された一帯は、度重なる浸食作用により広い谷状地形を形成した部分にあたる。土坑71基・配石26基・水さらし場状遺構１基が出土した。時期は中期末から後期中葉である。水さらし場状遺構のある湧水地からの小河川付近を除いて、多量の遺物を包含する基本土層Ⅶａ層の直下で検出された。このⅦａ層は後背低地谷底部ほぼ全面に堆積する。

土坑は形態によって細分され、底および覆土中よりクルミを主とした堅果類が検出された例が３割ほど

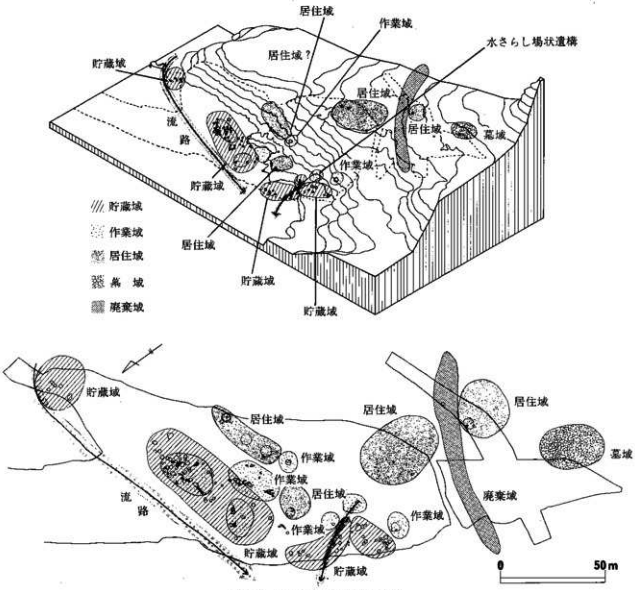
ある。立地状況からも大半が貯蔵施設と判断される。中には他と比べやや規模の大きいプランをもち、浅い掘りこみの一群があり、貯蔵施設とは機能の異なる土坑と推測される。土坑の分布は6地点に分かれ、調査区東端の一群がやや離れた位置にある。

配石は調査区中央部で検出され、土坑群の中に集中するものと、土坑から離れてまとまった2群に分布が分かれる。貯蔵穴と関連した作業場と考えられるが、堅果類は確認されていない。

水さらし場状遺構は、高位段丘面縁裾の湧水点から北西方向に流れる小河川によって開析された谷の付け根で検出された。谷を横断する掘りこみの中に丸木材・板材などを組み合わせており、段丘側からの湧水が遺構内に貯水される構造であったと考えられる。木組みの底および板材に付着してクルミ・トチが検出されており、堅果類の加工に伴う施設であろう。

以上の遺構のあり方から、居住・作業加工・貯蔵などの5空間を推定した(第18図)。

今回の調査では、後背低地谷底部に存在する作業加工空間・貯蔵空間を生み出した人びとの居住空間は、高位段丘面上の土器埋設土坑や遺物包含流路、敷石住居址などから推測されるのみである。また、貯蔵穴・配石の広がりは、侵食された後背低地谷部の地形から、東西方向にさらに拡大すると推察される。さらに、高位段丘面上で検出された中期後葉の遺構の広がりは、東南方向にあると考えられ、後期前葉を主体



第18図　縄文時代遺構配置概念図

とする後背谷底部の遺構群とは隔絶したものである。

傾向としては、時期が新しくなるにつれ遺構立地は低地へ移っていくようである。

(3) 遺　物

縄文時代の遺物は土器・石器・土製品が遺物コンテナ900箱に及ぶ。いずれも該期の遺構が分布するF区で出土している。遺物の大半は高位段丘崖下に流れた旧河床堆積層に含まれていた。

縄文土器は中期中葉・中期後葉の加曽利E式土器様式、中期末から後期初頭の刻目突帯文土器・後期初頭の称名寺様式、後期初頭から中葉の三十稲場様式、後期前葉の堀之内様式・縁帯文土器様式・加曽利B様式などの一群がある。また、数は少ないが、気屋様式・中津様式・大木様式などに比定される客体的な一群もある。なお、土器の説明は縄文時代中期中葉、同後葉、後期初頭、同前葉、同中葉と進めるが、土器群により若干前後するところがある。土器群は中期中葉から後期中葉まで通して、ローマ数字で表現している。また、大木式や気屋式に比定される客体的な土器については最後にまとめておきたい。

2　遺　構

(1) 貯蔵穴(第19図～第35図)

縄文時代の土坑はすべてF区で検出されている。立地状況からみた内訳は高位段丘面上で2基、段丘斜面上およびその下部のテラス状平坦面上で27基、後背低地で71基、計100基となる。

後背低地上で検出された71基のうち、23基から堅果類(クルミ・トチ)が検出され、中には297個のクルミが出土した第59号のように、多量出土の土坑が4基認められている。また、これら土坑が検出された後背低地谷底部は、段丘側から供給される湧水および表流水により、含水率が高い一帯であり、検出面下はシルト質粘土層・砂層・ピート質層で構成される。このような状況から、後背低地谷底部の土坑の大半を貯蔵穴と判断している。

また、段丘斜面下部のテラス状平坦面上の27基からは、堅果類は出土しなかったが、後背低地谷底部の貯蔵穴に形態が類似するものがあり、これも貯蔵穴として扱った。

以上のことから、貯蔵穴とした土坑は78基である。以下、その概略を記すが、貯蔵穴以外の土坑については別項でふれることとする。なお、記載に際しては、段丘斜面下部のテラス状平坦面をテラス状平坦面、後背低地谷底部を谷底部と略記した。

A　分布状況

全体を俯瞰し、立地状況などを考慮した場合、以下の7群に分けられる。

なお、1群から6群と7群とは立地条件からみて大分類されるが、ここでは並立して分類する。

1群――XⅡ－S－18・23号グリッド周辺6基。

2群――XⅡ－V・Wグリッド42基。

3群――XⅡ－U－15･20グリッド周辺5基。

4群――XⅡ－U－20グリッド5基。やや微高地上に存在する。

5群――XⅡ－A－11グリッド1基。やや微高地上に存在する。

6群――XⅡ－A－11・XⅡ－E－10グリッド周辺9基。さらし場状遺構がある谷内に存在する。

7群――XⅡ－Eグリッド10基。段丘斜面下部のテラス状平坦面上に存在する。

B　形　態

平面がほぼ円形を呈するものが大半を占め、三角形・楕円形はわずかである。平面形は径1.5～2mが主である。深さは30cm～1m以上まであり均一ではないが、30cm前後と70cm前後にまとまる傾向が認められる。断面形は検出層位に左右されるところもあるが、視覚的に以下のように大別される。

1類――底より開口部が幅広く、壁面が開口部に向かって開くもの。27基ある。

2類――底より開口部がやや幅広く、壁面が開口部に向かってやや開くもの。36基ある。

3類――底と開口部の幅がほぼ均一で、壁面が開口部に向かって直立になるもの。9基ある。

4類――開口部より底が幅広く、壁面が底に向かってやや開くもの。6基ある。

以上の分類に深さの相違を加えれば、さらに分類は可能であるが、深さについては検出面の浅深といった要因もあり、視点を変える必要があろう。

これらの形態差による分布状況はとくに指摘できることはなく、地点を選ばず散見される。

なお、各説における断面形状については、皿形・すり鉢形・船底形・筒形・袋状形などで表現した。また、各説の内容は1～4類順に行い、かつ、掘り方の浅いものから順に記載した。

C　埋没状況

別項で記したように、後背低地面での検出は一般に基本土層Ⅶa層(遺物包含層)の下である。貯蔵穴によっては、同層が坑内深く入りこむものもあり、まったく入らない例もある。このことは同層被覆時の貯蔵穴の埋没状態を示唆しているのであろう。また、部分的ではあるが基本土層Ⅶb層が坑内に入るものがある。これについては、後背低地面の地形の形成とかかわりがあると考えねばならない。

これら基本土層が入りこむ貯蔵穴は27基ある。その分布は以下のとおりである。

基本土層Ⅶa層が入りこむもの――1群3基、2群8基、3群5基、4群2基

基本土層Ⅶb層が入りこむもの――2群8基

基本土層Ⅶa・b層が入りこむもの――2群1基

基本土層Ⅶa層が入りこむ2群の貯蔵穴は、東西方向に並ぶ2つのまとまりとして分かれて分布する。全体としては、3から5基が地点ごとに分布している。貯蔵穴の配置には一定の数のまとまりと、それらに間隔があることがとらえられる。

基本土層Ⅶb層が入りこむ2群の貯蔵穴は、検出面が同Ⅶb層中であるものが多い。別項で記したように、Ⅶb層は貯蔵穴が検出された後背低地部に、当時流水をもった小河川の運んだ砂で構成されており、貯蔵穴がうがたれた段階に、別の地点に流路を変更していると考えられる。この変更された流路から坑内に同Ⅶb層が流入したとすれば、同Ⅶa層が入りこむ2群の貯蔵穴の存在から考えて、基本土層Ⅶa・Ⅶb層が入りこむ貯蔵穴の埋没には時間差があるといえよう。その前後関係は、基本土層Ⅶb層が入りこむものの方が古いことになる。

壁面の崩落・流れこみといった自然の要因でないもので、覆土中に土塊の混入が認められ、埋め戻されたと考えられる貯蔵穴は9基あった。その層の坑内における位置は、坑内下部に集中する傾向が指摘でき、貯蔵方法に関連した行為が推測される場合もある。

貯蔵穴の掘り下げ段階でとらえてはいないが、いくつかで入子状の土層堆積が観察される。再利用したのかどうか、その性格については不明であった。

D　遺物の出土状況

堅果類は23基から検出された。第56号のトチ・ドングリ(種別不明)の他はすべてクルミである。このうち多量のクルミが出土した貯蔵穴は次の4基がある。第59号297個・第77号190個・第76号196個・第56号334個。これらは2群に第59・77号の2基が認められるほか、3・6群に1基ずつあり、各遺構間の距離

がほぼ40mで均衡している。また、基本土層Ⅶa層に被覆されるものに、堅果類が検出される場合が多い。なお、堅果類を含む土層は、植物腐食片を含む黒色土と黒褐色土層の下にある傾向が指摘できる。

貯蔵方法に関連したと推測される板材の出土は数基あるが、遺存状況が悪く樹種同定が可能なものは2点のみで、いずれもクリ材であった。また、クルミ・トチの出土した第56号の底部の土嚢を水洗選別し、エゾカタバミ・リョクトウなどの種子や、エンマムシなどの昆虫が得られている。このほか骨粉が覆土内に確認された貯蔵穴がいくつかある。

土器の出土は全般に少ない。多いものでも基本土層Ⅶa層に由来すると考えられたり、貯蔵穴廃棄後に投げこまれたような上層に集中する出土状況を示す例が多い。一方、数基の貯蔵穴からは完形の注口土器などが出土している。

石器の出土は多く、300点弱を数える。とくに貯蔵穴内より出土した礫の一部に使用痕跡が認められるものがあり、石皿・砥石・白石が多い。また、磨石類も多く、頻繁に利用されていたことが指摘されよう。その他石棒・丸石があり、貯蔵穴としては性格上考慮すべきであろう。

礫の量に差があるものの、人頭大礫が出土する貯蔵穴が多く、69基を数え、大半を占めている。礫の出土位置は底に接したものが多く、坑内中位の場合は少ない。このうち、第56号のような礫を含まない層を挟んで、上下に礫の出土した貯蔵穴が若干あり、貯蔵方法に関連した資料としてあげられる。

E　時　期

出土土器がなかったり、遺存状況が悪く判別不可能な資料しかない貯蔵穴も多く、すべての時期を確定することはできなかった。これらについては、検出状況や時期が確定できる貯蔵穴から、ここでは後期初頭から中葉という幅で時期を設定しておきたい。確定できたものは、後期初頭7基・後期前葉36基・後期中葉7基で、後期前葉が最も多い。

時期別の土坑分布と、基本土層Ⅶa・b層の坑内流入による分布とは、強い相関を示すことが指摘される。以下にその概要をかかげる。

第1号貯蔵穴(第19図)

位　　置：XⅡ－V－7。谷底部にあり、第42と第3号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶb層上面。褐灰色土が落ちこむ。第31号貯蔵穴に切られる。
規模と形態：平面120cm×110cmの楕円形。深さ12cmの断面皿状を呈す。
覆土の堆積状況：単層。Ⅶb層を基調とする。
出土遺物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：くぼ地状であるが、平面検出は明瞭であった。

第2号貯蔵穴(第19図)

位　　置：XⅡ－V－17。谷底部にあり、やや離れて第4と第29号貯蔵穴がある。
検　　出：Ⅶ層上面。検出面で礫が露呈していた。単独。
規模と形態：平面118cm×110cmの円形。深さ10cmの断面皿状を呈す。
遺物出土状況：大半の礫が底より上層で出土し、Ⅶa層内のものとも考えられる。クルミが底から1点出土した。
覆土の堆積状況：単層。
出土遺物：なし。
時　　期：不明。

備　　考：本坑周辺はⅧ層の堆積が薄く、Ⅶb層は存在しない。Ⅶa層の強い侵食をうけたためと考えられる。このため土坑本来の形態をなさず、下部構造のみ残存したと考える。近接する第4・第29・第28号貯蔵穴についても同一の状況下にあったことが指摘される。

第3号貯蔵穴(第19図)

位　　置：XⅡ－V－12。谷底部にあり、第16と第31号貯蔵穴に近接する。

検　　出：Ⅶb層上面。Ⅶa層が落ちこむ。単独。

規模と形態：平面120cm×118cmの円形。深さ14cmの断面タライ状を呈す。

遺物出土状況：底部に礫が散在する。土器は少量検出された。

覆土の堆積状況：Ⅶa層の単層。

出土遺物：なし。

時　　期：不明。

備　　考：リン酸・カルシウム分析では、土坑内外で大きな値の差異は認められない。礫の一部は本坑に伴うものであろうが明瞭でない。近接する第42号から第66号貯蔵穴はすべてⅦb層で検出されているが、本坑のみⅦa層が入りこむ。

第4号貯蔵穴(第19図)

位　　置：XⅡ－V－13・18。谷底部にあり、やや離れて第2号と第66号貯蔵穴がある。

検　　出：Ⅸ層上面。Ⅶb層中の掘りこみと推測される。灰褐色土が落ちこむ。単独。

規模と形態：平面112cm×92cmの円形。深さ16cmの断面Ⅲ状を呈す。

遺物出土状況：底部から少量の土器とクルミが1点出土した。

覆土の堆積状況：単層。

出土遺物：なし。

時　　期：不明。

備　　考：Ⅶa層を削平しⅧ層を検出する予定であったが、Ⅷ層は侵食されて、Ⅸ層が検出面となった。Ⅶb層中では本坑を確認できなかったが、掘りこみのあり方から、本来はⅦb層中での掘りこみと考える。

第5号貯蔵穴(第19図)

位　　置：XV－A－11。谷底部の微高地上にある。

検　　出：Ⅷ層上面。検出面で人頭大の礫が露呈していた。東側の検出面は10cmほど上層から確認できた。単独。

規模と形態：平面120cm×96cmの楕円形。深さ24cmの断面タライ状を呈す。

遺物出土状況：南西側で礫がまとまって出土した。

覆土の堆積状況：単層。

出土遺物：土器(称名寺式)。

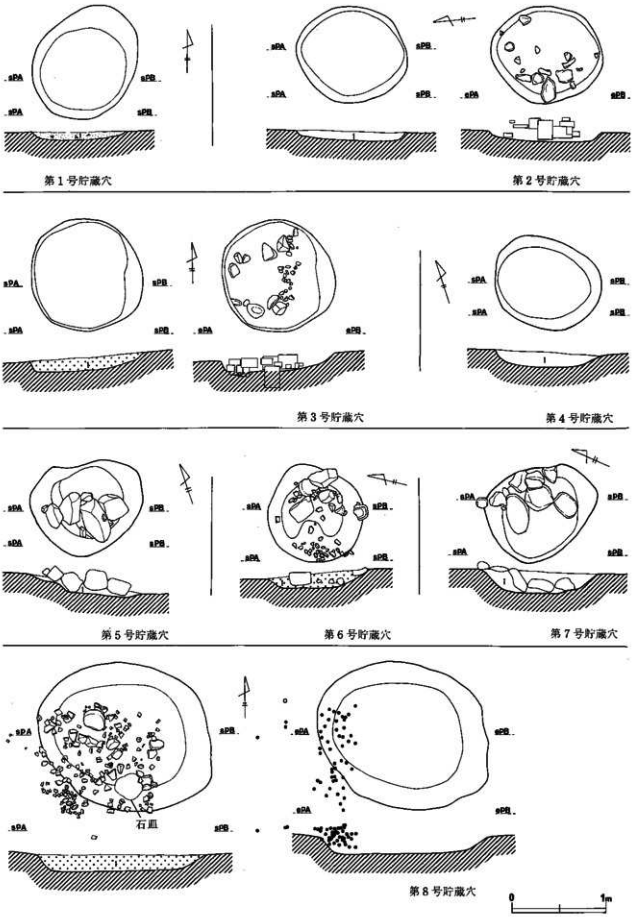
時　　期：後期初頭。

備　　考：本坑と類似したものに第37号貯蔵穴がある。

第6号貯蔵穴(第19図)

位　　置：XⅡ－U－21。谷底部の微高地上にあり、第12号貯蔵穴に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。検出面で礫が露呈していたがⅦa層の被覆が厚く、これを剥ぐことにより、底面に薄くⅦb層まじりの黒色土が認められた。単独。



第19図　縄文時代の貯蔵穴　(1)

規 模 と 形 態：平面102cm×100cmの円形。深さ20cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：土器はⅦa層からが大半である。礫は底から出土した。
覆土の堆積状況：Ⅶ層が入りこむ。
出　土　遺　物：土器(堀之内１式、加曽利Ｂ式)。
時　　期：後期中葉。
備　　考：第６・第８号貯蔵穴は掘りこみの浅い土坑で、Ⅶａ層が土坑内に入りこむ。当初、自然の窪みとも考えられたが、落ちこみが土坑の形態をなすこと、礫などのあり方から土坑と認定した。

第７号貯蔵穴(第19図)

位　　置：XⅡ－Ⅴ－15。谷底部にあり、第37・第77・第36号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。検出面で人頭大の礫が露呈していた。単独。
規 模 と 形 態：平面120cm×100cmの楕円形。深さ24cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：拳大・人頭大の礫が東側に偏って出土した。
覆土の堆積状況：暗褐色土の単層。
出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：第５号貯蔵穴が本坑に類似したものとしてあげられる。

第８号貯蔵穴(第19図)

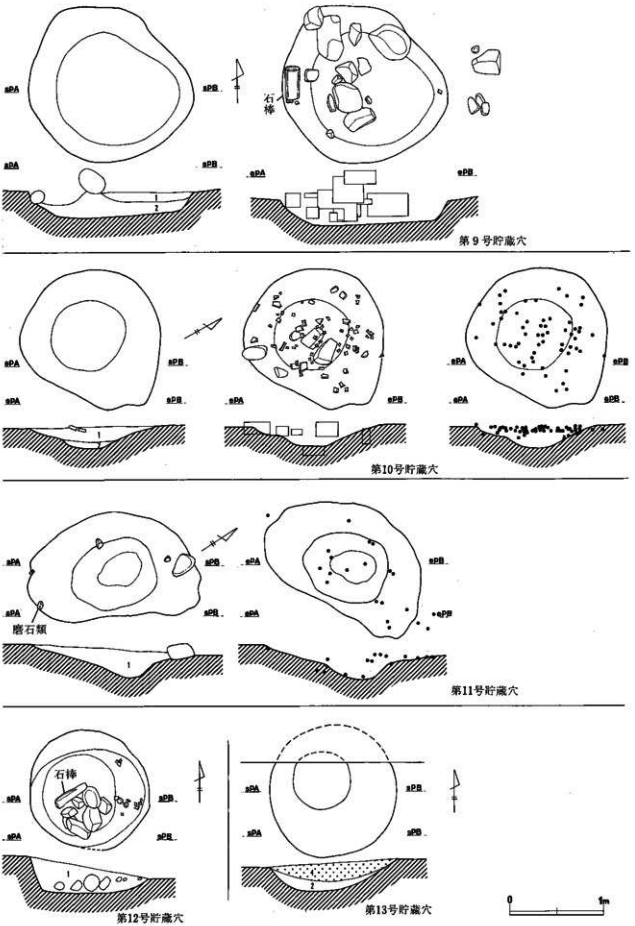
位　　置：XⅡ－Ｕ－21。谷底部の微高地上にあり、第６号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。検出面で礫が露呈していたが、被覆するⅦａ層内の出土となる。単独。
規 模 と 形 態：平面180cm×156cmの楕円形。深さ20cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：土器はⅦａ層からが大半である。
覆土の堆積状況：Ⅶａ層が入りこむ。
出　土　遺　物：土器(堀之内式　縁帯文系)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：なし。

第９号貯蔵穴(第20図)

位　　置：XⅡ－Ⅴ－10。谷底部にあり、第14と第21号貯蔵穴に近接する。
検　　出：本坑東側でⅧ層上面、西側でⅨ層上面、中央部がⅦｂ層上面検出面で人頭大の礫が露呈していた。単独。
規 模 と 形 態：平面176cm×164cmの円形。深さ26cmの断面クライ状を呈す。
遺物出土状況：土器片は２点のみで、礫の多くは底より上層で出土した。
覆土の堆積状況：Ⅶａ層は入りこまない。
出　土　遺　物：石棒。
時　　期：不明。
備　　考：本坑のような覆土構成をするものとして第10・第11号貯蔵穴などがあげられる。リン酸・カルシウム分析では、遺構内資料が遺構外資料よりも低い値を示した。

第10号貯蔵穴(第20図)

位　　置：XⅡ－Ｗ－６。谷底部にあり、第13と第46号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。検出面で土器と人頭大の礫が露呈していた。単独。



第20図　縄文時代の貯蔵穴　(2)

規 模 と 形 態：平面152cm×146cmの円形。深さ22cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：土器と礫は１層から出土した。
覆土の堆積状況：Ⅶａ層は入りこまない。２層は埋め戻しの土の可能性がある。
出　土　遺　物：土器(称名寺式)。
時　　期：後期初頭。
備　　考：本坑と同様な浅めの掘り方や断面形をもつものに第６と第11号貯蔵穴などがある。

第11号貯蔵穴(第20図)

位　　置：ⅩⅡ－Ｕ－21。谷底部の微高地上にあり、第49号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。明茶褐色土が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面180cm×110cmの楕円形。深さ38cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：土器が覆土中より破片で出土した。
覆土の堆積状況：単層。第５号貯蔵穴に近似する。
出　土　遺　物：土器(加曽利Ｂ式)。
時　　期：後期中葉。
備　　考：なし。

第12号貯蔵穴(第20図)

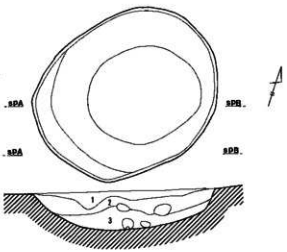
位　　置：ⅩⅡ－Ｕ－21。谷底部の微高地上にあり、第６と第11号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。検出面で人頭大の礫が露呈していた。東側壁はⅦａ層の被覆にともない削られたものと考えられる。単独。
規 模 と 形 態：平面126cm×126cmの円形。深さ40cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：土器は少なく、底から礫が出土した。礫に混じって石棒もみられた。
覆土の堆積状況：３層に分かれる。Ⅶａ層は被覆するが、入りこむ状況ではない。
出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：なし。

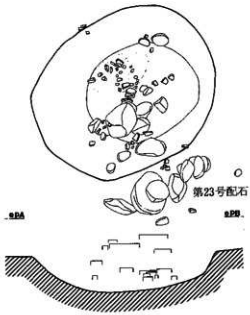
第13号貯蔵穴(第20図)

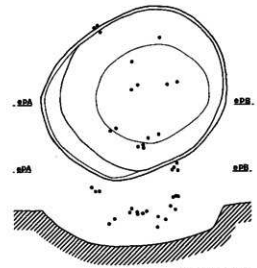
位　　置：ⅩⅡ－Ｗ－７。谷底部にあり、第10号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。褐灰色土が落ちこむ。北側が排水溝により不明。単独。
規 模 と 形 態：平面140cm×134cmの円形。深さ29cmの断面船底状を呈す。
遺物出土状況：土器は１層で出土した。
覆土の堆積状況：１層はⅦａ層を基調とする。
出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：なし。

第14号貯蔵穴(第21図)

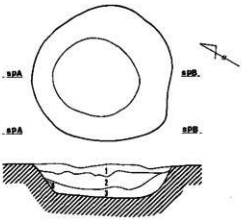
位　　置：ⅩⅡ－Ｖ－10。谷底部にあり、第35号貯蔵穴に隣接する。
検　　出：Ⅶｂ層中。検出面で人頭大の礫が露呈していた。単独。
規 模 と 形 態：平面200cm×162cmの楕円形。深さ42cmの断面船底状を呈す。
遺物出土状況：礫・土器の大半は１層から、骨片(形態不明)と炭化物塊が２層中で出土した。
覆土の堆積状況：Ⅶｂ層は入りこまない。

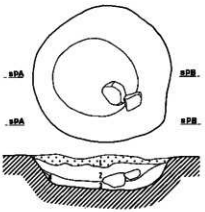


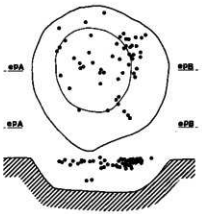




第14号貯蔵穴







第15号貯蔵穴

第21図　縄文時代の貯蔵穴　(3)

出　土　遺　物：土器(称名寺式　堀之内式　縁帯文系)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：本坑周辺は侵食が激しく、Ⅷ層はすべて侵食され、その上にⅦb・Ⅶc層が他の地点より厚く堆積している。土層の所見からは本坑はⅦb層堆積途中に掘り込まれている。

第15号貯蔵穴(第21図)

位　　置：XⅡ－U－15。谷底部にあり、第18と第78号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶb層上面。Ⅶa層が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面146cm×144cmの円形。深さ35cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：土器は1層に集中し、南西壁から底にかけて傾いて完形の浅鉢が出土した。礫は底から、クルミは3層から4点出土した。
覆土の堆積状況：1層はⅦa層に相当する。2層中に砂が帯状に認められた。3層にⅦb層がまじり込んでいた。
出　土　遺　物：土器(堀之内式　縁帯文系)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：形態的に第18号貯蔵穴に類似する。

第16号貯蔵穴(第22図)

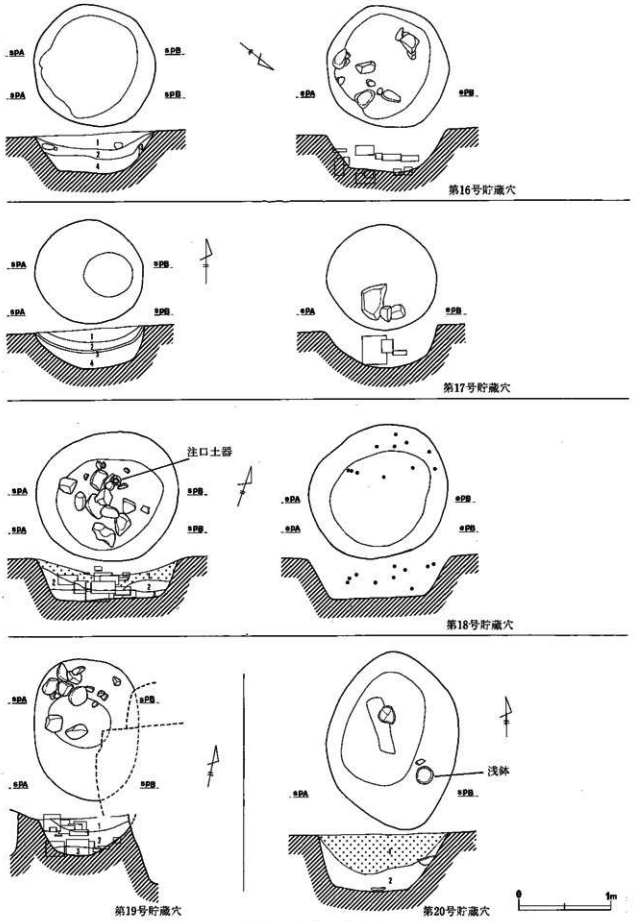
位　　置：XⅡ－V－12。谷底部にあり、第66号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶb層上面。灰褐色砂層が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面130cm×128cmの円形。深さ42cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：2・4層にかけて礫が、1・2層中に土器が、底部で炭化物が出土した。
覆土の堆積状況：1・2層がⅦb層に近似する。
出　土　遺　物：土器(堀之内式　三十稲場式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：覆土構成は第42号貯蔵穴に類似する。

第17号貯蔵穴(第22図)

位　　置：XⅡ－V－10、W－6。谷底部にあり、第46と第35号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。褐灰色土が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面114cm×110cmの円形。深さ42cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：礫は2層から4層にかけて出土した。
覆土の堆積状況：Ⅶa層は入り込まない。覆土中間に炭化粒を多く混在する薄い層がある。
出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：覆土中間に炭化粒層があるものに第14と第73号貯蔵穴がある。

第18号貯蔵穴(第22図)

位　　置：XⅡ－U－20。谷底部にあり、やや離れて第15と第76号貯蔵穴がある。
検　　出：Ⅷ層上面。Ⅶa層を取り除き検出面としたため、黒色土のくぼ地となる。検出面で人頭大の礫が露呈していた。単独。
規模と形態：平面150cm×136cmの円形。深さ40cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：土器は1層に集中し、ほぼ完形の注口土器も検出された。底にほぼ接して人頭大の礫が出土した。1と3層の境で樹皮が認められた。底からクルミが1点出土した。



第16号貯蔵穴

第17号貯蔵穴

第18号貯蔵穴

第19号貯蔵穴

第20号貯蔵穴

第22図　縄文時代の貯蔵穴　(4)

覆土の堆積状況：Ⅶａ層が入りこむ。
出　土　遺　物：土器(加曽利Ｅ式　堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：なし。

第19号貯蔵穴(第22図)

位　　置：ＸⅡ－Ｓ－15･23。谷底部にあり、第45号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶｂ層上面。第55号貯蔵穴に切られる。南東部はトレンチによって失った。
規 模 と 形 態：推定で平面150cm×110cmの円形。深さ40cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：底および上層の北側壁寄りに礫が出土した。
覆土の堆積状況：砂礫の混入が底に著しく認められる。
出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：なし。

第20号貯蔵穴(第22図)

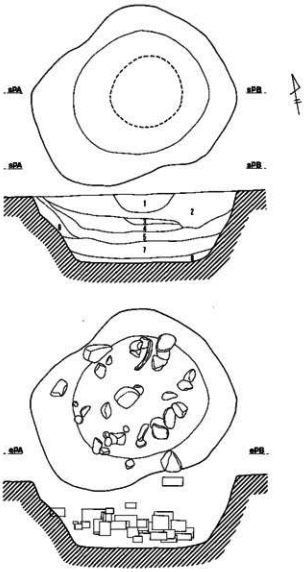
位　　置：ＸⅡ－Ｖ－14。谷底部にあり、第75号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。Ⅶａ層が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面164cm×140cmの楕円形。深さ60cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：２層から半完形の浅鉢、１層から少量の土器片が出土した。底で木片、２層でクルミ11点が出土した。
覆土の堆積状況：１層はⅦａ層に相当し、堆積が顕著である。
出　土　遺　物：土器(加曽利Ｂ式)。
時　　期：後期中葉。
備　　考：なし。

第21号貯蔵穴(第23図)

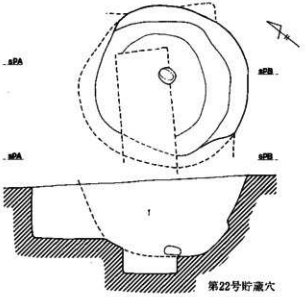
位　　置：ＸⅡ－Ｖ－10。谷底部にあり、第９と第25号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶｂ層上面。褐灰色土が落ちこむ。本坑、検出面中央部に炭を伴う焼土の広がりを確認し、これを本坑埋没後の掘りこみと判断し、第20号土坑とした。そのため、第20号土坑に切られる。
規 模 と 形 態：平面218cm×180cmの不整楕円形。深さ72cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：３と４層にかけて礫が、４層上面で樹皮、５層でクルミが１点出土した。
覆土の堆積状況：Ⅶａ層は入りこまない。
出　土　遺　物：土器(加曽利Ｂ式)。
時　　期：後期中葉。
備　　考：第20号土坑の構築時には本坑が完全に埋まっていたことになる。

第22号貯蔵穴(第23図)

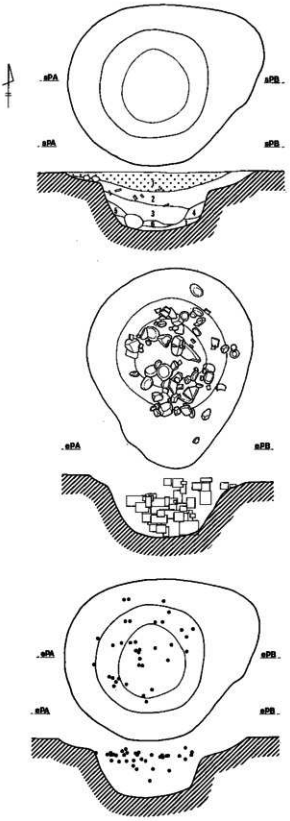
位　　置：ＸⅡ－Ｓ－23。谷底部にあり、第45と第19号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶｂ層上面。配水溝を掘り下げる段階で確認された。東側を残し大半を破壊してしまった。Ⅶａ層が部分的に混入し、暗褐色土が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：推定で平面180cm×170cmの円形。深さ80cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：底で礫が出土した。



第21号貯蔵穴



第22号貯蔵穴



第23号貯蔵穴

第23図　縄文時代の貯蔵穴　(5)

覆土の堆積状況：水没し覆土観察用ベルトが崩壊したため、詳細な記録がとれなかった。掘り下げ段階の所見では、上位と中位にⅦａ層が部分的に混入し、暗褐色土の堆積が認められた。下位は不明。

出　土　遺　物：なし。

時　　期：不明。

備　　考：なし。

第23号貯蔵穴(第23図)

位　　置：ⅩⅡ－Ｗ－７。谷底部にあり、第13と第10号貯蔵穴に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。Ⅶａ層が落ちこむ。単独。

規 模 と 形 態：平面196cm×170cmの円形。深さ62cmの断面すり鉢状を呈する。

遺物出土状況：２層上面に土器が集中した。礫は全層で確認された。クルミは５層ａ～ｂから１点出土した。南側底面より２cmほど上層の狭い範囲で樹皮・葉が確認され、５層中に植物繊維が含まれていた。

覆土の堆積状況：１層はⅦａ層に相当する。４層は壁崩落土と考えられる。覆土は１層、２・３層、４・５層に３大別される。

出　土　遺　物：土器(堰之内式)。

時　　期：後期前葉。

備　　考：底部に礫を伴い、最下層に砂・黒(褐)色土・Ⅷ層で構成される覆土をもつ土坑には、堅果類を伴うことが本遺跡において一般的である。本坑もそのひとつである。リン酸・カルシウム分析の結果では、２・３層のリン酸の値が土坑外より高い数値であったが、カルシウムについては土坑内外で大きな値の差異は認められなかった。

第24号貯蔵穴(第24図)

位　　置：ⅩⅡ－Ｖ－10。谷底部にあり、第24号貯蔵穴に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。検出面で土器の出土が著しかった。

規 模 と 形 態：平面162cm×134cmの楕円形、深さ46cmの断面すり鉢状を呈する。

遺物出土状況：土器の量は多く、とくに１層に集中していた。礫は２層中から出土している。土器の遺存状態は悪く、土壌化の影響を受け、表面が青灰色を呈するものが多い。

覆土の堆積状況：黒褐色土の堆積はなく、１・２層ともに酸化鉄の土壌化が認められる。下層に近づくにしたがって炭の含有が著しい。

出　土　遺　物：土器(称名寺式　堰之内式)。

時　　期：後期前葉。

備　　考：リン酸・カルシウム分析では、遺構内資料が遺構外資料よりも低い値を示した。

第25号貯蔵穴(第24図)

位　　置：ⅩⅡ－Ｖ－10。谷底部にあり、第67・第35・第70号貯蔵穴に近接する。

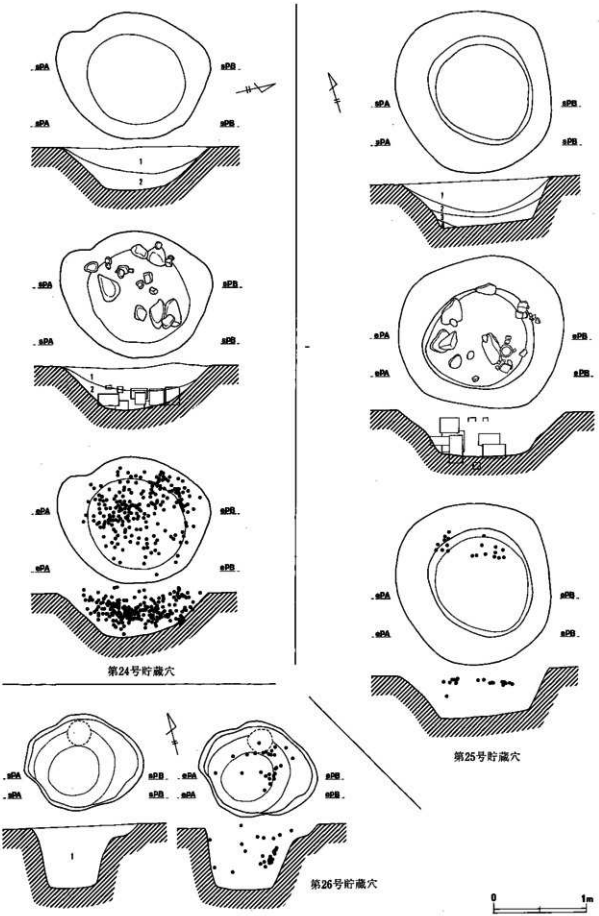
検　　出：Ⅷ層上面。暗褐色土が落ちこむ。単独。

規 模 と 形 態：平面172cm×160cmの円形。深さ48cmの断面すり鉢状を呈す。壁面の中位に段をもつ。

遺物出土状況：１層上部に土器が集中した。人頭大礫が底部に２点出土した他は、底面より上層である。

覆土の堆積状況：Ⅶａ層は入りこまない。

出　土　遺　物：土器(称名寺式)。



第24図　縄文時代の貯蔵穴　(6)

時　　期：後期前葉。

備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では土坑内外で大きな値の差異は認められない。

第26号貯蔵穴(第24図)

位　　置：XⅣ－E－15･20。テラス状平坦面上にあり、第52号貯蔵穴に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。灰黄褐色土が落ちこむ。単独。

規模と形態：平面126cm×102cmの楕円形。深さ65cmの断面すり鉢状を呈す。

遺物出土状況：覆土中から土器が出土した。

覆土の堆積状況：調査時点では単層と判断したが、遺物の出土状況から少なくとも2層に分層されよう。

出土遺物：土器(堀之内式)。

時　　期：後期前葉。

備　　考：なし。

第27号貯蔵穴(第25図)

位　　置：XⅡ－S－22。谷底部にあり、やや離れて第22と第35号貯蔵穴がある。

検　　出：Ⅶb層上面。Ⅶb層が落ちこむ。単独。

規模と形態：平面282cm×182cmの円形。深さ84cmの断面すり鉢状を呈す。南東部分に緩やかに立ち上がる溝状の張り出しをもつ。

遺物出土状況：土器は上部で出土した。礫は張り出し部と底で、また底の礫は中央部を避けるようにして対になって出土した。クルミ29点が底から、植物繊維(葉)が底から30cmほど上面で検出された。

覆土の堆積状況：水没し覆土観察用ベルトが崩壊したため、詳細な記録がとれなかった。掘り下げ段階の所見では、上位にⅦa層の堆積、中位に小礫混じりの黒褐色土、下位上部に植物繊維をともなう黒褐色粘質土の堆積が観察された。

出土遺物：不明。

時　　期：不明。

備　　考：土層の記録を欠くが、基本的には第59と第77号貯蔵穴などに類似している。

第28号貯蔵穴(第25図)

位　　置：XⅡ－V－17。谷底部にあり、やや離れて第2号貯蔵穴がある。

検　　出：Ⅷ層上面。検出面で人頭大の礫が露呈していた。第29号貯蔵穴に切られる。

規模と形態：平面130cm×124cmの円形。深さ18cmの断面タライ状を呈す。

遺物出土状況：少量の土器が出土した。礫は西側に偏って出土した。

覆土の堆積状況：第29号貯蔵穴より砂の多い黒褐色土の単層。

出土遺物：土器(堀之内式　縁帯文系)。

時　　期：後期前葉。

備　　考：底部覆土がⅧ層小塊を含む黒褐色土で構成される例は、堅果類が検出される土坑に多くみられる。本坑が下部構造のみの検出であったことを示唆する。

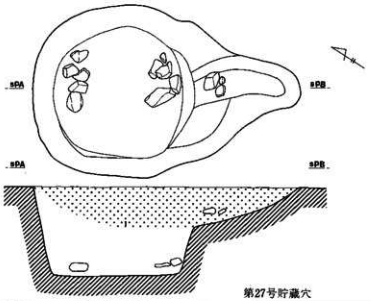
第29号貯蔵穴(第25図)

位　　置：XⅡ－V－17。谷底部にあり、やや離れて第2号貯蔵穴がある。

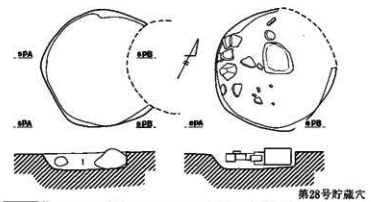
検　　出：Ⅷ層上面。黒褐色土が落ちこむ。第28号貯蔵穴を切る。

規模と形態：平面108cm×98cmの円形。深さ18cmの断面タライ状を呈す。

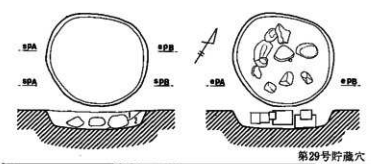
遺物出土状況：少量の土器と礫が出土した。礫は中央に寄っていた。



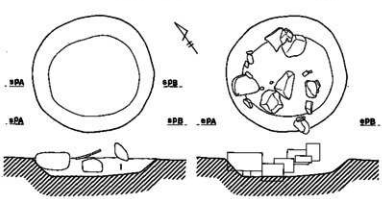
第27号貯蔵穴



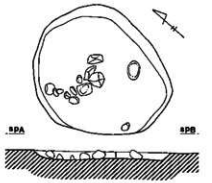
第28号貯蔵穴



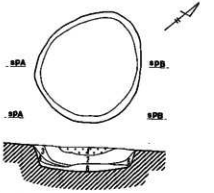
第29号貯蔵穴



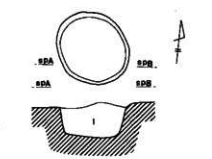
第30号貯蔵穴



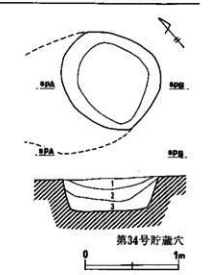
第31号貯蔵穴



第32号貯蔵穴



第33号貯蔵穴



第34号貯蔵穴

第25図　縄文時代の貯蔵穴　(7)

覆土の堆積状況：２層は壁面崩落土である。
出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期後葉。
備　　考：底部に多数の礫をもつ例は掘りこみの深い例にもあり、本坑が下部構造のみ検出された可能性を示唆する。

第30号貯蔵穴(第25図)

位　　置：XⅡ－Ⅴ－15。谷底部にあり、第37・第24・第59号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。検出面で人頭大の礫や土器が露呈していた。単独。
規 模 と 形 態：平面126cm×120cmの円形。深さ20cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：石皿・磨石などの石器類は１層上面から、土器は２層上面から出土した。礫は若干、底より上層にあった。
覆土の堆積状況：Ⅶａ層は入りこまない。
出　土　遺　物：不明。
時　　期：不明。
備　　考：遺物や礫などは大半が覆土中から出土し、２次的な投げこみと考えられる。

第31号貯蔵穴(第25図)

位　　置：XⅡ－Ⅴ－07。谷底部にあり、第42と第３号貯蔵穴に近接する。
検　　出：北東側でⅧ層上面、南西側でⅦｂ層中。断面では明瞭でなかったが、上端でわずかに第１号貯蔵穴を切る。
規 模 と 形 態：平面146cm×132cmの円形。深さ８cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：土器は検出面上の出土でⅦａ層に伴うものと考える。礫は東側に偏って出土した。
出　土　遺　物：土器(刻目突帯文・三十稲場式)。
時　　期：後期初頭。
備　　考：５から10cmほど上層から検出された。

第32号貯蔵穴(第25図)

位　　置：XⅡ－Ｕ－23。谷底部にあり、やや離れて第43と第８号貯蔵穴がある。
検　　出：Ⅷ層上面。中央部にⅦａ層が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面122cm×110cmの円形。深さ26cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：土器は１層から出土した。２層と６層に炭片とともに微細な骨片が少量あり、２層での包含率が高い。
覆土の堆積状況：Ⅶａ層が部分的に入りこむ。
出　土　遺　物：不明。
時　　期：不明。
備　　考：リン酸・カルシウム分析では、遺構内資料が遺構外のそれよりも高い値を示した。

第33号貯蔵穴(第25図)

位　　置：XⅣ－Ｅ－15。谷底部にあり、第１号土坑に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。単独。
規 模 と 形 態：推定で平面76cm×76cmの円形。深さ13cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：なし。
覆土の堆積状況：単層。

出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：覆土は埋土と考えられる。

第34号貯蔵穴(第25図)

位　　置：XⅡ－Ⅴ－18。谷底部にあり、第71と第73号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。Ⅶa層のが混入する黒褐色土が落ちこむ。第44号貯蔵穴を切る。
規 模 と 形 態：平面104cm×100cmの円形。深さ34cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：底部に礫が出土した。
覆土の堆積状況：Ⅶa層が混入するが、入りこむ状況ではない。
出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：Ⅶa層が混入することから本坑は第28や第29号貯蔵穴にみられるような極度の侵食がなかったと考える。リン酸・カルシウム分析では土坑内外で値のばらつきがみられ、とくに1層でリン酸の値が高い。

第35号貯蔵穴(第26図)

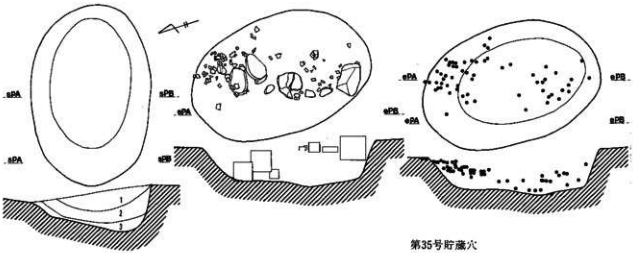
位　　置：XⅡ－Ⅴ－10。谷底部にあり、第14と第25号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶb層上面。暗褐色土が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面190cm×125cmの楕円形。深さ45cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：土器は2層に集中して出土した。礫は覆土上部と、下部出土の2つがある。
覆土の堆積状況：Ⅶa層は入りこまない。各層は質的には近似していた。
出　土　遺　物：土器(堀之内式　三十稲場式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：なし。

第36号貯蔵穴(第26図)

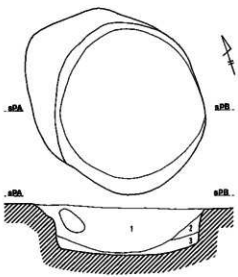
位　　置：XⅡ－Ⅴ－15。谷底部にあり、第7と第59号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。黒褐色土が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面182cm×180cmの円形。深さ50cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：3層で少量の土器、1層で礫とクルミが3点出土している。
覆土の堆積状況：Ⅶa層は入りこまない。
出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：リン酸・カルシウム分析では、遺構外と比較して1層にリン酸の値が高く出ている。

第37号貯蔵穴(第26図)

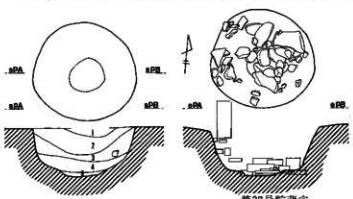
位　　置：XⅡ－Ⅴ－15。谷底部にあり、第30・第39・第59号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。検出面で遺物は認められない。単独。
規 模 と 形 態：平面108cm×108cmの円形。深さ52cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：4層直上でほぼ完形の注口土器が出土した他、2層から土器が少量、3層から4層にかけて拳大や人頭大の礫が検出された。クルミは4層から1点出土した。
覆土の堆積状況：灰褐色砂質土と黒褐色粘性土が主体で5層に分かれ、Ⅶa層は入りこまない。5層は埋め戻しの可能性がある。



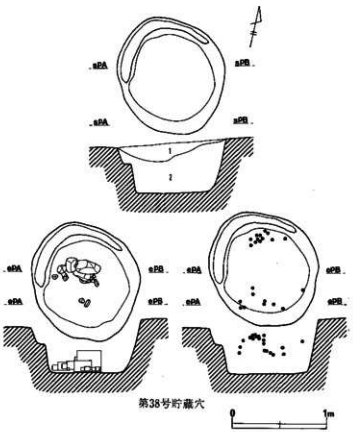
第35号貯蔵穴



第36号貯蔵穴



第37号貯蔵穴



第38号貯蔵穴

第26図　縄文時代の貯蔵穴　(8)

出　土　遺　物：土器(称名寺式・堀之内式・加曽利B式)。
時　　期：後期中葉。
備　　考：底の落ちこみは、埋め戻された状況であり、貯蔵方法に関連したものと考えられる。

第38号貯蔵穴(第26図)

位　　置：XV－A－11。水さらし場状遺構を伴う谷にあり、第40号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。小礫まじりの黄灰色土が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面120cm×116cmの円形。深さ54cmの断面すり鉢状を呈す。北西壁にテラスをもつ。
遺物出土状況：1・2層上位で土器が、底で礫が出土した。植物遺体(毛根？)が2層中から、クルミは底から6点出土した。
出　土　遺　物：不明。
時　　期：不明。
備　　考：第72号貯蔵穴と同様に覆土上層に小礫を多く混入する。検出面上の基本土層Ⅵ層の混入である。

第39号貯蔵穴(第27図)

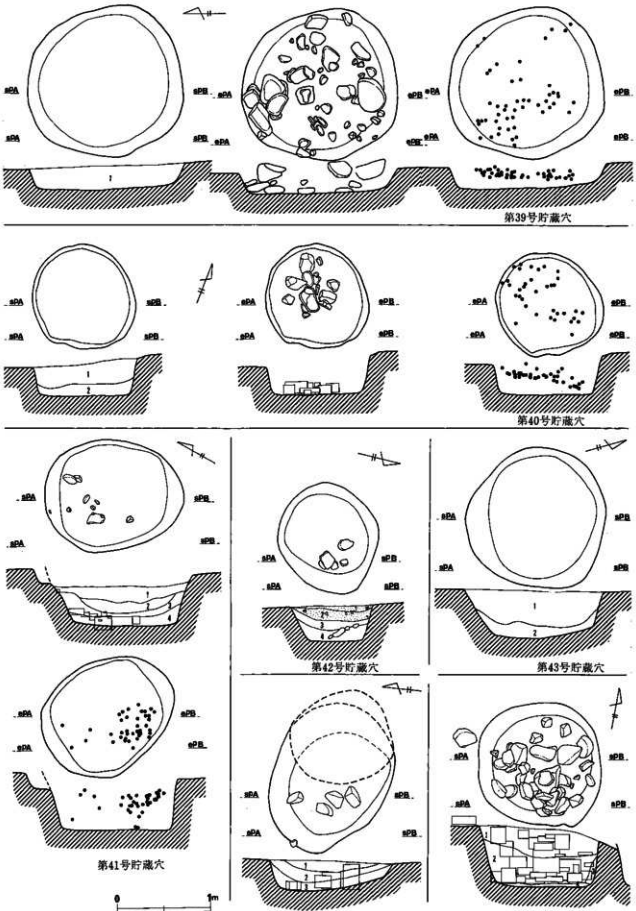
位　　置：XII－V－15。谷底部にあり、第7と第37号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。検出面で人頭大の礫が露呈していた。単独。
規模と形態：平面168cm×160cmの円形。深さ24cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：1・2層上部に土器が集中し、拳大や人頭大の礫が散在する。1層を除いて各層で炭化物が散見される。
覆土の堆積状況：暗褐色砂質土(1層)と黒褐色土(2～4層)とに2大別される。基本土層のⅦa層は認められない。
出　土　遺　物：土器(称名寺式・三十稲場式・堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：本坑のような浅めの土坑は第1や第2号貯蔵穴などがあげられる。

第40号貯蔵穴(第27図)

位　　置：XII－A－11。水さらし場状遺構をともなう谷にあり、第40号貯蔵穴に近接する。
検　　出：XI層上面。黒褐色土が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面110cm×110cmの円形。深さ38cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：土器はI層から出土したものが多い。底には礫がある。植物根様遺体が1・2層ともに認められた。
覆土の堆積状況：2層は砂を含んでいた。
出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では、特徴的な値の差異は認められない。

第41号貯蔵穴(第27図)

位　　置：XIV－E－15。水さらし場状遺構を伴う谷にあり、第68号貯蔵穴に近接する。
検　　出：XI層上面。同Ⅶa層が入りこむ。西側壁は掘りすぎている。単独。
規模と形態：平面148cm×118cmの楕円形、深さ42cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：土器は2・3層から出土したものが多い。底から礫が出土している。
覆土の堆積状況：3層はⅦ層を基調としており、2層とは明瞭に分かれる。



第27図　縄文時代の貯蔵穴　(9)

出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では2層のリン酸値がとくに高い。

第42号貯蔵穴(第27図)

位　　置：XⅡ－V－12・13。谷底部にあり、第1と第66号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶb層中。Ⅶb層が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面114cm×106cmの円形。深さ38cmの断面すり鉢状を呈す。底は南に向かって若干傾斜する。
遺物出土状況：被覆するⅦa層に伴う土器が検出面で得られた。礫は3・4層から、クルミは4層から1点出土した。
覆土の堆積状況：1・2層はⅦb層に相当する。
出　土　遺　物：土器(三十稲場式・加曽利E式)。
時　　期：後期初頭。
備　　考：3層上部にある粘質土や、同層下部の炭の混入、4層下部の黒褐色土内のクルミの出土などは、貯蔵方法を想定させる。リン酸・カルシウム分析では、土坑内外で大きな値の差異は認められない。

第43号貯蔵穴(第27図)

位　　置：XⅡ－U－24。谷底部にあり。やや離れて第32と第57号貯蔵穴がある。
検　　出：Ⅷ層上面。検出面で遺物は認められない。単独。
規模と形態：平面148cm×148cmの円形。深さ50cmの断面タライ状を呈す。
覆土の堆積状況：2層に分かれる。Ⅶa層は入りこまない。
出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。

第44号貯蔵穴(第27図)

位　　置：XⅡ－V－18。谷底部にあり、第71と第72号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。黒褐色土が落ちこむ。第34号貯蔵穴に切られる。
規模と形態：推定で平面160cm×120cmの円形。深さ32cmの断面タライ状を呈す。底面が北へ傾斜する。
遺物出土状況：3層から礫が出土した。
覆土の堆積状況：Ⅶa層は入りこまない。
出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：第34号貯蔵穴とは、覆土におけるⅦa層のあり方が異なる。リン酸・カルシウム分析では土坑内外で値のばらつきがみられ、とくに1層でリン酸の値が高い。第34号貯蔵穴と同様な傾向を示した。

第45号貯蔵穴(第27図)

位　　置：XⅡ－S－24。谷底部にあり、第22と第19号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶb層上面。黒褐色土が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面130cm×128cmの円形。深さ62cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：4層から2層にかけて礫が出土した。少数の土器がこれにまじる。

覆土の堆積状況：１・２・３層と４層に２大別される。
出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：なし。

第46号貯蔵穴(第28図)

位　　置：ⅩⅡ－W－６。谷底部にあり、第10と第70号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。Ⅶａ層が落ちこむ。検出面で礫が露呈していた。単独。
規 模 と 形 態：平面188cm×166cmの楕円形。深さ60cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：１・４層で土器が出土したが１層の土器は遺存状況が悪い。礫は１・２層中と３・４層中とに分かれ、偏って集中する。クルミが底から１点出土した。
覆土の堆積状況：Ⅶａ層が浅く入りこむ。
出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：なし。

第47号貯蔵穴(第28図)

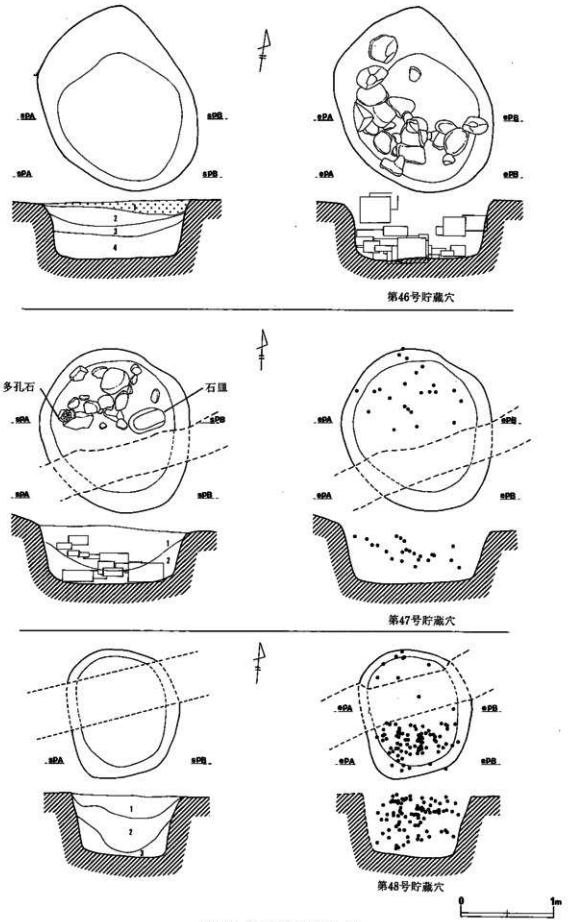
位　　置：ⅩⅣ－Ｅ－20。テラス状平坦面上にあり、第74号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。第１号土坑と重複するが、その前後関係は不明。中央部は暗渠配水によって失っている。
規 模 と 形 態：平面196cm×160cmの円形。深さ61cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：底で礫が出土した。
覆土の堆積状況：２層に分かれる。
出　土　遺　物：土器(堀之内式・三十稲場式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では、土坑外資料がやや高い値であった。

第48号貯蔵穴(第28図)

位　　置：ⅩⅣ－Ｅ－23。テラス状平坦面上にあり、第10号土坑に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。暗渠配水により本坑中央部は撹乱をうけていた。
規 模 と 形 態：推定で平面136cm×118cmの円形。深さ64cmの断面筒状を呈す。
遺物出土状況：土器は土坑内上部に多く、南側に小礫が偏って出土した。
覆土の堆積状況：３層は埋め戻された可能性がある。
出　土　遺　物：土器(称名寺式・堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では土坑内部に限って１層の値が高いが、土坑外との比較では土坑外の値が高い。

第49号貯蔵穴(第29図)

位　　置：ⅩⅡ－Ｕ－21。谷底部微高地上にあり、第６と第11号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。検出面で人頭大の礫が露呈していた。単独。
規 模 と 形 態：平面116cm×108cmの円形。深さ70cmの断面筒状を呈す。
遺物出土状況：南壁側に立石状の礫が出土した。土器の量は少ない。
覆土の堆積状況：黒褐色土の単層。



第28図　縄文時代の貯蔵穴　(10)

出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：なし。

第50号貯蔵穴(第29図)

位　　置：XⅡ－S－18。谷底部にあり、第45と第55号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶb層上面。基本土層Ⅵ層の流入が著しく、Ⅶb層との差異を認めるのが困難であった。
規 模 と 形 態：平面138cm×136cmの円形。深さ60cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：2・4層で礫が出土した。
覆土の堆積状況：6層を除いて礫の混入が著しい。
出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：周辺はⅧ層が存在しない。

第51号貯蔵穴(第29図)

位　　置：XⅡ－V－14。谷底部にあり、第3号土坑と第53号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。検出面で人頭大の礫が露呈していた。単独。
規 模 と 形 態：平面168cm×148cmの三角形。深さ66cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：土器は大半が1層から、また拳大や人頭大の礫が底に接して出土した。
覆土の堆積状況：1層はⅦa層に相当し、第20号貯蔵穴などと比較して入りこみが浅い。
出　土　遺　物：土器(堀之内式・三十稲場式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：三角形は第59号貯蔵穴とともに類例が少ない。3層にまじる砂は貯蔵方法に関連するものと考えられる。

第52号貯蔵穴(第29図)

位　　置：XⅣ－E－14・19。テラス状平坦面上にあり、第26号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。第63号貯蔵穴と重複するが、両者の覆土の差異は明瞭でなく、その前後関係は不明であった。
規 模 と 形 態：平面170cm×160cmの円形。深さ66cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：1・2層に土器が集中し、底に礫が出土した。
覆土の堆積状況：4層は地山近似の黄褐色土で埋まっていた。
出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：覆土の状況は第61号貯蔵穴に類似している。

第53号貯蔵穴(第30図)

位　　置：XⅡ－V－9。谷底部にあり、第51号貯蔵穴に近接する。
検　　出：西南側でⅦb層上面、ほかⅧ層上面。単独
規 模 と 形 態：平面156cm×148cmの円形。深さ74cmの断面筒状を呈す。
遺物出土状況：土器・礫ともに上層で出土した。クルミは4層で1点出土した。
覆土の堆積状況：1層はⅦa層に相当する。2層はⅦb層を基調としている。下部ほど黒色を帯び、上部ほど砂質が強くなる傾向がある。

出　土　遺　物：土器(堀之内式？)。
時　　期：後期前葉か。
備　　考：なし。

第54号貯蔵穴(第30図)

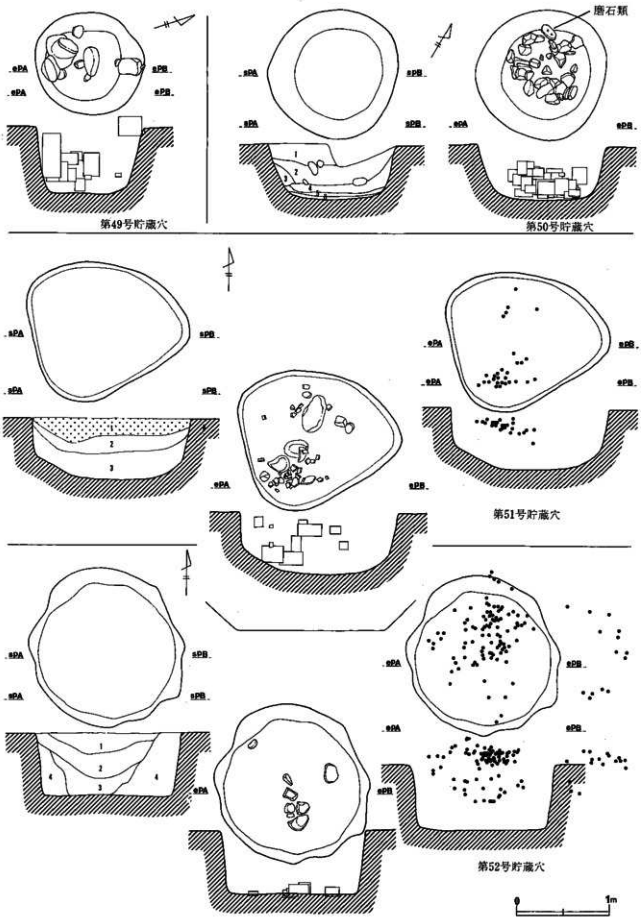
位　　置：XIV－E－10。水さらし場状遺構をともなう谷にあり、第60号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。同Ⅶa層が入りこむ。単独。
規模と形態：平面128cm×120cmの円形。深さ75cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：土器は覆土上位で大半が出土した。底から礫が、また、クルミが底から1点出土している。
覆土の堆積状況：全体に砂や砂礫の混入が著しく、砂層も認められる。
出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では4層の東側でやや値が高い。

第55号貯蔵穴(第30図)

位　　置：XII－S－18･19･23･24。谷底部にあり、第22号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶb層上面。Ⅶa層上面でのトレンチ調査時に、断面観察によって確認した。このため中央部は不明である。覆土上半部分は水没時に流失した。第19号貯蔵穴を切る。
規模と形態：平面145cm×114cmの楕円形。深さ90cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：底より上層で礫と土器とが出土した。
覆土の堆積状況：砂礫層が主体をなす。Ⅶa層を基調とするが、土器の出土量は少ない。
出　土　遺　物：土器片が出土しているが、時期の判別は不能である。
時　　期：不明。
備　　考：なし。

第56号貯蔵穴(第30図)

位　　置：XIV－E－5。水さらし場状遺構を伴う谷にあり、第54号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。検出面では暗オリーブ灰色土が瓢箪形に落ちこんでいたが、平面では土坑の重複は確認できなかった。覆土の堆積状況から、2基の土坑の切り合いが想定できるが1基として番号をつけた。
規模と形態：全体で平面192cm×84･82cmの二つの円形が重なったような瓢箪形。深さ84・40cmの断面タライないしすり鉢状を呈す。
遺物出土状況：土器は3・4層からの出土が大半をしめる。礫は底からのものと6層堆積後のものとの2段階に分かれる。4・5層下部からⅦa層にかけて、板材(クリ)・トチ・ドングリ(種別不明)・クルミ334点が出土した。6層は植物繊維(葉)を多く含んだ層である。
覆土の堆積状況：5層は埋め戻したような黄灰色の塊を含んだ砂質層である。Ⅶa層と壁との境には薄い砂層をはさむ。
出　土　遺　物：土器(堀之内式・三十稲場式・加曽利B式)。
時　　期：後期中葉。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果ではⅦa層のカルシウム値が高かったほか、有意な差異は認められなかった。



第29図　縄文時代の貯蔵穴　(11)

第57号貯蔵穴(第31図)

位　　置：XII－U－25。谷底部にあり、第76号貯蔵穴に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。小礫を含んだ暗褐色土が落ちこむ。単独。

規模と形態：平面170cm×142cmの楕円形。深さ74cmの断面筒状を呈す。開口部北側に掘りこみの浅いやや平坦な面があり、開口部が開きぎみとなる。

遺物出土状況：1層から3層にかけて土器片が少量出土した。5・6層の境目で植物繊維(葉)の薄い堆積物と木片とが認められた。クルミは6層で24点出土している。

覆土の堆積状況：1から3層はⅦa層に相当し、堆積が顕著である。

出土遺物：土器(堀之内式)。

時　　期：後期前葉。

備　　考：なし。

第58号貯蔵穴(第31図)

位　　置：XIV－E－19。テラス状平坦面上にあり、第8号住居址に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。第3号溝址(平安)に切られる。

規模と形態：平面156cm×150cmの円形。深さ92cmの断面筒状を呈す。

遺物出土状況：土器は4層以上で、人頭大の礫が底部で出土した。

覆土の堆積状況：Ⅶa層堆積後に5層が堆積し、埋め戻しと推測される6層が堆積している。底部の礫は6層堆積以前にあったと考えられる。上部に砂層が入る。

出土遺物：土器(堀之内式)。

時　　期：後期前葉。

備　　考：4層の堆積状態は不自然で、本坑埋没後に新たな土坑が機能していた可能性もある。

第59号貯蔵穴(第31図)

位　　置：XII－V－15。谷底部にあり、第30と第39号貯蔵穴に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。Ⅶa層が落ちこむ。

規模と形態：平面180cm×170cmの三角形状。深さ90cmの断面すり鉢状を呈す。

遺物出土状況：3層で拳大の礫と台付石皿とが出土し、石皿下からは植物繊維(葉)の薄い堆積物と木片(クリ)とが認められた。クルミは3層下部と5層とで297点出土している。土器の出土は少ない。

覆土の堆積状況：5層に分かれ、1層がⅦa層にあたり、堆積が顕著である。

出土遺物：土器(堀之内式・加曽利B式)。

時　　期：後期中葉。

備　　考：リン酸・カルシウム分析では、土坑内外で大きな値の差異は認められていない。覆土、遺物の出土状況からみて、Ⅶa層被覆以前に本址は機能していた状態と考えられる。礫と台付石皿は蓋石として置かれたことが推測される。

第60号貯蔵穴(第31図)

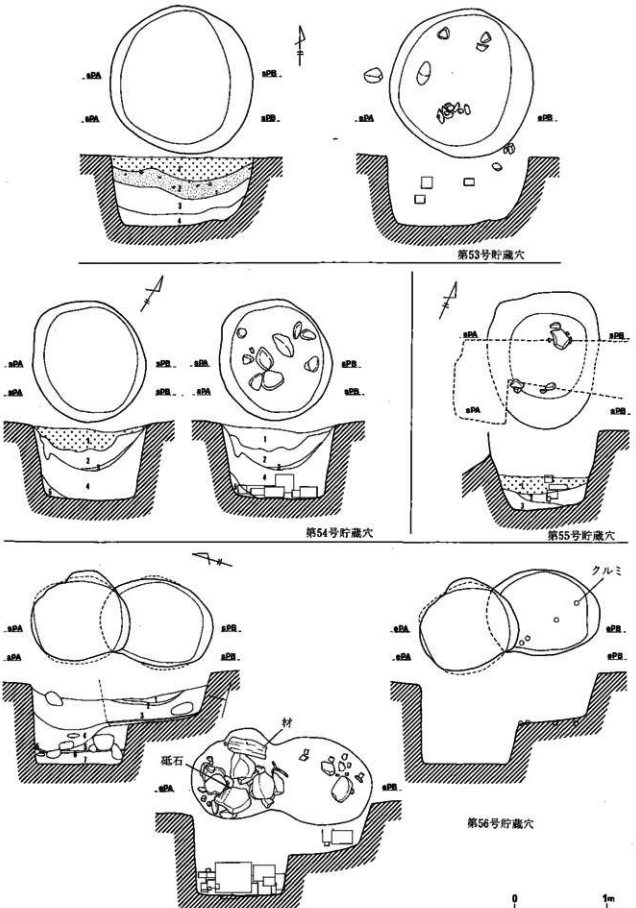
位　　置：XIV－E－10。水さらし場状遺構を伴う谷にあり、第64号貯蔵穴に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。砂まじり灰色土が落ちこむ。単独。

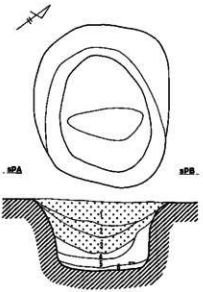
規模と形態：平面184cm×136cmの楕円形。深さ75cmの断面筒状を呈す。北壁で段差をもつ。

遺物出土状況：大半の土器は1・2層で出土した。

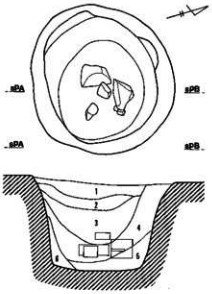
覆土の堆積状況：覆土の中位に礫が認められた。

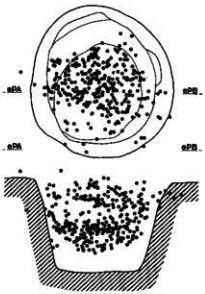


第30図　縄文時代の貯蔵穴　(2)

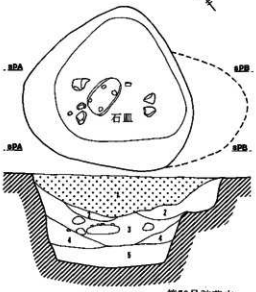


第57号貯蔵穴

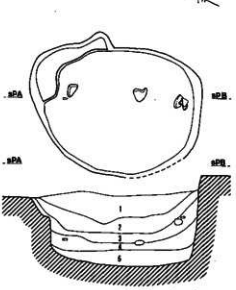




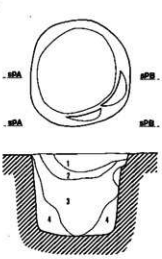
第58号貯蔵穴

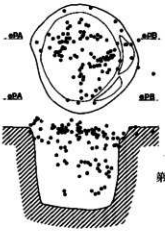


第59号貯蔵穴



第60号貯蔵穴





第61号貯蔵穴

0　1m

第31図　縄文時代の貯蔵穴　(3)

出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では土坑内資料が土坑外より高い値となった。

第61号貯蔵穴(第31図)

位　　置：XIV－E－19。テラス状平坦面上にあり、第11号土坑に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。褐灰色土が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面112cm×106cmの円形。深さ88cmの断面筒状を呈する。南東壁の上位に小規模なテラスをもっている。
遺物出土状況　：大半の土器が1・2・3層の中位から出土した。3層中に骨片が認められた。
覆土の堆積状況：4層は地山近似の黄褐色土で埋まっていた。
出　土　遺　物：土器(称名寺式・三十稲場式)。
時　　期：後期初頭。
備　　考：覆土の状況は第65号貯蔵穴に類似している。

第62号貯蔵穴(第32図)

位　　置：XIV－E－19・24。テラス状平坦面上にあり、第48号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。小礫を含む黒色土が落ちこむ。検出面で土師器の出土が多い。
規 模 と 形 態：平面140cm×130cmの円形。深さ84cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：1層は土師器が、2層は縄文土器の出土が多い。1・2層の境には骨片が多く含まれていた。2・3層の境と底から礫が出土した。
覆土の堆積状況：1層と2層および3・4・5層に3大別される。
出　土　遺　物：土器(称名寺式・堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では、1・2層で両成分の高い集積値が認められた。本坑開口部付近での別遺構の存在が考えられる。

第63号貯蔵穴(第32図)

位　　置：XIV－E－14。テラス状平坦面上にあり、第26号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。第52号貯蔵穴と重複するが、その前後関係は不明。
規 模 と 形 態：平面143cm×134cmの円形。深さ108cmの断面筒状を呈す。
遺物出土状況：土器は4層上部から上位で、底で礫が出土した。4層に炭が多量にあった。
覆土の堆積状況：3層以上では第52号貯蔵穴と大差ない。1・2・3・4・6層と5・7層に2大別される。
出　土　遺　物：土器(称名寺式・堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では4層で両成分の集積値が高く、再利用されたことが指摘される。

第64号貯蔵穴(第33図)

位　　置：XIV－E－10。水さらし場状遺構を伴う谷にあり、第41号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。灰褐色土が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面104cm×84cmの円形。深さ34cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：底から礫が出土した。土器の出土量は少なかった。

覆土の堆積状況：3層に分かれる。
出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では遺構内外で有意な値の差異は認められない。

第65号貯蔵穴(第33図)

位　　置：XIV－E－19。テラス状平坦面上にあり、第61号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。褐灰色土が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面108cm×96cmの円形。深さ84cmの断面筒状を呈する。
遺物出土状況：1層から3層にかけて土器と小礫が出土した。3層で骨片と炭粒が認められた。
覆土の堆積状況：4層がⅧ層と近似する。埋め戻しの可能性がある。
出　土　遺　物：土器(称名寺式・堀之内式・三十稲場式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：本坑4層に類似し、底部から壁にかけてⅧ層と似た覆土堆積が認められる例に、第52・第61・第63号の各貯蔵穴がある。いずれも、黒褐色の土塊がまじる。

第66号貯蔵穴(第33図)

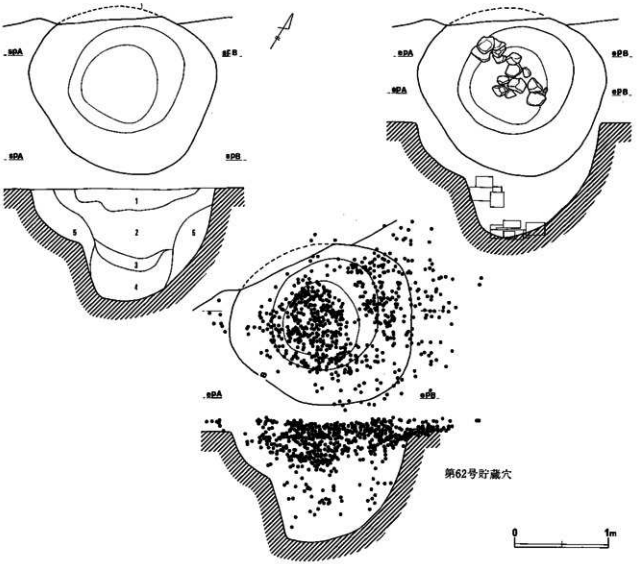
位　　置：XII－V－12。谷底部にあり、第16号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅶb層上面。褐灰色土が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面148cm×130cmの円形。深さ22cmの断面タライ状を呈する。
遺物出土状況：2層で主に礫が出土した。土器は数点のみだが、遺存状況は悪かった。
覆土の堆積状況：1層はⅦb層に相当する。
出　土　遺　物：土器は時期の判別が不能である。
時　　期：不明。
備　　考：底部は砂層を掘り抜いていない。近接する第42や第66号貯蔵穴などはすべてⅦb層で検出されたが、覆土構成は各々で異なる。

第67号貯蔵穴(第33図)

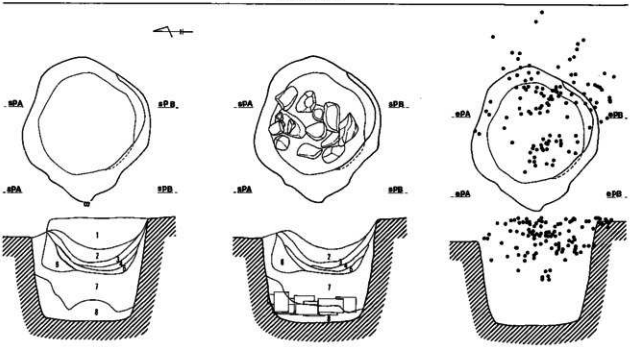
位　　置：XII－V－15。谷底部にあり、第25と第30号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。褐灰色土が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面138cm×118cmの円形。袋状部分をもつが、深さ54cmの断面タライ状を呈する。
遺物出土状況：土器は出土せず、礫が中央部底で出土した。
覆土の堆積状況：Ⅶa層は入りこまない。
出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：なし。

第68号貯蔵穴(第33図)

位　　置：XIV－E－10・15、15－A－6・11。水さらし場状遺構を伴う谷にあり、第41号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。小礫まじりの灰色土が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面180cm×126cmの楕円形。深さ50cmの断面タライ状を呈する。
遺物出土状況：底に礫が出土した。
覆土の堆積状況：2層中に不連続な砂層がある。

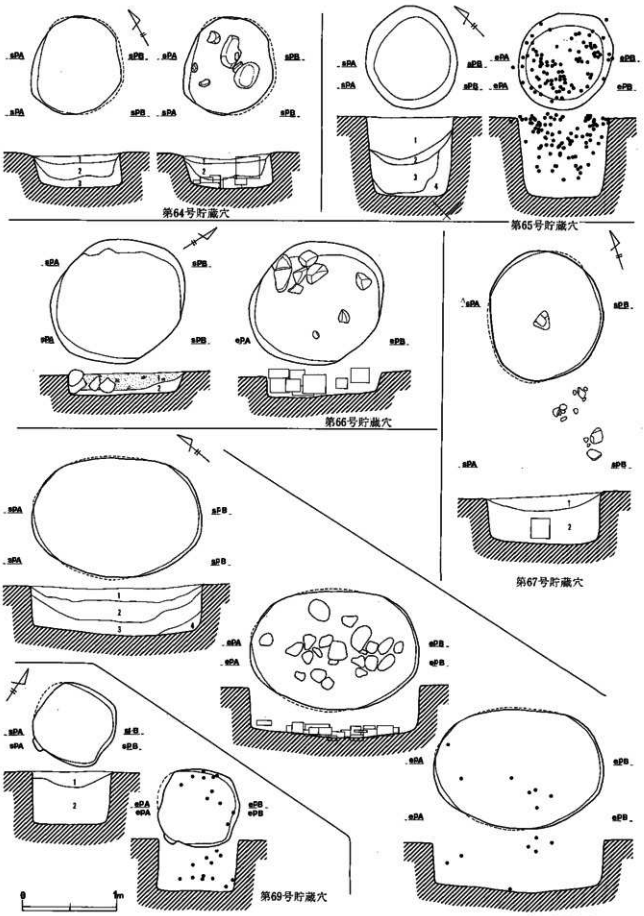


第62号貯蔵穴



第63号貯蔵穴

第32図　縄文時代の貯蔵穴　(4)



第33図　縄文時代の貯蔵穴　(5)

出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：本坑は楕円形を呈する掘り方の深い唯一の資料である。リン酸・カルシウム分析の結果では遺構内外で有意な値の差異は認められない。

第69号貯蔵穴(第33図)

位　　置：XIV－E－20。テラス状平坦面上にあり、第1号土坑に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。黒褐色土が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面80cm×80cmの隅丸方形。深さ56cmの断面筒状を呈する。
遺物出土状況：2層から土器が出土した。
覆土の堆積状況：2層は炭片を多量に含んでいた。
出　土　遺　物：判別不能。
時　　期：不明。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果では、リン酸値が土坑内でもとくに2層が高かった。本址は唯一の平面隅丸方形を呈す資料である。

第70号貯蔵穴(第34図)

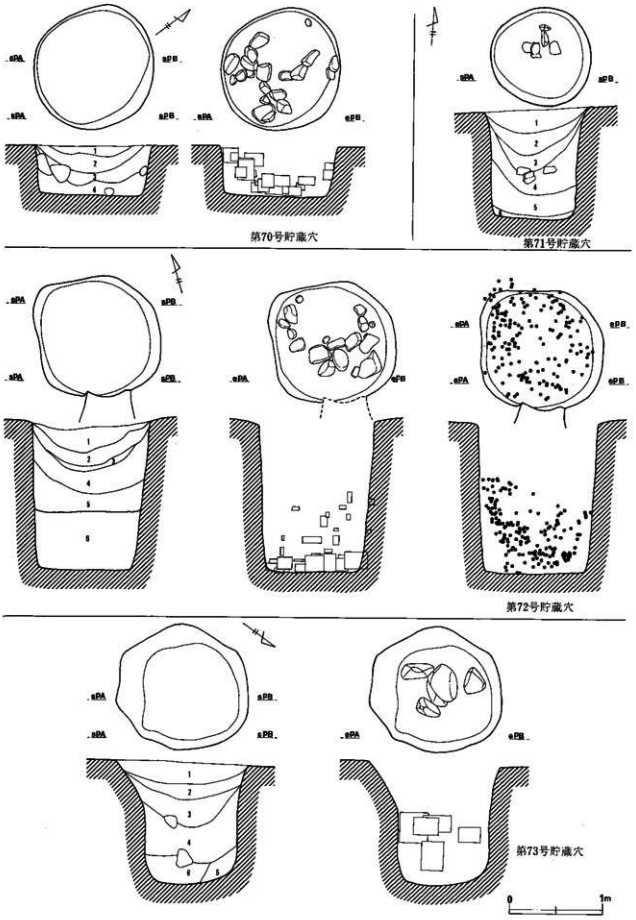
位　　置：XII－W－6。谷底部にあり、第17と第24号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。褐色土が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面128cm×124cmの円形。深さ52cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：3・4層にかけて礫が出土した。土器は覆土上層出土のものである。
覆土の堆積状況：Ⅶa層は入りこまない。3・4層中にⅧ層が混入する。
出　土　遺　物：土器(三十稲場式)。
時　　期：後期初頭。
備　　考：なし。

第71号貯蔵穴(第34図)

位　　置：XII－V－18。谷底部にあり、第34号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。Ⅷ層を混入する黄灰色土が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面104cm×104cmの円形。深さ116cmの断面筒状を呈す。
遺物出土状況：土器は1・4層で出土し、礫は4層から出土した。4層中位から5層にかけての壁に植物繊維(葉)がめぐるように検出された。5層は植物腐食片が多混入し、6層直上でクルミが8点出土した。
覆土の堆積状況：1・2・3層、4層、5層、6層に4大別される。Ⅶa層は入り込まない。
出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：リン酸・カルシウム分析の結果は、遺構外資料(上部壁外)の値が高い。本址のように底部に砂層が認められるものに第56号貯蔵穴などがある。第73号貯蔵穴と同じく、本坑の覆土上部は粘土(粘質土)によって土坑に蓋をしたと考えられる。

第72号貯蔵穴(第34図)

位　　置：XV－A－11・16。
検　　出：Ⅷ層上面。小礫まじりの黄灰色土が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面130cm×128cmの円形。深さ95cmの断面筒状を呈す。



第34図　縄文時代の貯蔵穴　(6)

遺物出土状況：土器の出土は大半が下位からであり、4層以下に集中した。礫が底で出土した。
覆土の堆積状況：全体に砂が混入し、とくに5層で著しい。
出　土　遺　物：不明。
時　　期：不明。
備　　考：全体に埋め戻された可能性がある。リン酸・カルシウム分析の結果では多少の値のばらつきはあるが、特徴的な変化はなかった。

第73号貯蔵穴(第34図)

位　　置：XⅡ－V－18。谷底部にあり、第34号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。黄灰色土が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面132cm×132cmの円形。深さ124cmの断面筒状を呈す。
遺物出土状況：4層壁際で注口土器が、6層上面から3層下部にかけて礫がまとまって出土した。6層上面と5層では植物の腐蝕片が多くみられる。3層中では木片・骨片が多く混入する。底付近でクルミが23点出土している。
覆土の堆積状況：1・2層、3層、4層、5・6層に4大別される。Ⅶa層は入りこまない。
出　土　遺　物：不明。
時　　期：不明。
備　　考：リン酸・カルシウム分析では1層で土坑外よりリン酸値が高かったものの、一般に土坑内外の値の差異は認められなかった。本坑の覆土堆積や遺物出土の状況は貯蔵方法や復元に示唆的であるが、堅果類は出土していない。

第74号貯蔵穴(第35図)

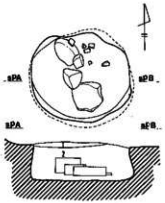
位　　置：XV－A－16。テラス状平坦面上にあり、第47号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。第1号土坑と重複するが、その前後関係は不明。
規模と形態：平面104cm×92cmの円形。深さ40cmの断面袋状を呈す。
遺物出土状況：底に礫が出土した。土器の出土量は少ない。
覆土の堆積状況：3層に分かれる。
出　土　遺　物：土器は時期の判別が不能である。
時　　期：不明。
備　　考：なし。

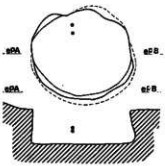
第75号貯蔵穴(第35図)

位　　置：XⅡ－V－14。谷底部にあり、第20号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。灰褐色土が落ちこむ。検出面上で拳大や人頭大の礫が認められたが、本址に伴うものではないと考える。単独。
規模と形態：平面102cm×98cmの円形。深さ28cmの断面袋状を呈す。
遺物出土状況：少量の土器が覆土上部で出土した。
覆土の堆積状況：黒褐色土は認められない。Ⅶa層は入りこまない。
出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：なし。

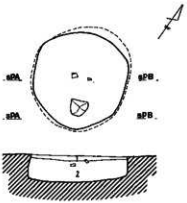
第76号貯蔵穴(第35図)

位　　置：XⅡ－U－20。谷底部にあり、第57号貯蔵穴に近接する。

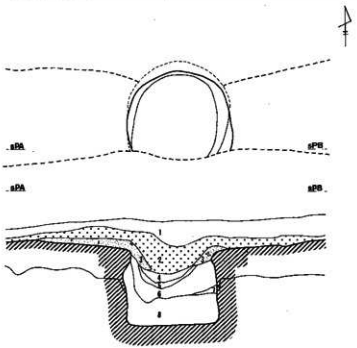


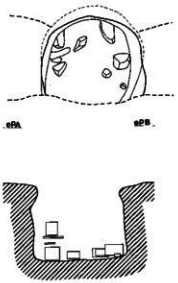


第74号貯蔵穴

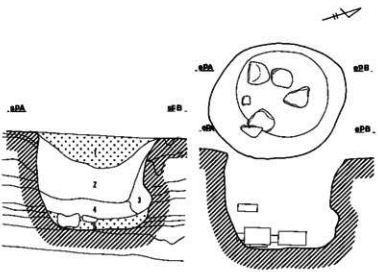


第75号貯蔵穴

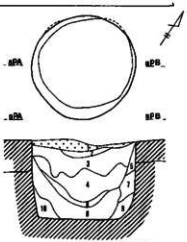




第76号貯蔵穴



第77号貯蔵穴



第78号貯蔵穴

0　1m

第35図　縄文時代の貯蔵穴　(17)

検　　出：Ⅶb層とⅧ層上面。排水溝により南側を消失した。
規模と形態：平面110cm×92cmの円形。深さ96cmの断面袋状を呈す。
遺物出土状況：土器の量は少なく、大半が2層で出土した。礫は大半がⅧ層から、また6・8層の境で樹皮が、Ⅶb層で196点クルミが出土した。
覆土の堆積状況：1・2・3層、4・5・6・7層、Ⅶb層に3大別される。Ⅶa層が入りこむ。
出土遺物：土器(称名寺式・堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：本坑は貯蔵機能が働いている段階で放棄されたものと考えられる。

第77号貯蔵穴(第35図)

位　　置：XⅡ－V－15。谷底部にあり、第7と第37号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。Ⅶa層が落ちこむ。単独。
規模と形態：平面150cm×120cmの円形。深さ100cmの断面袋状を呈す。
遺物出土状況：4層を除き各層より土器が少量と、2・4層で人頭大礫と石皿が出土した。クルミは5層中より腐食物とともに190点が検出された。
覆土の堆積状況：1層はⅦa層に相当する。3層は4層堆積時と同時期の壁面の崩落土と考えられる。4層は埋め戻し土である。
出土遺物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：3・4層と2層のあり方から、入子状になる別遺構の存在も考えられる。リン酸・カルシウム分析の結果からは土坑内外で大きな値の差異は認められない。

第78号貯蔵穴(第35図)

位　　置：XⅡ－U－14。谷底部にあり、やや離れて第15号貯蔵穴がある。
検　　出：Ⅶb層上面。検出面で人頭大の礫が露呈していた。単独。
規模と形態：平面110cm×110cmの円形。深さ84cmの断面筒状を呈す。
遺物出土状況：5層上面で樹皮が、7層でクルミが8点出土した。
覆土の堆積状況：1層はⅦ層に相当する。2・4層は埋め戻し土の可能性がある。壁際の土は砂まじりで、掘り下げに際しては覆土と地山がきれいに剥れた。
出土遺物：なし。
時　　期：不明。
備　　考：土層の堆積状況が類似するものに第71号貯蔵穴などがあり、円筒状の形態である。

(2) 土坑(第36図～第40図)

貯蔵穴以外とした土坑は22基ある。その分布は高位段丘面上と段丘斜面上部の緩斜面上に各2基、段丘斜面下部のテラス状平坦面上に15基、後背低地谷底部に3基となる。

高位段丘面上にある2基のうち第19号土坑は、リン酸・カルシウム分析の結果から墓と推測される。

段丘斜面上部の緩斜面上にある2基の立地は、いずれもテラス状平坦面への変換点にあたる。両者は他の土坑や貯蔵穴と比べ規模・形態が大きく異なる。両土坑ともに、坑内は段丘斜面からの湧水があり、一定の水量が溜ることになる。当時の地下水位は水さらし場状遺構の存在からみて、現在と大きな変化はないと考えられ、土坑構築にあえてこのような湧水地点が選ばれたことが指摘できる。

段丘斜面下部のテラス状平坦面上の13基は、第1号土坑にみられる規模の大きいもの、掘り方の浅いも

の、ピット状のものとに分けられる。このうち掘り方の浅いものは、XIV－E－18・19グリッドにまとまって存在し、円環状に分布しているようである。

後背低地谷底部の３基のうち、第20号土坑は第46号貯蔵穴の上に構築されている。第２・３号土坑は掘り方が浅く、礫の出土が多く、周辺の貯蔵穴とは形状の点でも異なっており、貯蔵穴以外の性格を考えたい。このような土坑は上記第１号土坑と同様に、作業場的な性格をもつ遺構であろう。時期が不明なものもあるが、高位段丘面上の第19号土坑が縄文時代中期後葉の他は、大半が後期初頭から中葉にかけての時期に所属しよう。

第１号土坑（第36図）

位　　置：XIV－E－15・20。テラス状平坦面上にあり、第33号貯蔵穴に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。検出面で土器の散布がみられた。第47や第74号貯蔵穴と重複するがその前後関係は不明。

規模と形態：平面300cm×252cmの不整形。深さ70cmの断面すり鉢状を呈す。

遺物出土状況：１層は土師器が、２・３層上部に縄文土器が出土した。礫は壁面から底面にかけて接して出土した。

覆土の堆積状況：３層はⅧ層を基調とする。

出土遺物：土器（称名寺式・三十稲場式）。

時　　期：後期初頭。

備　　考：周辺の土坑と比較して、規模が格段に大きい。リン酸・カルシウム分析の結果では遺構外の壁外資料が最も高い値を示した。

第２号土坑（第36図）

位　　置：XII－W－11・12。谷底部にあり、離れて第10・第23号貯蔵穴がある。

検　　出：Ⅷ層上面。検出面で礫が露呈していた。単独。

規模と形態：平面284cm×245cmの不定形。深さ20cmの断面船底状を呈す。

遺物出土状況：１層中から少量の土器出土。礫は底面より上層のものが多く、２層上面に集中する。

覆土の堆積状況：２層は固くしまる。

出土遺物：土器（堀之内式）。

時　　期：後期前葉。

備　　考：使用痕をもつ礫が多い。リン酸・カルシウム分析の結果では、土坑外の値が高い。

第３号土坑（第37図）

位　　置：XII－V－８・13。谷底部にあり、第51号貯蔵穴に近接する。

検　　出：Ⅶb層上部。検出面で人頭大の礫が露呈していた。単独。

規模と形態：平面236cm×170cmの楕円形。深さ６cmの断面皿状を呈す。

遺物出土状況：大半の礫は検出面より上層で出土した。

覆土の堆積状況：単層。Ⅶb層を基調とする。

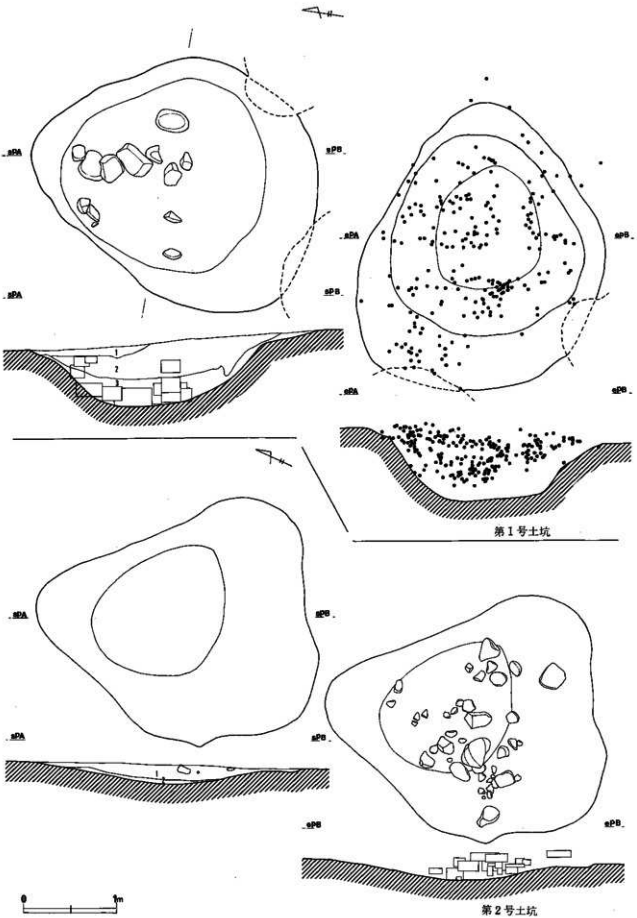
出土遺物：土器（加曽利E4式）。

時　　期：中期末葉。

第４号土坑（第37図）

位　　置：XIV－E－18。テラス状平坦面上にあり、第13号土坑に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。第８号土坑と重複するが、その前後関係は不明。



第36図　縄文時代の土坑　(1)

規 模 と 形 態：平面108cm×90cmの方形。深さ8cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：1層で土器が出土している。
覆土の堆積状況：2層に分かれる。
出　土　遺　物：時期の判別は不明。

第5号土坑(第37図)

位　　置：XIV－E－19。テラス状平坦面上にあり、第54号住居址に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。黒褐色土が落ちこむ。西側を排水溝により失った。
規 模 と 形 態：推定で平面165cm×152cmの円形。深さ10cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：礫が出土した。
覆土の堆積状況：第10や第11号土坑と同様であった。
出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。

第6号土坑(第37図)

位　　置：XIV－E－18。テラス状平坦面上にあり、第8号土坑に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。第14号土坑と重複するが、その前後関係は不明。小ピットに切られる。
規模と形態　：推定で平面102cm×90cmの方形。深さ13cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況　：1層で土器が出土している。
覆土の堆積状況：2層に分かれる。
出　土　遺　物：時期の判別は不能。

第7号土坑(第37図)

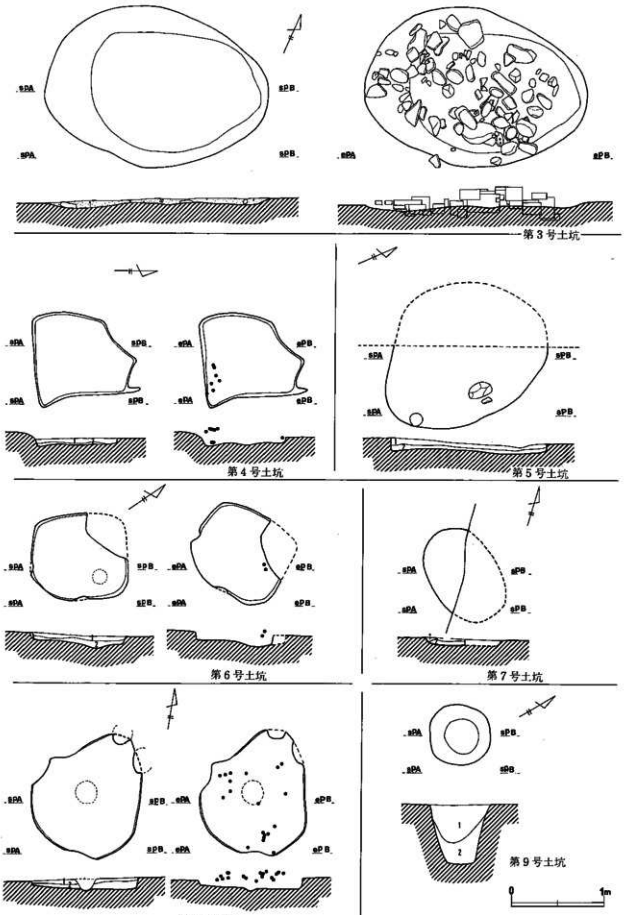
位　　置：XIV－E－19。テラス状平坦面上にあり、第8号土坑に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。第6号溝(平安)に切られる。
規 模 と 形 態：推定で平面106cm×72cmの楕円形。深さ8cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：1層で土器が出土している。
覆土の堆積状況：2層に分かれる。
出　土　遺　物：時期の判別は不能。

第8号土坑(第37図)

位　　置：XIV－E－18。テラス状平坦面上にあり、第4号土坑に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。第4や第15号土坑と重複するが、その前後関係は不明。小ピット3基に切られる。
規 模 と 形 態：平面126cm×115cmの不整形。深さ11cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：1層で土器が出土している。
覆土の堆積状況：2層に分かれる。
出　土　遺　物：時期の判別は不能。

第9号土坑(第37図)

位　　置：XIV－E－15。テラス状平坦面上にあり、第16号土坑に近接する。
検　　出：Ⅶ層上面。灰褐色土が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面64cm×63cmの円形。深さ62cmの断面筒状を呈す。
遺物出土状況：なし。
覆土の堆積状況：1層は埋め戻された可能性がある。



第37図　縄文時代の土坑　(2)

出　土　遺　物：なし。
時　　期：不明。

第10号土坑(第38図)

位　　置：XIV－E－19。テラス状平坦面上にあり、第11号土坑に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。検出面で土器や礫が散在していた。第6号(平安)溝に切られる。
規 模 と 形 態：推定で平面124cm×124cmの円形。深さ21cmの断面タライ状を呈す。底面は起伏あり。
遺物出土状況：土器の大半が1層から出土した。
覆土の堆積状況：2層は周囲からのⅧ層の流入と考えられる。
出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。

第11号土坑(第38図)

位　　置：XIV－E－19。テラス状平坦面上にあり、第61号貯蔵穴に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。検出面で土器や礫が散在していた。第65号貯蔵穴と重複するが、その前後関係については不明瞭であった。
規 模 と 形 態：推定で平面122cm×114cmの円形。深さ14cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：土器の大半が1層から出土した。
覆土の堆積状況：第10号土坑と同様である。
出　土　遺　物：土器(加曽利E4式・称名寺式・堀之内式)。
時　　期：後期前葉。

第12号土坑(第38図)

位　　置：XII－V－19。谷底部にあり、離れて第36号貯蔵穴がある。
検　　出：Ⅶ層上面。Ⅶ層が落ちこむ。単独。
規 模 と 形 態：平面78cm×72cmの円形。深さ44cmの断面すり鉢状を呈す。
遺物出土状況：1層から土器が出土した。
覆土の堆積状況：基本土層Ⅶ層が入りこむ。
出　土　遺　物：時期の判別は不明。
備　　考：低地で検出された土坑としては規模が最小である。リン酸・カルシウム分析の結果は、2層の値が土坑外よりも高い。

第13号土坑(第38図)

位　　置：XIV－E－18。テラス状平坦面上にあり、第4号土坑に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。第6号(平安)溝に切られる。
規 模 と 形 態：推定で平面100cm×70cmの楕円形。深さ12cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：1層で土器が出土している。
覆土の堆積状況：2層に分かれる。
出　土　遺　物：時期の判別は不能。

第14号土坑(第38図)

位　　置：XIV－E－18。テラス状平坦面上にあり、第8号土坑に近接する。
検　　出：Ⅷ層上面。第6号土坑と重複するが、その前後関係は不明。
規 模 と 形 態：推定で平面72cm×70cmの方形。深さ11cmの断面タライ状を呈す。
遺物出土状況：1層で土器が出土している。

覆土の堆積状況：２層に分かれる。

出　土　遺　物：時期の判別は不能。

第15号土坑(第38図)

位　　置：XIV－E－18。テラス状平坦面上にあり、第14号土坑に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。第８号土坑と重複するが、その前後関係は不明であった。

規 模 と 形 態：平面44cm×44cmの円形。深さ11cmの底が波打つ断面タライ状を呈す。

遺物出土状況：なし。

覆土の堆積状況：２層に分かれる。

出　土　遺　物：なし。

時　　期：不明。

備　　考：第５・第10・第11・第15号土坑や第７号土坑などは規模の大小はあるものの、掘りこみが浅く、一定の範囲に近接し、第５号土坑を除いて弧を描くようにして分布している。

第16号土坑(第38図)

位　　置：XIV－E－10。テラス状平坦面上にあり、第９号土坑に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。検出面で人頭大の礫が露呈していた。単独。

規 模 と 形 態：平面56cm×56cmの円形。深さ30cmの断面筒状を呈す。

遺物出土状況：なし。

覆土の堆積状況：単層。

出　土　遺　物：なし。

時　　期：不明。

第17号土坑(第38図)

位　　置：XIV－E－15。テラス状平坦面上にあり、第９号土坑に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。円環状の黒色土が広がり、その中に黒褐色土が落ちこむ。単独。

規 模 と 形 態：平面56cm×51cmの楕円形。深さ36cmの断面筒状を呈す。

遺物出土状況：底に礫と土器が各１個出土した。

覆土の堆積状況：２層は非常にしまりが悪い。

出　土　遺　物：時期の判別は不明。

備　　考：本坑と第９号土坑は近接するとともに、形態が近似し一群をなす。

第18号土坑(第39図)

位　　置：XV－B－11。段丘斜面にあり、傾斜部から緩斜面への移行地点にあたる。

検　　出：IV・IVb層上面。明黄褐色土が落ちこむ。単独。

規 模 と 形 態：平面248cm×128cmの半月形。深さ100cmの断面すり鉢状を呈す。本坑南側には土坑の外周と対応するように幅20cm前後の溝が半円状にめぐる。溝の中間付近では礫の入りこんだ窪みがある。溝に近接してピット２基が伴う。

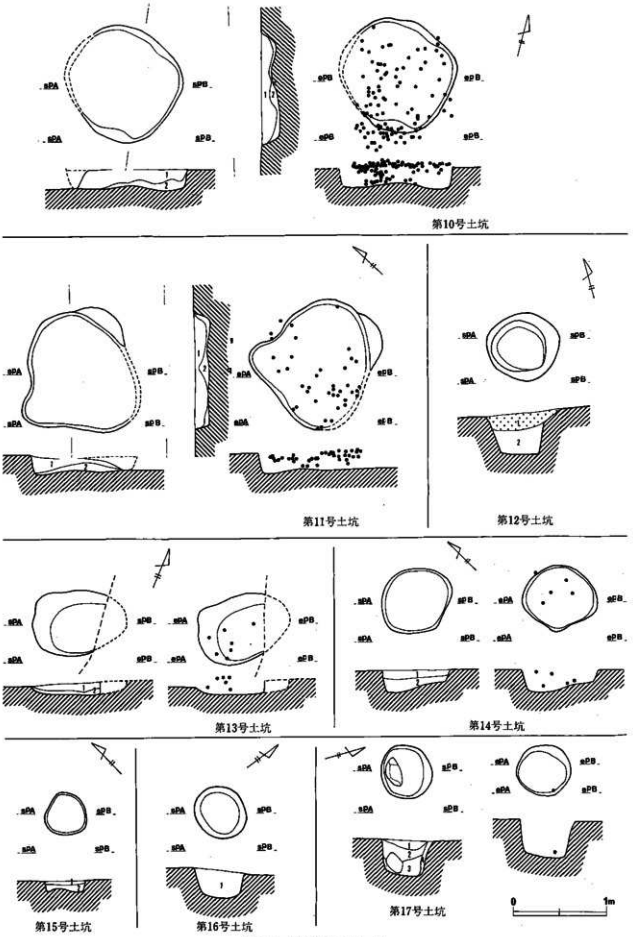
遺物出土状況：坑内の全層で土器が出土しているが量は少ない。５・６層から骨片が出土した。

覆土の堆積状況：４層まではIV層の流入と判断される。

出　土　遺　物：土器(称名寺式)。

時　　期：後期初頭。

備　　考：本坑では斜面部からの湧水がみられ、５層付近まで溜っていた。



第38図　縄文時代の土坑　(3)

第19号土坑(第39図)

位　　置：XIV－T－1。高位段丘面上にある。

検　　出：基本土層Ⅷ層上面。調査区南東際。単独。

規模と形態：平面70cm×68cmの円形。深さ44cmの断面筒状を呈す。壁下位で段をもつ。

遺物出土状況　：底で土器が出土した。

覆土の堆積状況：単層。

出土遺物：不明。

時　　期：不明。

備　　考：周辺には本坑と同時期の遺構は検出されていない。リン酸・カルシウム分析の結果、土坑内の値が高い。

第20号土坑(第39図)

位　　置：XII－V－10。谷底部にあり、第9号貯蔵穴に近接する。

検　　出：第21号貯蔵穴内を切る。

規模と形態：推定で平面76cm×74cmの円形。深さ22cmの断面すり鉢状を呈す。

遺物出土状況：土器と微細な黒曜石片が出土した。

覆土の堆積状況：単層。第21号貯蔵穴覆土との相違は明確でないが、底から壁にかけて帯状の炭の分布が認められた。

出土遺物：不明。

時　　期：不明。

第21号土坑(第39図)

位　　置：XV－K－8。高位段丘上、包含層谷内にある。

検　　出：Ⅷ層上面。検出面で人頭大の礫が露呈していた。単独。

規模と形態：平面168cm×160cmの円形。深さ24cmの断面すり鉢状を呈す。

遺物出土状況：1・2層から土器が出土し、2層に集中する。礫は2層内で検出。

覆土の堆積状況：1層は包含層下部層にあたる。

出土遺物：土器(堀之内式)。

時　　期：後期前葉以前。

備　　考：包含層谷形成以前に本坑は構築された。出土した礫は板状の安山岩(鉄平石)が多く、熱をうけている痕跡がみられる。

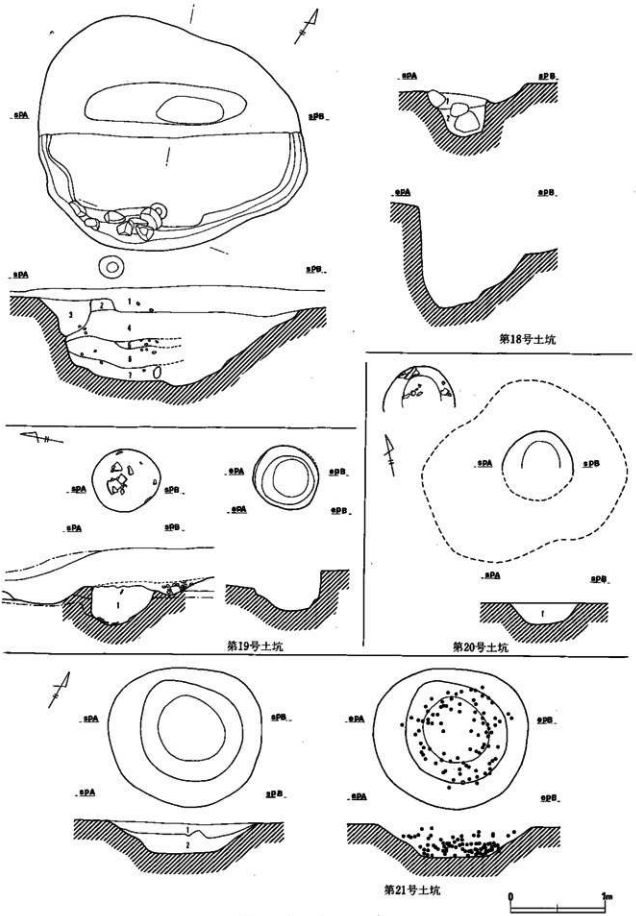
第22号土坑(第40図)

位　　置：XIV－E－24・J－4。段丘斜面にあり、傾斜部から緩斜面への移行地点にあたる。東側にやや離れて水さらし場状遺構が存在する。

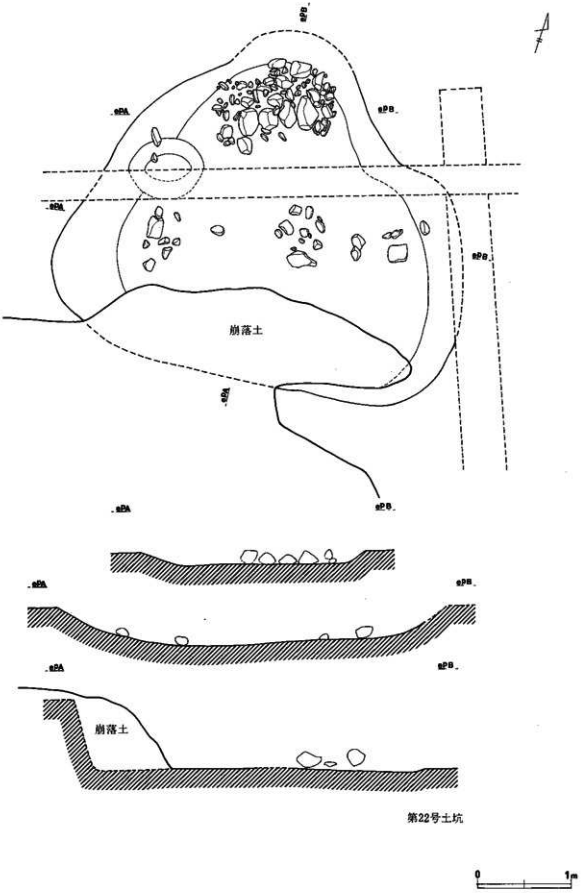
検　　出：IIIないしIV層上面。黒褐色土が落ちこむ。トレンチや配管によって部分的に不明であった。また本坑南半分は斜面上にあたり、底面が斜面部に入るにしたがい、湧水が著しく、結局斜面からの崩落を招いた。このため南側については詳細は不明となった。

規模と形態：平面220cm×188cmの隅丸三角形と推測される。底は確認された範囲では平坦であり、低位段丘面から斜面に向かって平らに掘り取ったことが考えられる。東側に未確認の部分もあるが、径40cmほどの円形の落ちこみが存在すると推測される。

遺物出土状況：礫は北側に集中し、中央部では散見される程度となる。集中した礫内には若干石器が混在する。土器は北側覆土内に散見されるが量は少なかった。



第39図　縄文時代の土坑　(4)



第22号土坑

第40図　縄文時代の土坑　(5)

覆土の堆積状況：掘り方の深い斜面側で観察ができなかったが、基本的には黒褐色土の単層であった。
出　土　遺　物：土器(堀之内式)。
時　　期：後期前葉。
備　　考：本坑では斜面部からの湧水がみられる。礫のまとまりなどから、水を使った作業場的な空間を考えたいが、それを裏づける他の所見は現段階ではなかった。

(3)　水さらし場状遺構(第41図～第50図)

水さらし場状遺構は、高位段丘面縁辺の湧水点から北西方向に流れる小河川によって開析された谷の付け根に存在する。ここは調査前、地元で古くから「下井戸」とよばれていた湧水地で、隣接宅で利用されるとともに、付近では水田を維持するためにポンプによる揚水が行われるといった風景がみられた。

水さらし場状遺構のある地点は、年次調査区の境にあたり2年次にわたる調査となった。また、この境では止水のための鋼矢板工事を行ったので、矢板により遺構を切断する結果となった。さらに、調査区際の排水溝で検出されたため、東側の一部をやむなく破壊した。

遺構名称については、「水さらし場状遺構」・「木枠状遺構」などを速報(註1)では使用したが、本報告で最終的に「水さらし場状遺構」として統一した。

位　　置：XV－A－16。後背低地部、湧水地から派生する小河川によって開析された谷の付け根。
検　　出：XII層上面。年次調査区の境に排水溝を設ける際に、木材の一部を確認した。この段階で、縄文土器・土師器・カワラケなどが検出されたため、当初、古代か中世期の遺構と推測された。
調　査　経　過：　1年次は遺構全体の8割、2年次は西側の残り全部を調査した。1年次の遺構調査は排水溝南側の段丘斜面側から始め、木枠本体部は排水溝側から掘り下げていった。木枠本体が明瞭に姿を表わした段階で、年次調査区境側の西壁を土層観察した。このため、本体内部中心での堆積土層の観察はできていない。また、平面的な検出作業が不可能であったため、本址構築に関する落ちこみ(掘り方)などは観察できなかった。木枠本体南側の傾斜の緩やかな平坦面で、拳大や人頭大の礫の広がりが認められた。この礫は木枠本体に近接した地点では折り重なるように多数認められ、そこから崩れ落ちたように木枠本体内にも入りこんでいた。

2年次の遺構調査で初めて本址が、湧水地より派生した小河川内を横断するように掘りこまれていたことが確認された。また、2年次に検出された木枠の配置と1年次のそれとを比較検討した結果、3基の木枠が存在したことが確認された。これにしたがい、南側から1号・2号・3号木枠と名付けた。

形態・規模：**1号木枠**

2m×1.6mのやや長方形に側板を組み、底板が敷かれる箱状である。四隅に直径30cm弱の丸木材が打ちこまれ、底板が4枚、東西に隙間なく敷かれ、杭の外側に4枚の側板がはられていた。側板は3方に一枚づつ検出されているが、本来、底板の上や周囲で出土した板などがもう一段上にのって、側板は2段で構築されていたとも考えられる。この場合、確認された掘り方上端に板の上端がくるような設計が推測される。底板の下には小礫が敷かれ、そのためか、地中に接する杭の回りでは小礫が杭に張り

つくように認められた。南西隅の外側には南側板を支えるための径22cm弱の半割の杭がり、北西隅と北東隅には北側板を支えたと考えられる人頭大の礫があった。

：2号木枠

遺存状態が悪いためか、形態ははっきりしない。東・西・南3面の側板が確認されたが、北側はない。底板は南側で認められた。東側で径21cm弱の半割の杭と径10cmの杭が、また北側で径20m弱の半割の杭と径20cm弱の杭がともにならんで検出された。あたかも谷の方向にそうように東側の軸がやや西へ傾く。

：3号木枠

形態ははっきりしない。西側の掘り方壁にそった2本の丸木材と、その間にある径20cm弱の杭が南北に伸び、壁との間に側板をもつこと、さらに北側の側板が検出されたことにより、木枠と推測した。掘り方の輪郭から想定される規模は、一辺2.4mの方形か長方形を呈し、1・2号木枠より一周り規模が大きかったと考えられる。杭・丸木材の掘り方内には、小礫が入るとともに丸木材周辺に小礫がはりついていた。3号木枠に伴うかたちで検出されたこの掘り方は、東側にさらにのびると判断されることから、1号から3号木枠を囲むように存在したと推測される。掘り方の検出面からの深さは、南側段丘斜面よりで60cm、北側で40cmをはかる。1号木枠の北側丸木材頂部は、掘り方上端に接する高さにあたる。

遺物出土状況：遺構と確実に伴出したと考えられる遺物はない。1号木枠の底板に接して、加曽利B式の浅鉢が検出されている。トチとクルミが材に付着して少量出土した。

丸木材や杭ともに頂部の遺存状態が悪いが、先端がとがるようなものが多い。底板や側板などは遺存状態は良好であった。構築材の樹種はクリ材が主である。

覆土の堆積状況：1号から3号木枠をとおして掘り方内に5枚の堆積土層が確認できた。南北方向2点の所見から、堆積は南西方向からの流れこみであると推測される。

出土遺物：加曽利E4式～加曽利B式

時期：1号木枠の丸木資料を放射性炭素年代測定法により分析した。結果、B.P.5,240±110という年代が得られている。

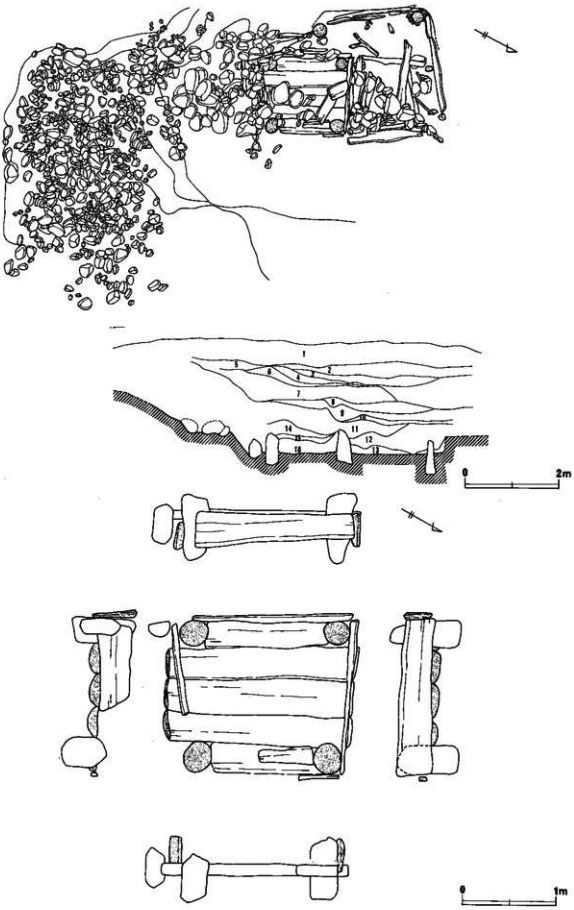
備考：(A)－木枠本体の南側で検出された礫は、段丘斜面を構成する基盤礫層の2次堆積であることが2年次の調査で確認されている。この礫層は木枠本体下のピート質層(19層)より下部にあることが観察されたので、礫そのものは他所からもち運んだものでないといえる。しかしながら、礫の検出状況からみて、湧水による段丘斜面側の崩落を防ぐために、礫を積み上げるなどの行為があった可能性は否定できない。さらに2号木枠上部13層下端の礫は分布から、2号木枠の南側に積まれていたと推測される。

(B)－3基の木枠については、1・2号木枠と3号木枠との軸方向の差異が指摘できる。最も形態の明瞭な1号木枠を中心に考えた場合、2号木枠は併存していた可能性が強い。1号木枠の南側側板を支える2個の礫が2号木枠内に置かれていることは、このことを裏づけている。3号木枠はその軸方向が1・2号と異なること、側板が西側・北側で検出されていることから考えて、性格として以下の3つが推測される。

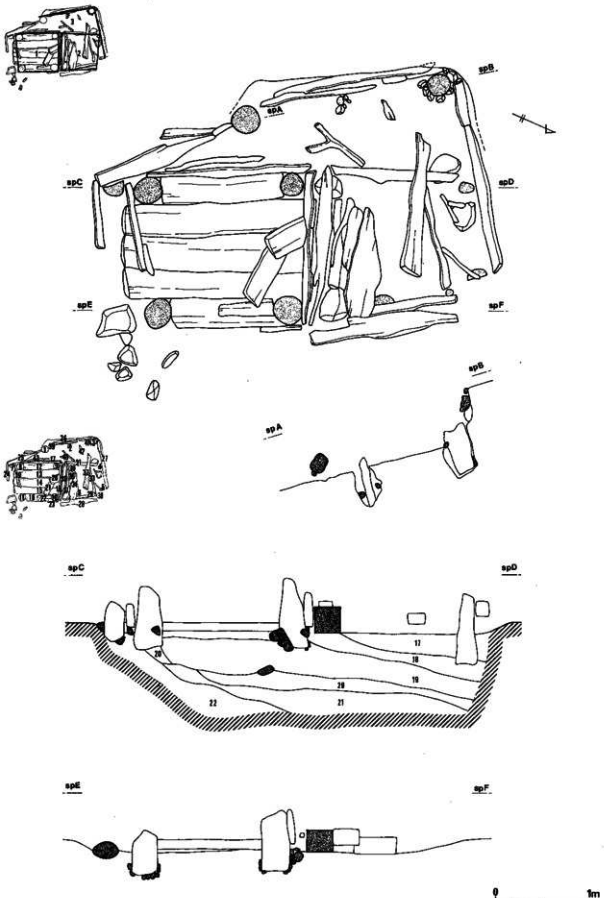
1・2号木枠に伴う付属施設。

1・2号木枠の拡張。

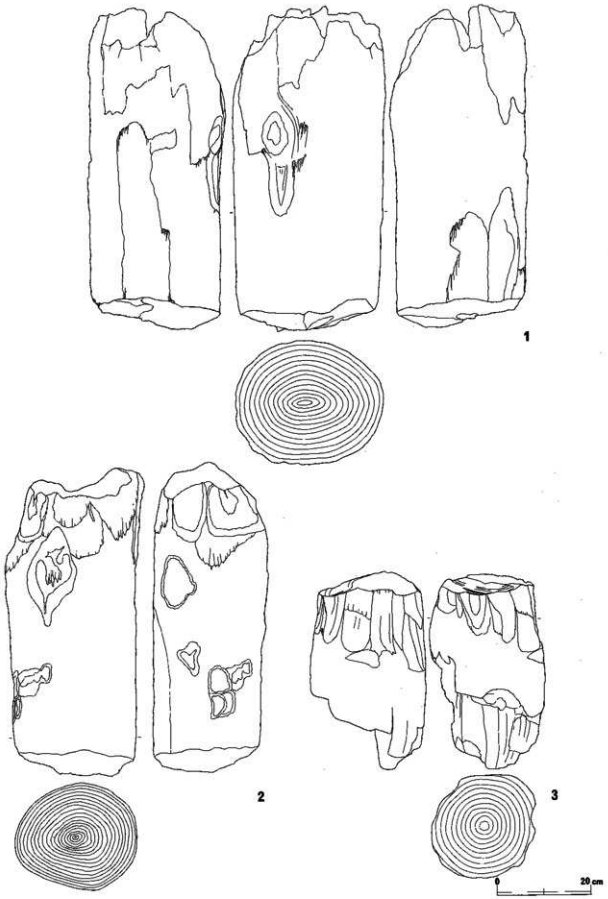
1・2号木枠以前に構築されたもの。



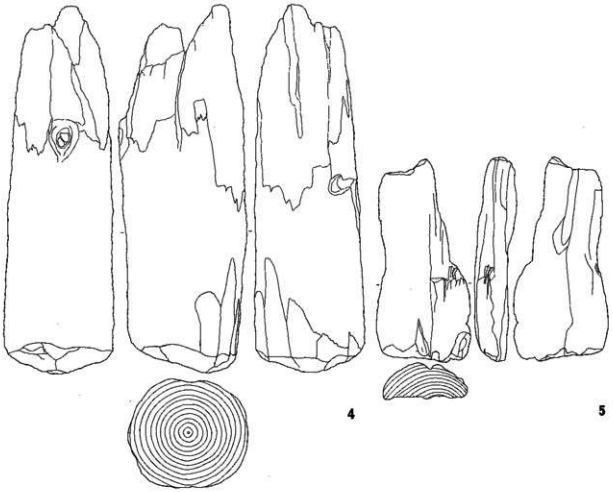
第41図　水さらし場状遺構　(1)

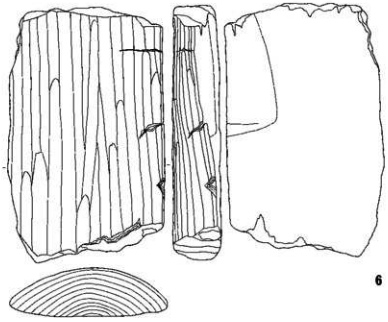


第42図　水さらし場状遺構　(2)

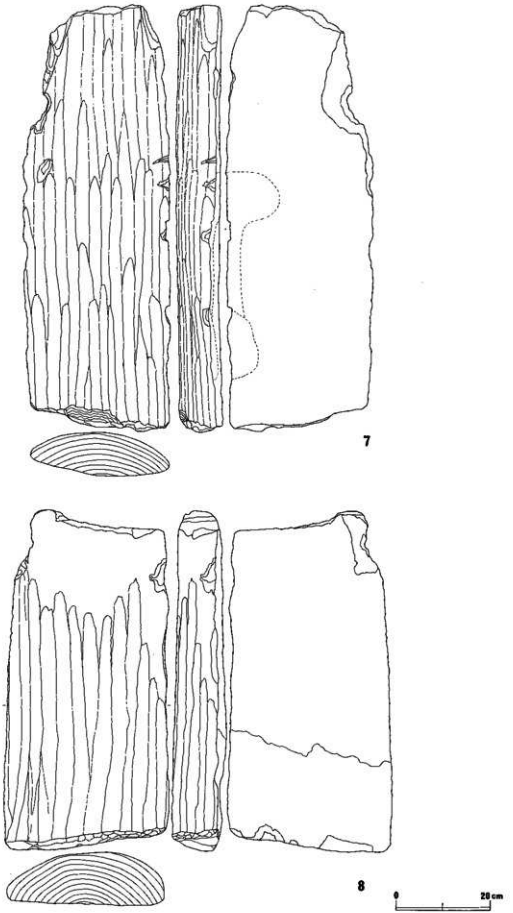


第43図　水さらし場状遺構　部材 (1)

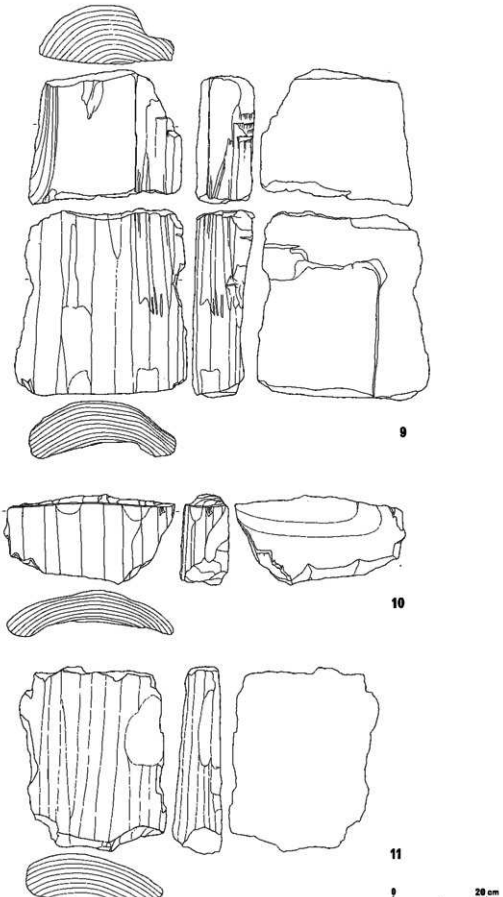




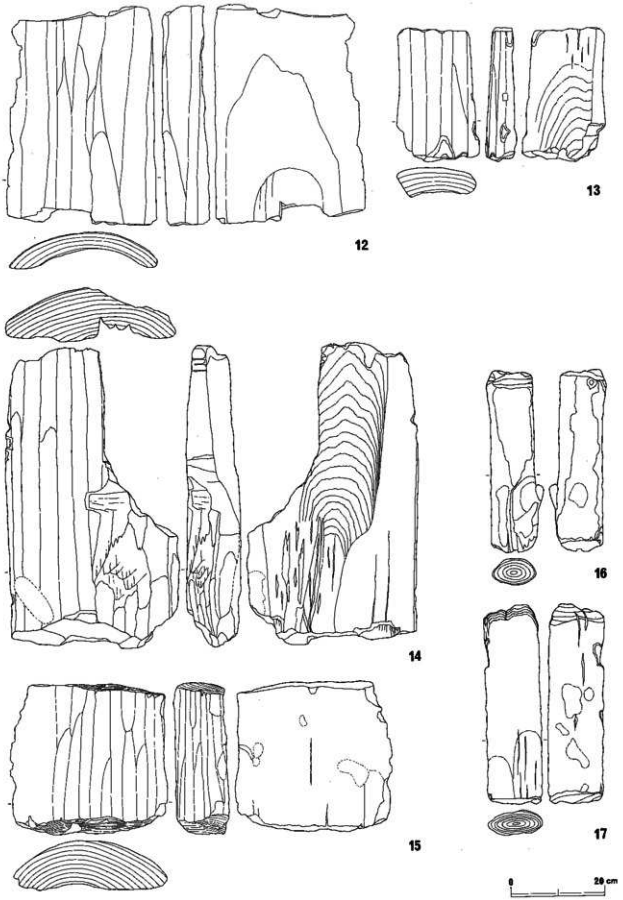
第44図　水さらし場状遺構　部材　(2)



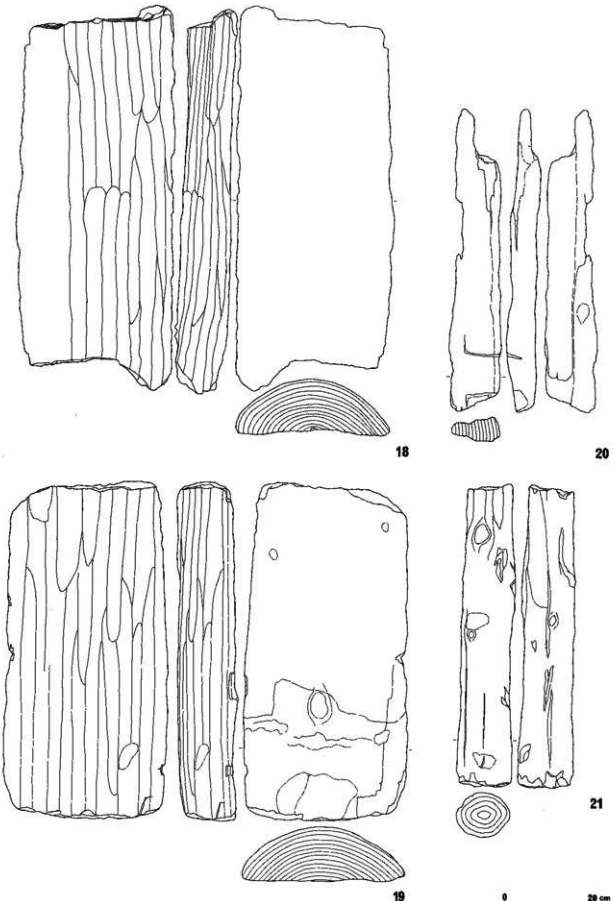
第45図　水さらし場状遺構　部材 (3)



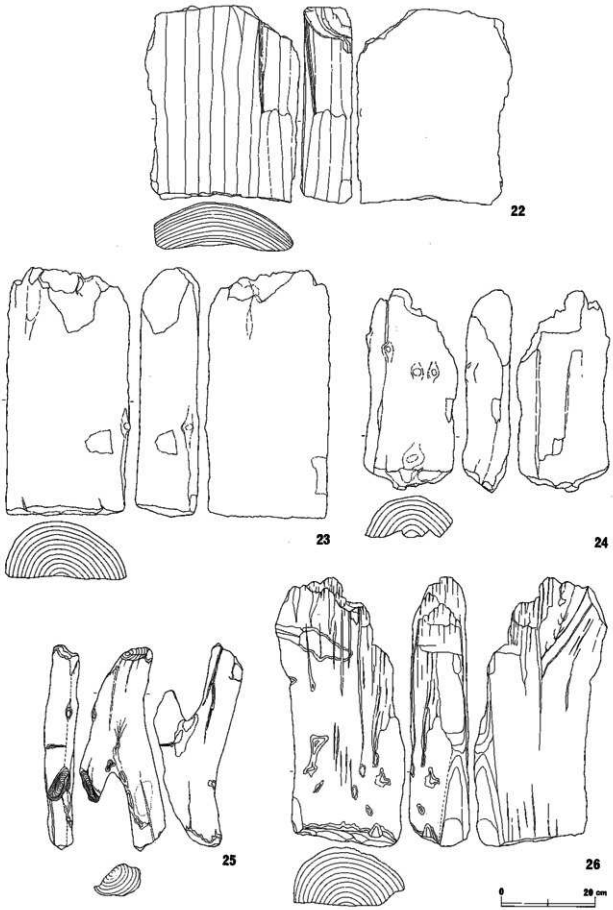
第46図　水さらし場状遺構　部材　(4)



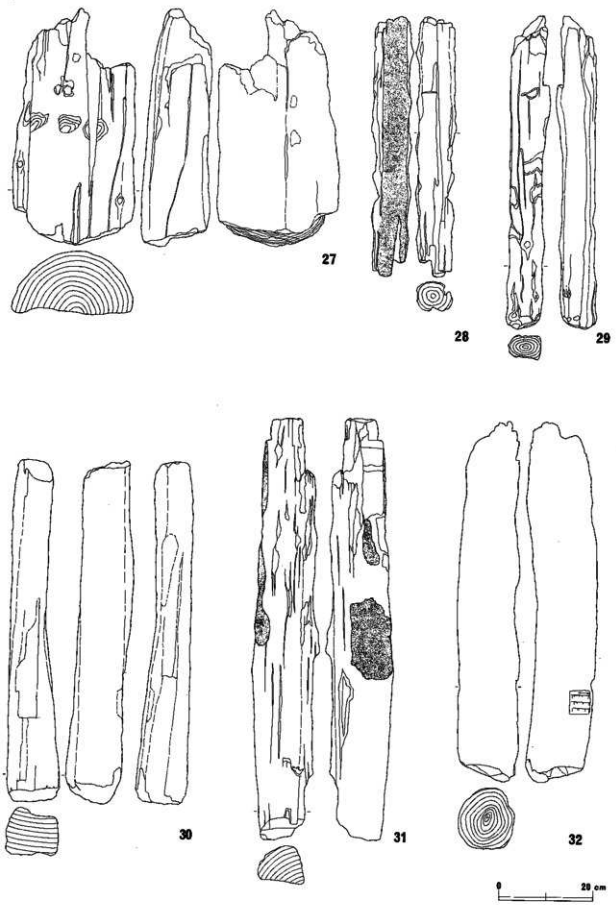
第47図　水さらし場状遺構　部材 (5)



第48図　水さらし場状遺構　部材 (6)



第49図　水さらし場状遺構　部材　(7)



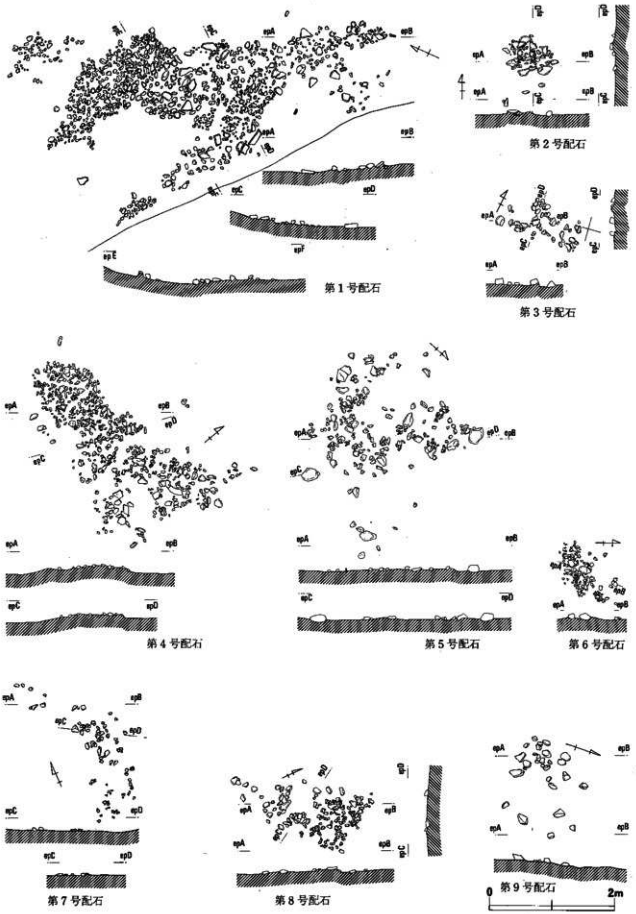
第50図　水さらし場状遺構　部材　(8)

以上の性格のうち、どれを選択するかの根拠は今回の調査では得られなかった。推定される全体の掘り方は、水流にそって南北で4.3m・東西3mの縦長の掘りこみが推測される。

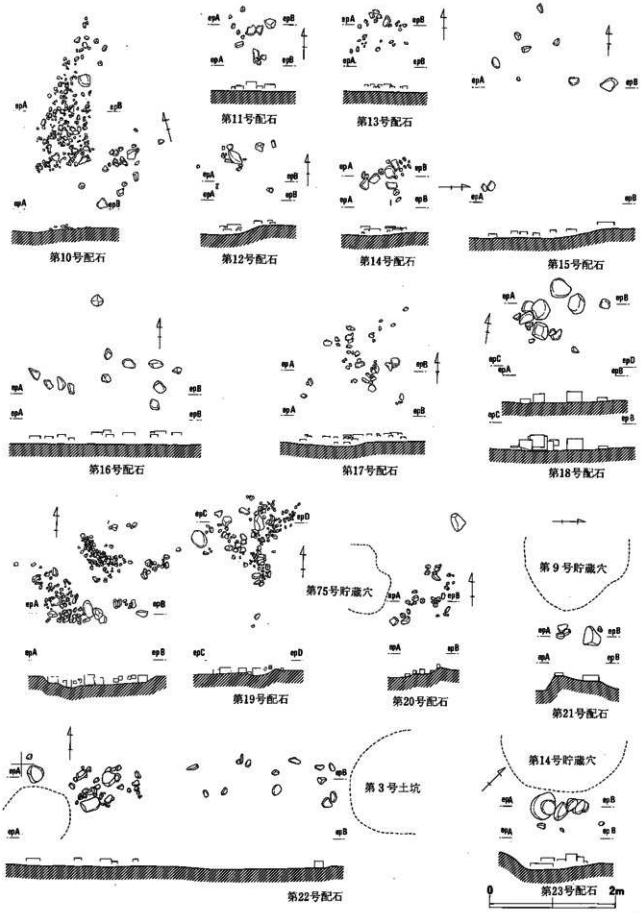
(C)－3基の木枠をひとまとめにしてその性格を考えると、機能としては段丘側からの湧水を遺構内に貯水するためのものといえる。そのために竪穴を掘り、内部に木枠を構築している。周囲に検出された貯蔵穴や堅果類などから、本址は貯蔵穴とセットをなす堅果類などの水さらしを行うための施設と判断したい。

第2表　水さらし場状遺構部材一覧

No.	材	長×幅×厚・径(cm)	樹　種	備　考	図版 No.
1	割り材	53×23×15	クリ（ブナ科）	板目。杭。焼痕あり。	26
2		52×径10	クリ（ブナ科）	杭	
3		50×径18	クリ（ブナ科）	杭	
4		18×径16		杭	
5	割り材	48×24×20	クリ（ブナ科）		
6	割り材	68×10×21	クリ（ブナ科）	4分割板目。杭？	
7	丸太材	78×26×22	クリ（ブナ科）	芯持ち。杭	4・24
8	丸太材	69×25×30	クリ（ブナ科）	芯持ち。杭	1
9	丸太材	78×径28		芯持ち。杭	
10	丸太材	66×27×21	クリ（ブナ科）	芯持ち。杭	2
11	割り材	48×14×9	クリ（ブナ科）	杭？	3
12	板材	128×29×9	クリ（ブナ科）	柾目。底板？	
13	丸太材	200×34×10	トネリコ属（モクセイ科）	板目。底板。炭化痕あり。	15・18・19・22
14	板材	200×36×10	トネリコ属（モクセイ科）	板目。底板。炭化痕あり。	9～14
15	板材	200×34×9	トネリコ属（モクセイ科）	板目。底板	6・7・8
16	板材	108×30×11		底板	
17	板材	174×36×4	クリ（ブナ科）	板目。側板	
18	板材	164×26×10	クリ（ブナ科）	板目。側板	
19	板材	96×24×9		柾目。側板？	
20	割り材	44×20×16		板目。側板？　炭化痕あり。	
21		56×20×16			
22		58×16×10			
23	割り材	93×36×6	クヌギ節（ブナ科）	板目。側板？	
24	割り材	72×21×4		板目	5
25	板材	154×14×12		板目。側板	30
26		126×54×22	クリ（ブナ科）	側板	
27	割り材	196×径12	クリ（ブナ科）	4分割板目。側板。炭化痕あり。	31
28	板材	156×45×18		側板	
29		152×10×3		側板	
30	板材	168×14×6	クリ（ブナ科）	板目	
31	丸太材	140×径5	クリ（ブナ科）		
32	板材	152×19×12	クリ（ブナ科）		
33		163×10×4			
34	割り材	118×27×17	クリ（ブナ科）	炭化痕あり。	
35	板材	88×12×7		柾目。炭化痕あり。	
36		76×径4			
37	割り材	96×23×16		側板。焼痕あり。	27
38		30×径9			
39		34×24×6			
40		66×径4			
41		66×54×22	クリ（ブナ科）		
42		22×8×2	クリ（ブナ科）		
43	板材	96×13×10	クリ（ブナ科）	板目	



第51図　縄文時代の配石遺構　(1)



第52図　縄文時代の配石遺構　(2)

(4) 配　石(第51図～第53図)

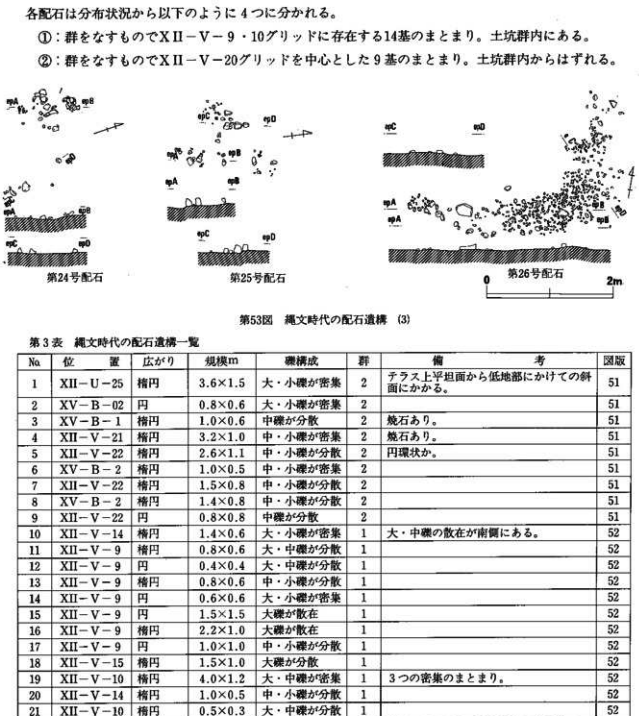
人頭大の河床礫から砂利状の小礫などで構成される礫のまとまりを配石とした。すべて後背低地部で検出され、26基を数える。以下、全体を一括して概要を記す。

後背低地部で検出された縄文時代の遺構の大半は、低地部Ⅶａ層に被覆されていた。このためこの層によって運ばれた小礫が、配石に混在した可能性も考えられるが、人頭大の河床礫などは、低地部Ⅶａ層に含まれるものでないことから、ほぼ原位置をとどめていると考えられる。

各配石は分布状況から以下のように４つに分かれる。

①：群をなすものでXⅡ－Ⅴ－９・10グリッドに存在する14基のまとまり。土坑群内にある。

②：群をなすものでXⅡ－Ⅴ－20グリッドを中心とした９基のまとまり。土坑群内からはずれる。



第53図　縄文時代の配石遺構 (3)

第３表　縄文時代の配石遺構一覧

No.	位　置	広がり	規模m	礫構成	群	備　考	図版
1	XⅡ－U－25	楕円	3.6×1.5	大・小礫が密集	2	テラス上平坦面から低地部にかけての斜面にかかる。	51
2	XV－B－02	円	0.8×0.6	大・小礫が密集	2		51
3	XV－B－１	楕円	1.0×0.6	中礫が分散	2	焼石あり。	51
4	XⅡ－V－21	楕円	3.2×1.0	中・小礫が密集	2	焼石あり。	51
5	XⅡ－V－22	楕円	2.6×1.1	中・小礫が分散	2	円環状か。	51
6	XV－B－２	楕円	1.0×0.5	中・小礫が密集	2		51
7	XⅡ－V－22	楕円	1.5×0.8	中・小礫が分散	2		51
8	XV－B－２	楕円	1.4×0.8	中・小礫が分散	2		51
9	XⅡ－V－22	円	0.8×0.8	中礫が分散	2		51
10	XⅡ－V－14	楕円	1.4×0.6	大・小礫が密集	1	大・中礫の散在が南側にある。	52
11	XⅡ－V－９	楕円	0.8×0.6	大・中礫が分散	1		52
12	XⅡ－V－９	円	0.4×0.4	大・中礫が分散	1		52
13	XⅡ－V－９	楕円	0.8×0.6	中・小礫が分散	1		52
14	XⅡ－V－９	円	0.6×0.6	大・小礫が密集	1		52
15	XⅡ－V－９	円	1.5×1.5	大礫が散在	1		52
16	XⅡ－V－９	楕円	2.2×1.0	大礫が散在	1		52
17	XⅡ－V－９	円	1.0×1.0	中・小礫が分散	1		52
18	XⅡ－V－15	楕円	1.5×1.0	大礫が分散	1		52
19	XⅡ－V－10	楕円	4.0×1.2	大・中礫が密集	1	３つの密集のまとまり。	52
20	XⅡ－V－14	楕円	1.0×0.5	中・小礫が分散	1		52
21	XⅡ－V－10	楕円	0.5×0.3	大・中礫が分散	1		52
22	XⅡ－V－13	楕円	4.0×0.7	大・中礫が分散	1	東側のまとまりに対し西側は散在する。	52
23	XⅡ－V－10	楕円	1.8×0.3	大礫が密集	1		52
24	XⅡ－U－15	楕円	2.0×1.0	中・小礫が分散	3	南側に礫の散在がある。	53
25	XⅡ－U－15	楕円	3.0×2.4	中・小礫が分散	3		53
26	XⅡ－U－23	楕円	3.3×0.6	中・小礫が密集	4	２群から離れて単独に近い。	53

③：群をなすものでXⅡ－U－15グリッドに存在する2基。土坑に近接する。

④：XⅡ－U－23グリッドに存在する単独のもの。土坑に近接する。

さらに、各配石の礫構成を、人頭大の河床礫を大礫、砂利状の小石を小礫、それらの中間を中礫とし、その様相をみる限り、多様な構成であることがわかる。しかしながら、その分布からは人頭大の礫がまとまっているものは①に多いことが指摘される。礫の集石の状況は密集形から散在形まで多様だが、全体としては前者より後者のほうが一般的である。また、配石を上部構造とするような土坑は認められていない。

配石の性格については、立地および周辺遺構、とくに土坑(貯蔵穴)の存在から、堅果類などの加工場が想定される。XⅡ－V－9・10グリッドの14基のまとまりは、台石として利用された痕跡を残す大礫が認められている。

石器は磨石類・敲石・石皿・台石の他に石棒などが礫にまじって出土している。

時期は検出状況が同じである土坑群とおおむね併行すると考えられるが、個々の構築時期などの詳細は不明である。

(5)　住居址(第54図)

今回の調査で検出された竪穴住居址は5棟である。高位段丘面上に1棟(第4号)、段丘斜面上部の緩斜面上に3棟(第1・3・5号)、段丘斜面下部のテラス状平坦面に1棟(第2号)と、その分布は3地点に分かれる。このうち段丘斜面上部の緩斜面上の3棟は敷石住居址である。5棟とも遺存状態が悪く、壁面は確認されていない。時期は以下のようになる。

縄文中期後葉　第4号住居址

縄文後期初頭　第1号住居址

縄文後期前葉　第2・3・5号住居址

後背低地部で検出された土坑群(貯蔵穴)に時期的に伴うと考えられる住居址が、高位段丘面上で検出されることが推測されたが、本調査区内では確認されなかった。

第1号住居址(第54図)

位　　置：XV－B－3・4・8・9。緩斜面上にある。

検　　出：先行トレンチにより、Ⅲb層上面に敷石と土器を確認した。単独。

規模と形態：敷石と炉址の残存状況から、主体部は一辺1.6m～1.8mの正六角形と推測される。

遺物出土状況：床面から打製石斧・磨製石斧、炉址内から土器が重なって出土した。

覆土の堆積状況：不明確。

壁　　：検出されなかった。

床　　面：Ⅲb層上面において、本址の南東に敷石の一部、中央部に炉址を検出したが、他は確認されなかった。掘り方は認められなかった。

柱　　痕：認められなかった。

周　　溝：認められなかった。

炉　　：石囲い炉である。炉内は深鉢形土器片が5段に重なって埋設され、炉石にはりつけるように検出されたものあった。焼土と炭粒子が若干認められた。

出土遺物：土器、打製石斧、磨製石斧

時　　期：後期初頭

切　　合：なし。

備　　考：検出段階では集石と判断していたが、掘り下げにより炉址やそれを囲むように平石が確認されたことから、本址は敷石住居であると判断した。床面まで各時代の耕作や土の流出による影響がおよんでいたと推測される。

第２号住居址（第54図）

位　　置：ＸＶ－Ａ－３・Ａ－４。低位段丘上にあり、２号住居址に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。埋甕・ピット・焼土の存在から住居址と判断した。第21号土坑（中世）に切られる。東側をトレンチにより失った。

規模と形態：推定で平面4mほどの円形を呈していたと考えられる。

遺物出土状況：本址北側で土器が出土したが、全体量は少ない。

壁　　：不明であった。

床　　面：検出面が床面にあたると考えられるが、堅緻ではなかった。

柱　　痕：ピットは15基検出され、このうち円環状にめぐる７基が柱穴と判断される。中世第21号土坑により１基が失われ、８基構成されていたと考えられる。

周　　溝：検出されなかった。

炉　　：焼土が検出されたのみであった。

遺　　物：土器・打製石斧・石鏃。

時　　期：後期前葉。

備　　考：推定範囲の東側において、埋甕が半完形の正位で検出された。

第３号住居址（第54図）

位　　置：ＸＶ－Ｂ－５・10。緩斜面上にある。

検　　出：耕作土層を10～15cm剥いだところで土器の集中を検出し、トレンチによりⅢｂ層上面に敷石の一部を確認した。単独。

規模と形態：敷石と炉址の残存状況から、主体部は一辺およそ2mの正六角形と推測される。

遺物出土状況：炉址の西側に堀之内式期の浅鉢、本址の東側の一角に加曽利Ｅ式期の甕、グリッド杭ＸＶ－Ｃ－６の西側に磨製石斧、本址の東側に土製円盤が出土した。

覆土の堆積状況：耕作の影響をうけており不明確。

壁　　：検出されなかった。

床　　面：本址の南東部はⅢｂ層上面に敷石の残存状況がよく、炉址も確認されたが、他は確認されなかった。掘り方は認められなかった。

柱　　痕：不明確。

周　　溝：認められなかった。

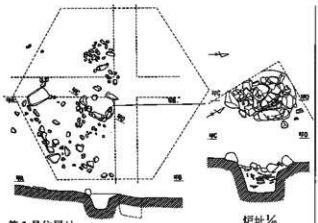
炉　　：本址の中央部にⅢｂ層上面を掘りこむ。径71～72cmを測る凹面状にくぼんだ焼土を半分確認した。炉址内からは炭化物と土器片が出土した。

出土遺物：土器・磨製石斧・土製円盤。

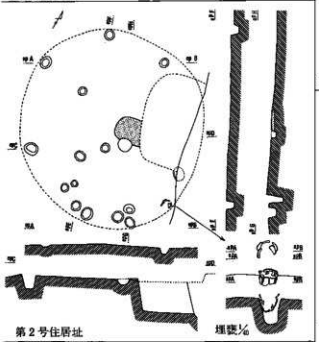
時　　期：後期前葉。

切　　合：なし。

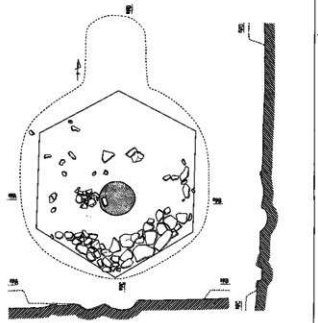
備　　考：敷石は摩滅したものが多く、南側の敷石の一部には加熱が認められた。敷石はほぼ平坦に敷かれていたが、南側の一部に落ちこんだ箇所が認められた。埋甕は認められなかった。床面まで各時代の耕作や土の流出による影響がおよんでいたものと推測される。本址の西南西にはⅢａ～Ⅲｂ層にわたり4m×5mの範囲で面的に遺物が集中して



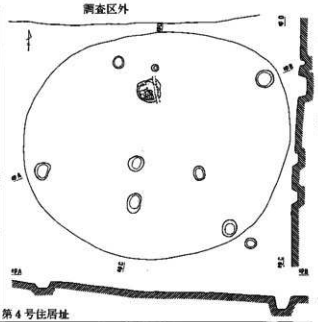
第1号住居址



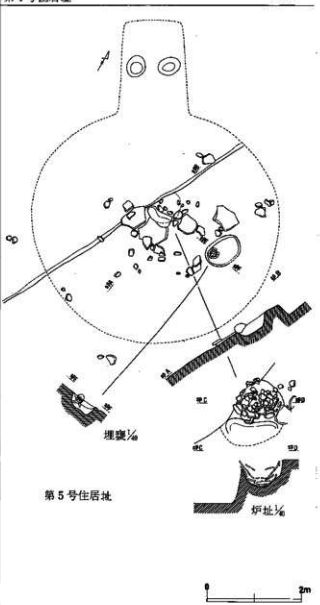
第2号住居址



第3号住居址



第4号住居址



第5号住居址

第54図　縄文時代の住居址

出土した。

第４号住居址(第54図)

位　　置：ＸＶ－Ｋ－６・11。高位段丘上にある。

検　　出：Ⅶ層上面。ピットや炉址の存在から住居址と判断した。単独。

規模と形態：推定で平面5mほどの円形と考えられる。

遺物出土状況：炉から出土した。ピットからの出土はない。

壁　　：不明であった。

床　　面：検出面が床面にあたると考えられるがとくに堅緻ではなかった。

柱　　痕：ピットは９基検出されているが、不規則である。

周　　溝：検出されなかった。

炉　　：壁に焼土が認められた。内部に深鉢形土器片が折り重なって検出された。

遺　　物：土器。

時　　期：中期後葉。

備　　考：高位段丘に単独で存在する。

第５号住居址(第54図)

位　　置：ＸＶ－Ｂ－７・８、緩斜面上にある。

検　　出：先行トレンチにより、Ⅲｂ層上面において敷石の一部と、炉址に集中した土器片のブロックを確認した。

規模と形態：敷石・炉址・埋甕の残存状況から、主体部は径4.8～5.2ｍをはかり、２つ並んだ柱穴から、はり出し部を備えた柄鏡形敷石住居址であると推測された。

遺物出土状況：床面から砥石・打製石斧、炉址内から土器が重なって出土した。

覆土の堆積状況：不明確。

壁　　：確認されなかった。

床　　面：Ⅲｂ層を掘りこむ炉址と、その周囲に敷石の一部が確認され、本址の東で敷石の下のⅢｂ層を掘りこむ堀之内式期の埋甕が逆位で検出された。その他は認めれなかった。

柱　　痕：調査段階では不明確であったが、本址の北西に柱穴が２つ並んでおり、図上復元の結果、はり出し部に伴う柱痕であると推測した。

周　　溝：認められなかった。

炉　　：内部に深鉢形土器片が折り重なって検出された。

出土遺物：土器・砥石・打製石斧。

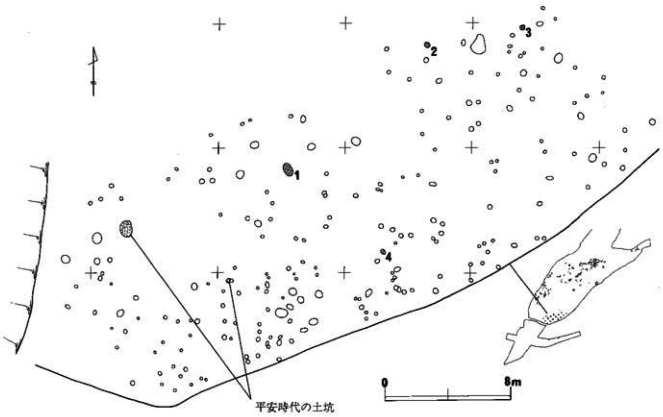
時　　期：後期前葉。

切　　合：なし

備　　考：敷石の下の柱穴や土坑を確認するためⅢｂ層を掘り下げたところで、埋甕が確認された。床面まで各時代の耕作や土の流出の影響があったと推測される。

(6)　土器埋設土坑(第55図～第56図)

小規模な掘り方をもつ土坑に土器が埋設されるか、そのように推測される遺構を一括した。５基検出されている。このうち第５号は段丘斜面下部のテラス上平坦面で検出されたが、検出面は平安時代の遺構と同様であった。さらにこの第５号は上半部が後世に削り取られた可能性があることから、屋内・屋外といった埋甕の位置づけは不明である。その他の４基はいずれも高位段丘面上北端部で検出されている。埋設



第55図　土器埋設土坑配置

密度の高い第1号を除いて出土した土器は少ない。時期的には第1号が後期前葉に属すと考えられ、そのほかも同様であろう。

第1号土器埋設土坑(第56図)

位　　置：XV－F－12。高位段丘上にあり。

検　　出：Ⅷ層上面。土器の散見する暗褐色土が落ちこむ。

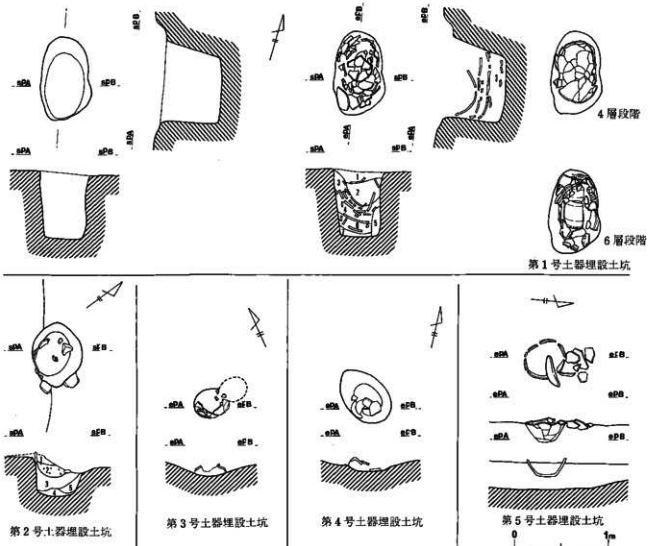
規模と形態：平面45cm×27cmの楕円形、深さ33cmのピット状を呈す。

遺物出土状況：少なくとも6段階の埋設が認められる。量の多寡はあるが、いずれも土器片を敷きつめたようであった。しかしながら、土器が直接折り重なるといった状況でなく、土器片間には間層がある。ちなみに3面では深鉢胴部片で囲うようにしてあり、その下面にあたる5面では土器片が敷きつめられたような状態で出土している。覆土内には炭と骨粉が観察され、下層の方が混入が多い。遺構内の南側、3および5・4層の境付近で焼土粒が観察された。

覆土の堆積状況：土器の間にはさまるように分層される。5層ははりつけたようにあり、5・7層だけに炭と骨粉が観察されなかった。

時　　期：後期前葉。

備　　考：第1・第5号住居址炉内土器の埋設も数段階あったことが確認されている。このため本址も住居址内の埋甕炉とも考えたが、周辺に柱穴と判断できる組み合うピットが確認できなかった。



第56図　縄文時代の土器埋設土坑

第2号土器埋設土坑（第56図）

位　　置：ⅩⅤ－Ｆ－８。高位段丘上末端にある。第３号に近接する

検　　出：Ⅶ層上面。検出面で土器片が散見された。上部は耕作による攪乱をうけていた。

規模と形態：平面33cm×25cmの楕円形。深さ18cmのピット状を呈す。

遺物出土状況：南西壁にはりついたように深鉢胴部片が出土した。覆土中には焼土粒・炭・骨粉が観察された。

覆土の堆積状況：１層は後世の流れこみと考えられる。

時　　期：不明。

備　　考：焼土の存在から、住居址の炉として調査を進めたが、それを裏付ける状況が周囲で認められなかった。

第3号土器埋設土坑（第56図）

位　　置：ⅩⅤ－Ｆ－４。高位段丘上末端にある。第４号に近接する。

検　　出：Ⅶ層上面。検出面で土器が散見されたのみ。

遺物出土状況：深鉢口縁部が検出されたのみ。

時　　期：土器が摩滅していて不明。

備　　考：深鉢口縁部はその形態からか口縁が地面に接していた。逆位の埋甕の残存であろう。

第4号土器埋設土坑(第56図)

位　　置：XV－F－13。高位段丘上にある。

検　　出：Ⅷ層上面。検出面で土器が散見された。

規模と形態：浅い窪み状を呈す。

遺物出土状況：深鉢底部片が出土した。

時　　期：土器が摩滅していて不明。

備　　考：なし。

第5号土器埋設土坑(第56図)

位　　置：XV－A－13。低位段丘上にあり、第8号溝に近接する。

検　　出：Ⅷ層上面。検出面で土器と礫が露呈していた。単独。

出土遺物：底部が正位で埋設されていた。

時　　期：底部のみで時期は不明。

備　　考：掘り方は確認できなかった。

3　遺　物

(1)　土　器

第Ⅰ群土器(第86図1～9)

出土量はわずかであるが、中期中葉に属する土器群がある。4～8は摩滅が著しく、明瞭に観察できないが、胎土はやや白みを帯びている。

第Ⅱ群土器(第81図1～11・13、第86図9～54)

中期後葉に位置づけられる加曽利E式土器様式に比定されるもののうち、沈線で文様が施文される一群を本群とした。さらに、文様から細分することができる。

A類(第81図8～11、第86図9～20・22～24)

互いに向き合うU字状のモチーフで施文される一群である。8～10にみられるように大きな波状口縁で、胴部がくびれる器形と、13のようにやや内湾する平縁の二者がある。8は波状口縁の頂部に橋状の把手をもつ特異な器形である。

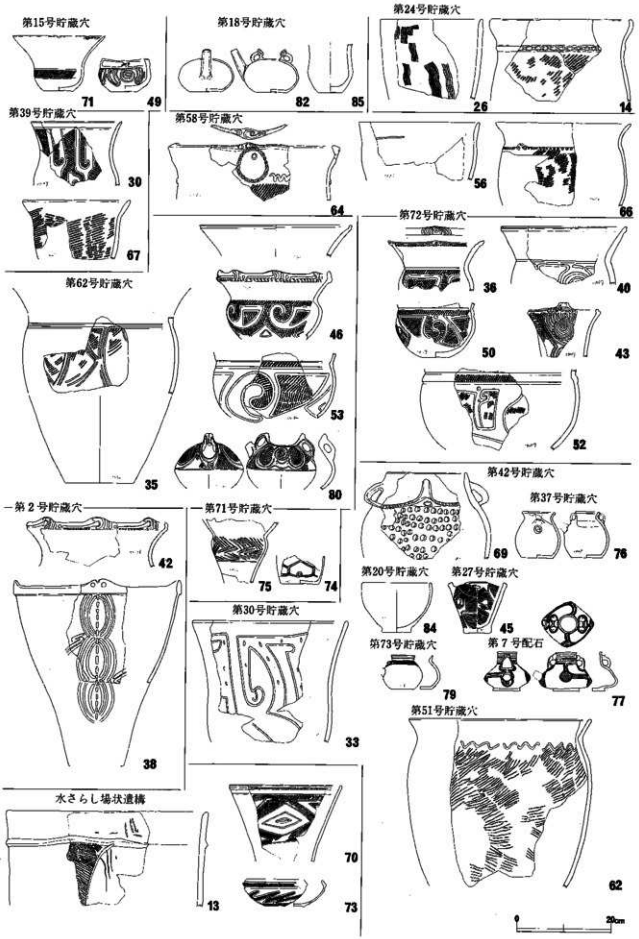
文様には大きく渦状のモチーフに変化している19や、帯状の縄文帯で渦状のモチーフが施文される例もある。さらに、16のようにU字の間隔のせまいものもある。また、14では二本の平行する沈線でモチーフが描かれている。若干不安はあるが、本類に含めておく。

B類(第86図21・23・26～46)

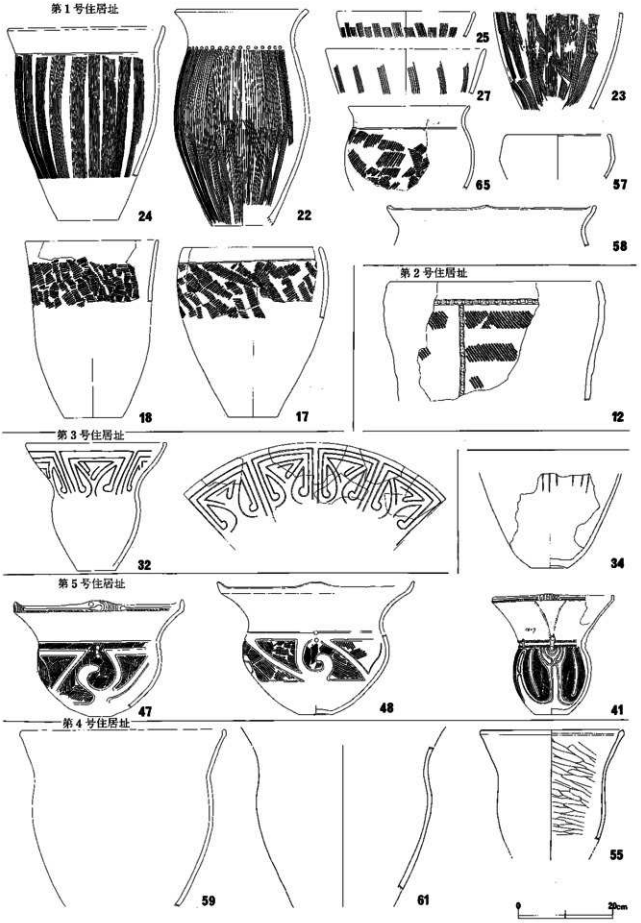
口縁部にわずかな無文部を設けて、頸部に沈線が一条めぐり、そこからさらに沈線が垂下する一群である。26のように器形はやや内湾する平縁で、頸部がわずかにくびれる深鉢形土器である。沈線と沈線の間に斜縄文が施文されるものが多いが、縦方向の縄文例(37)や、条線(38)もある。38は他と比較すれば、器厚がやや薄く、焼きも堅い。

C類(第81図17、第82図21、第87図47～54)

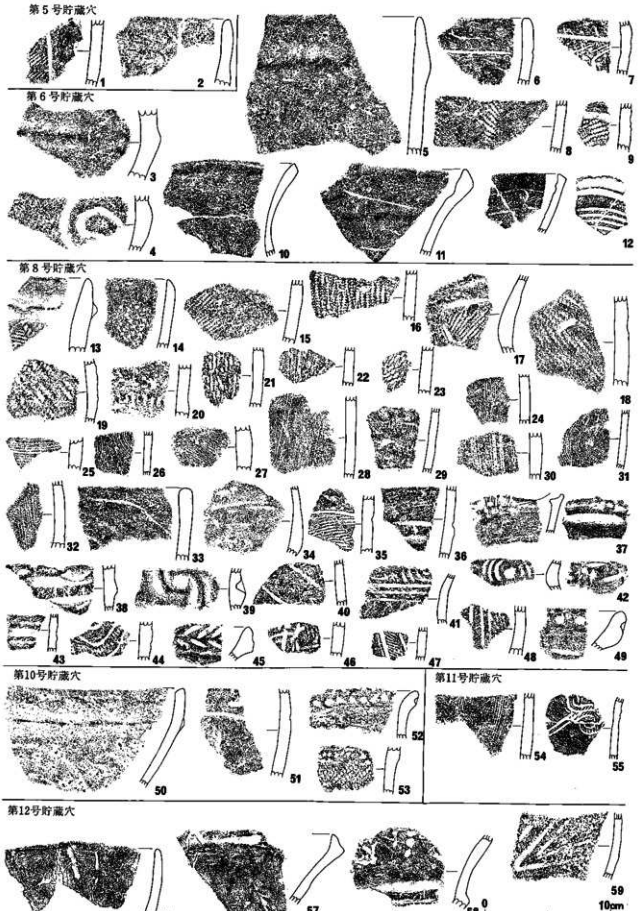
口縁部に無文帯を残し頸部に凹線あるいは沈線がめぐり、以下は縄文か、無文となる平縁の深鉢形土器である。17のように、器形は頸部がくびれず、やや胴部が膨らみをもつと思われる。凹線のめぐる21や47・48、沈線のめぐる49～54や17、無文の55・56に細分できよう。



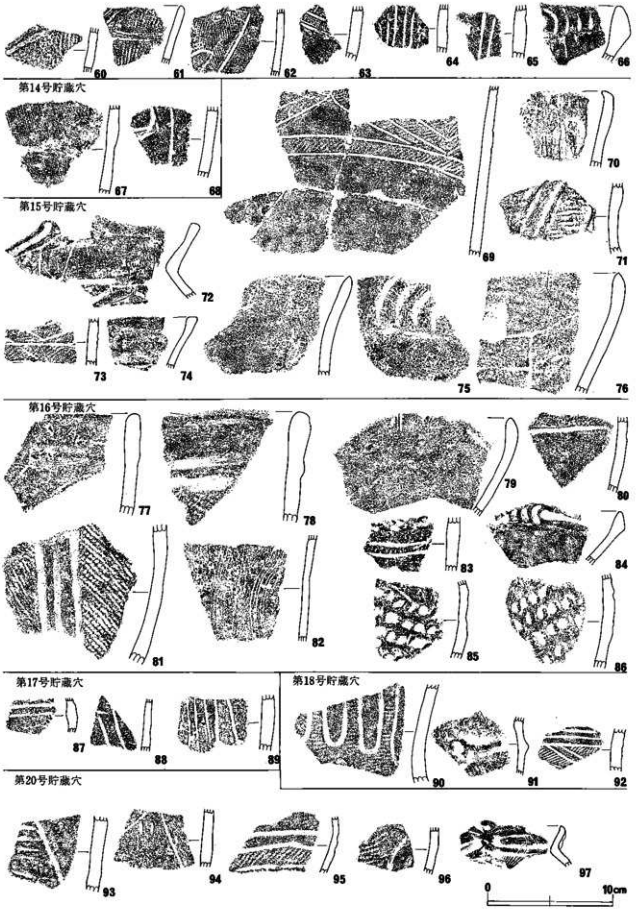
第57図　縄文時代遺構出土の土器　(1)



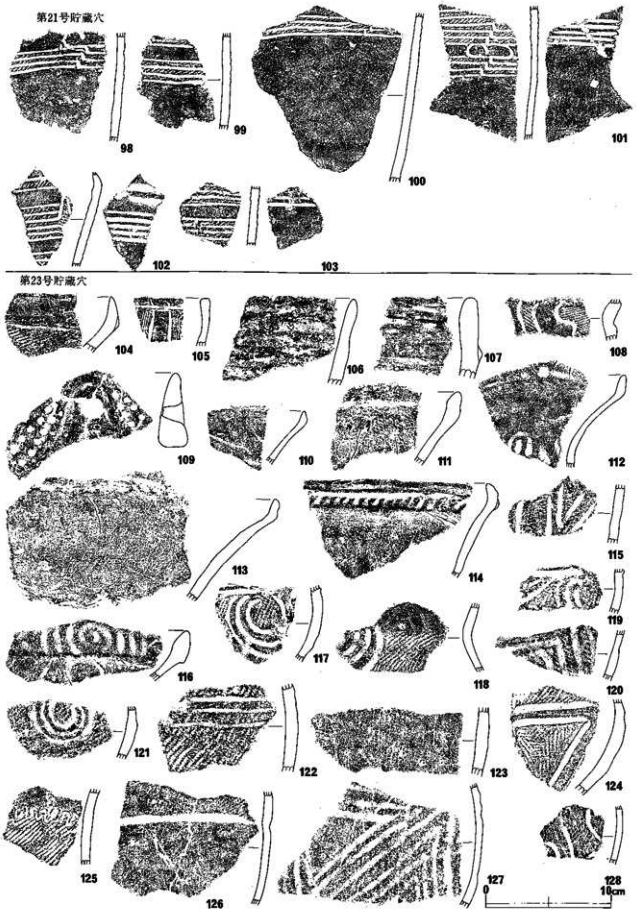
第58図　縄文時代遺構出土の土器　(2)



第59図　縄文時代遺構出土の土器 (3)

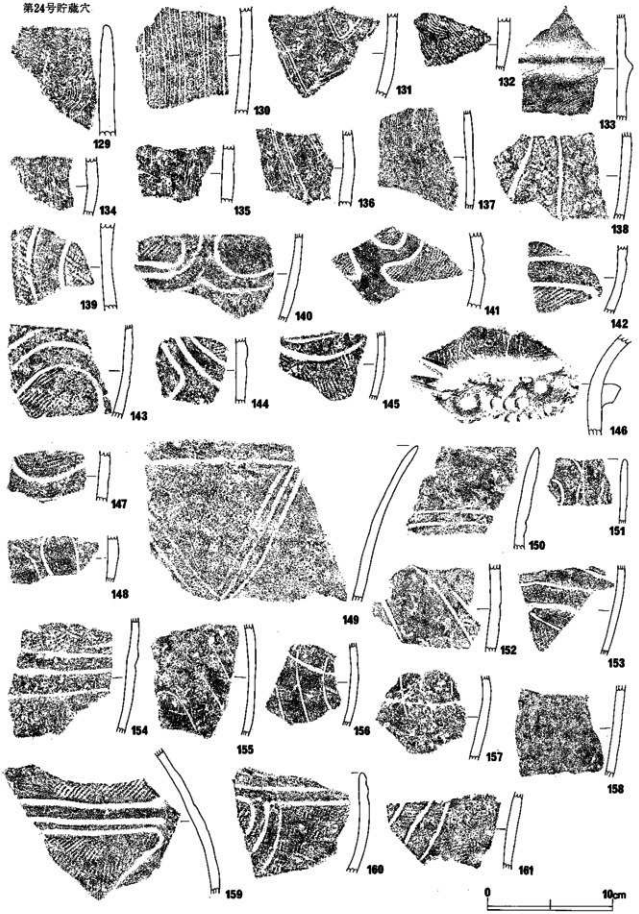


第60図　縄文時代遺構出土の土器　(4)

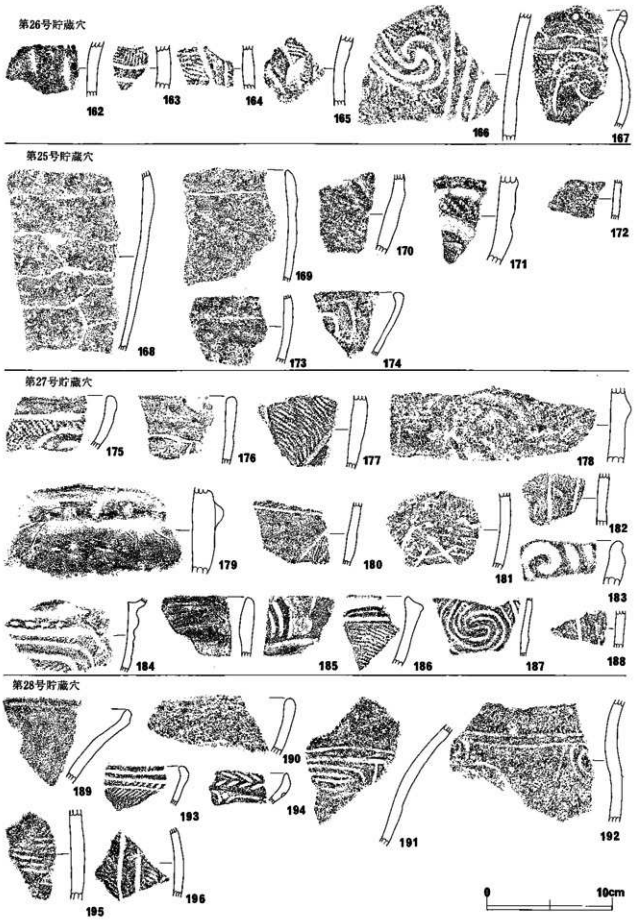


第61図　縄文時代遺構出土の土器　(5)

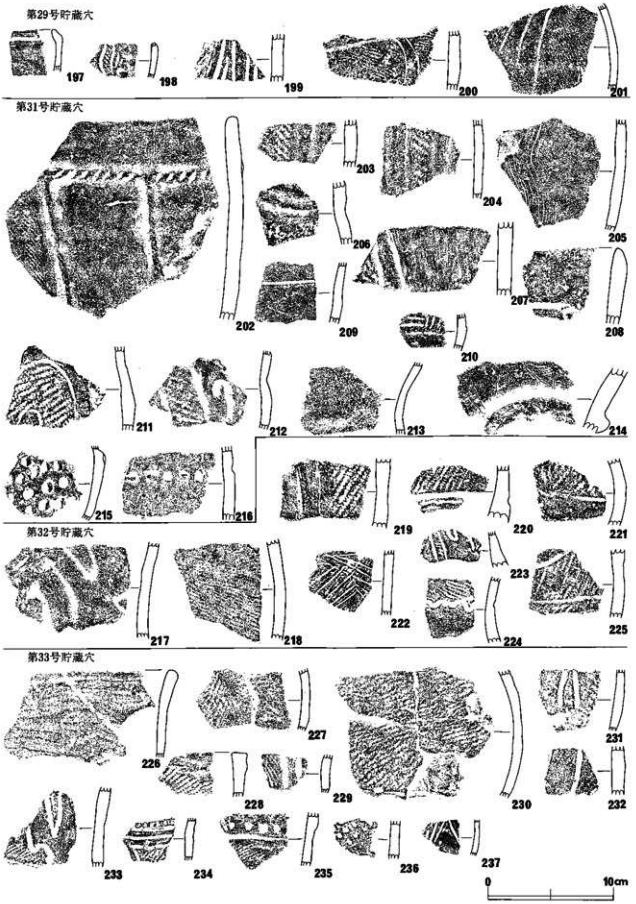
第24号貯蔵穴



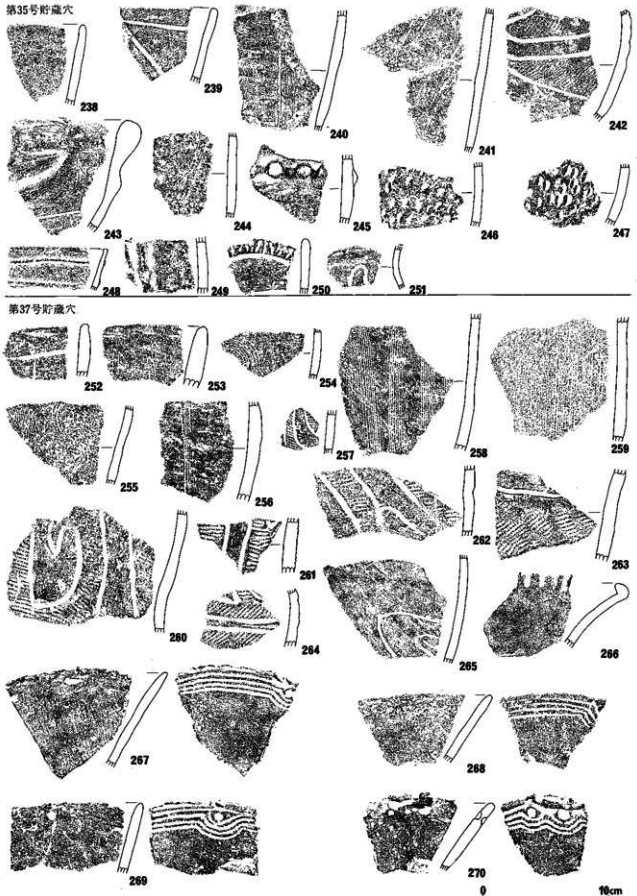
第62図　縄文時代遺構出土の土器　(6)



第63図　縄文時代遺構出土の土器　(7)

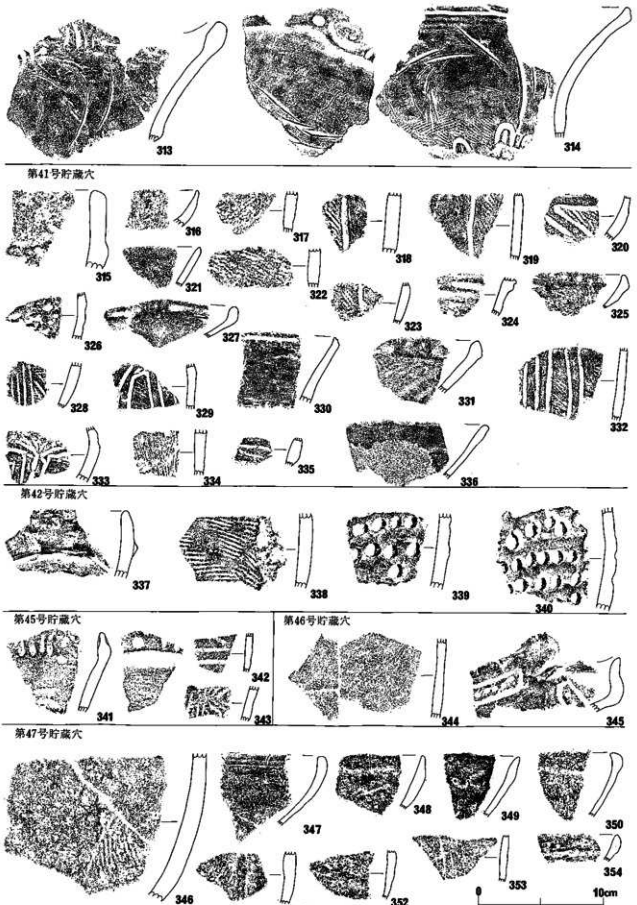


第64図　縄文時代遺構出土の土器　(8)

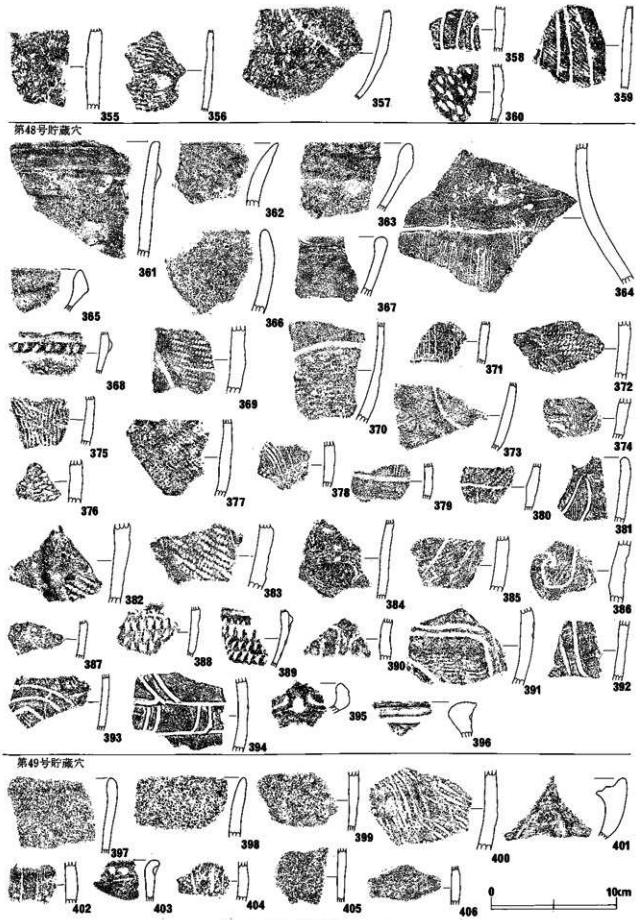


第65図　縄文時代遺構出土の土器　(9)

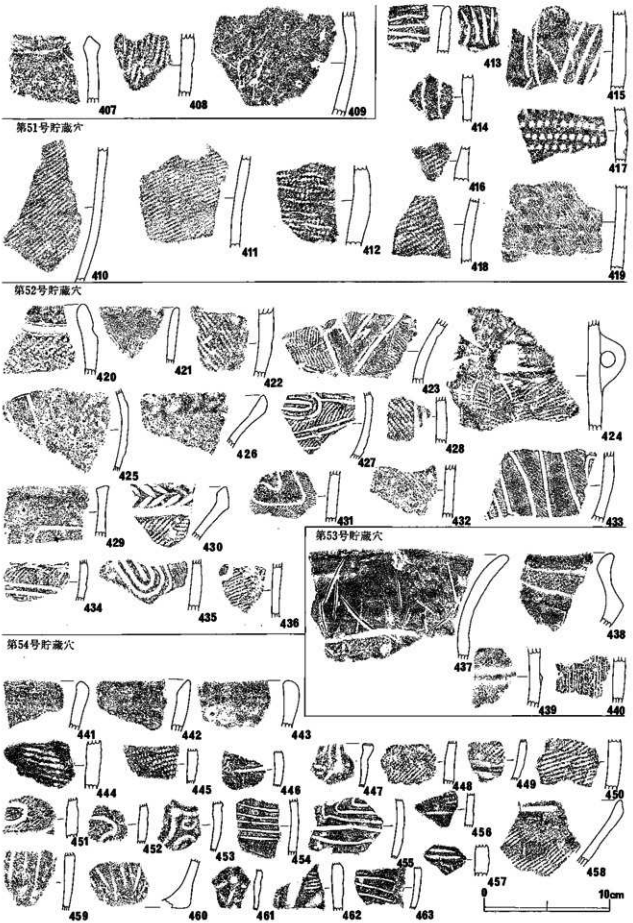
第66図　縄文時代遺構出土の土器　(1)



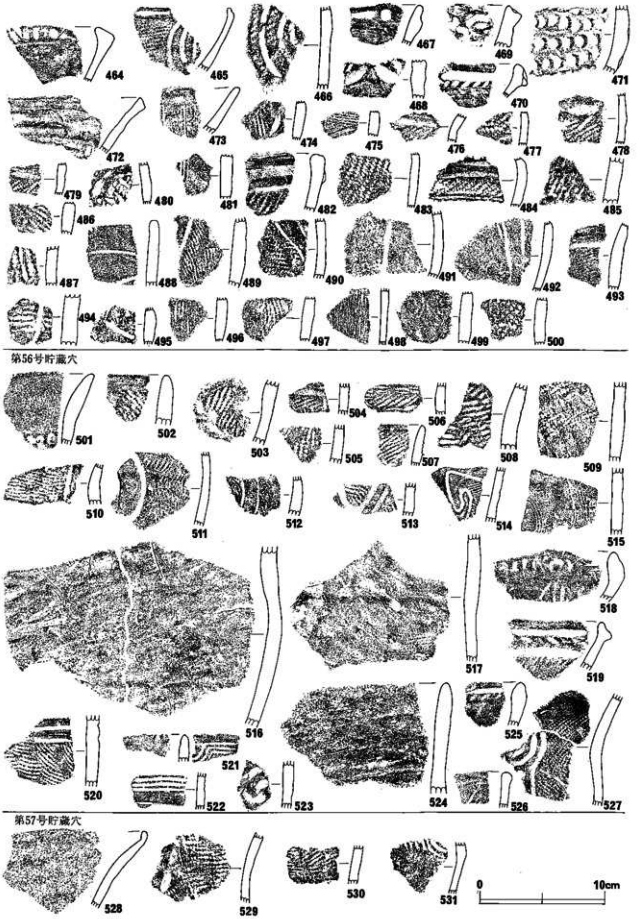
第67図　縄文時代遺構出土の土器 (II)



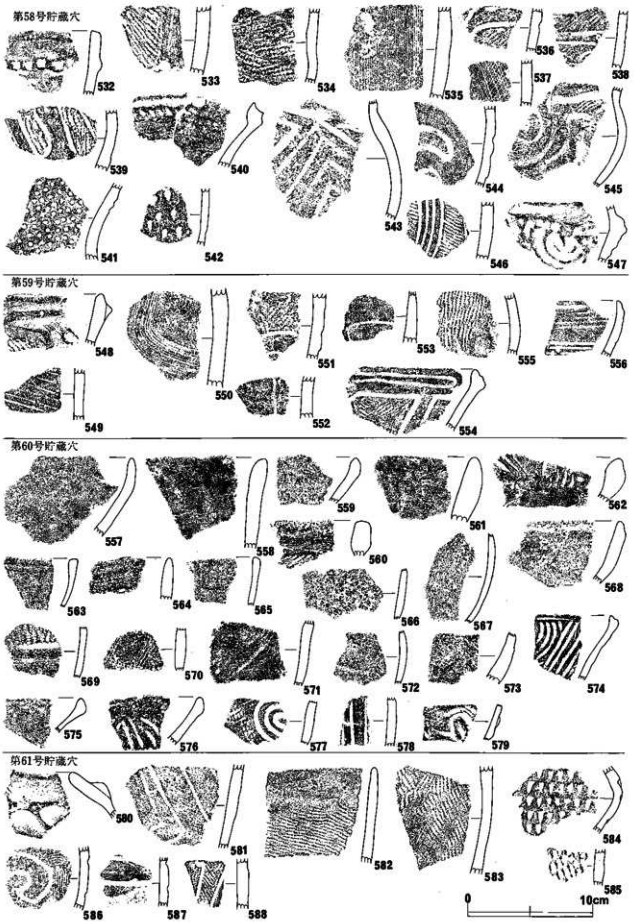
第68図　縄文時代遺構出土の土器 (12)



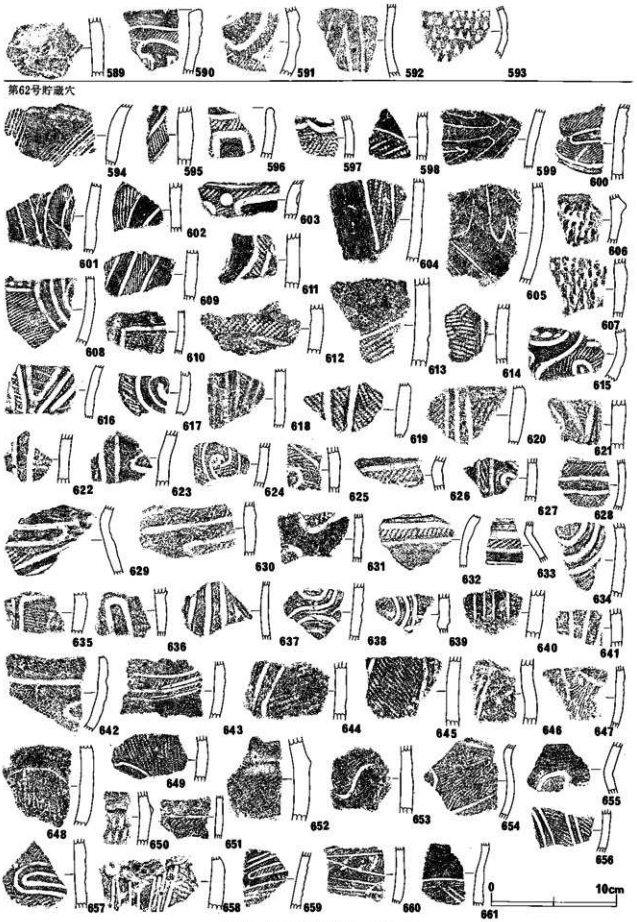
第69図　縄文時代遺構出土の土器 (3)



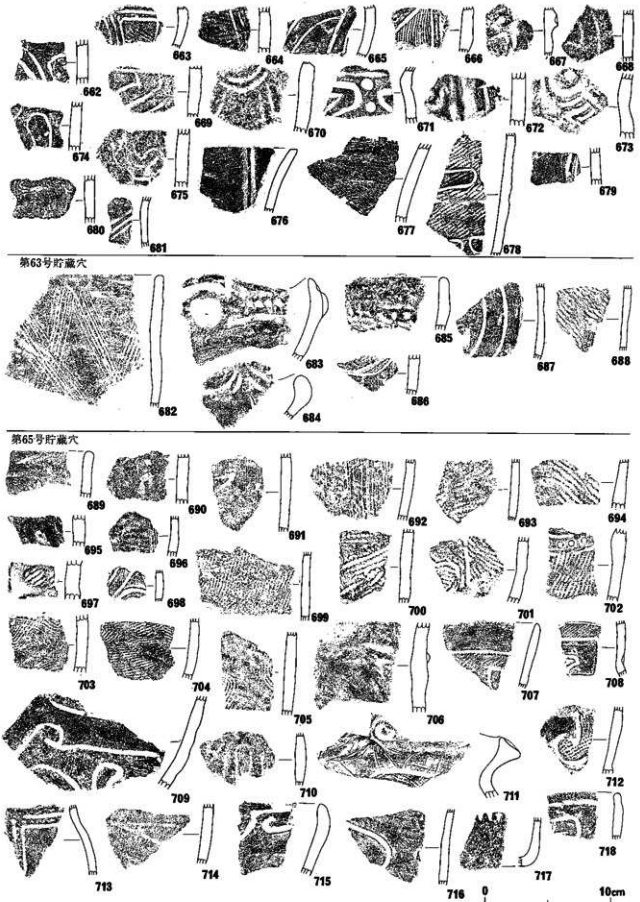
第70図　縄文時代遺構出土の土器　(4)



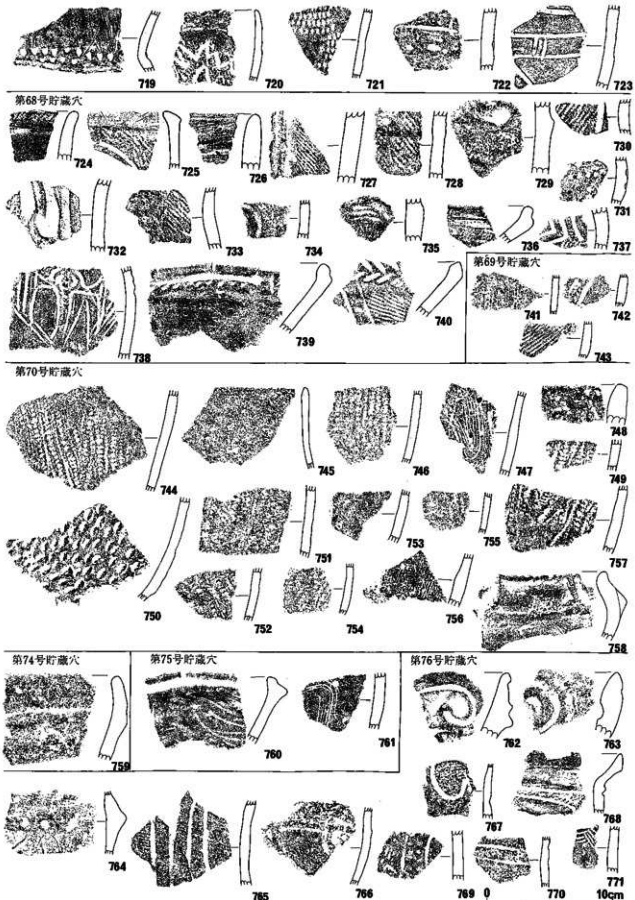
第71図　縄文時代遺構出土の土器　(5)



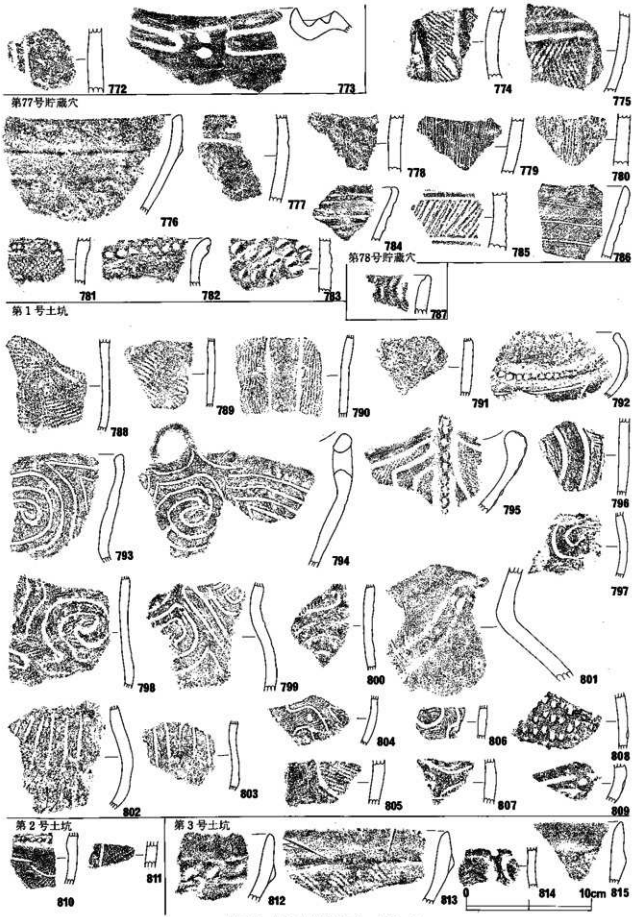
第72図　縄文時代遺構出土の土器　00



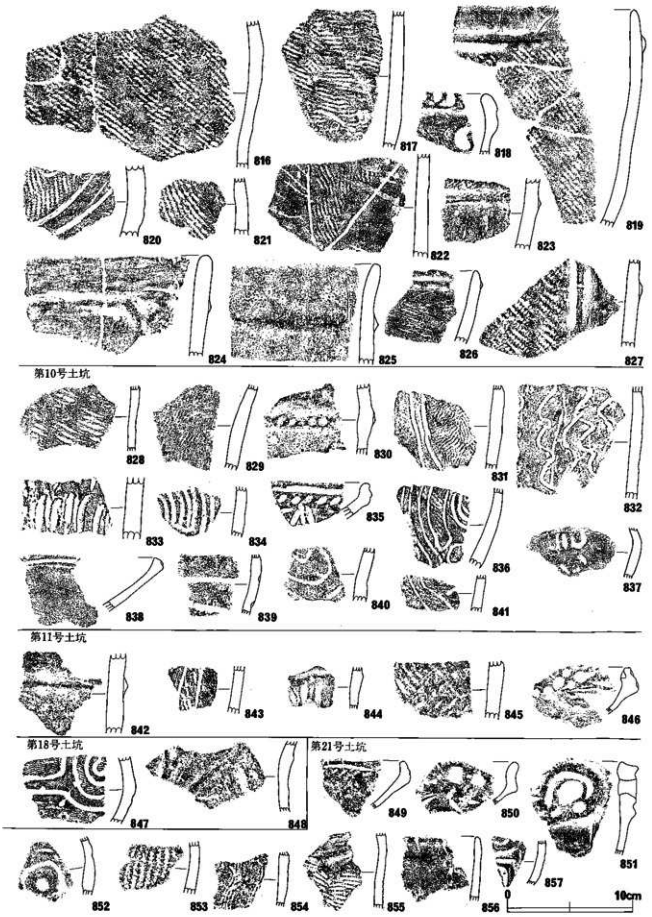
第73図　縄文時代遺構出土の土器　(17)



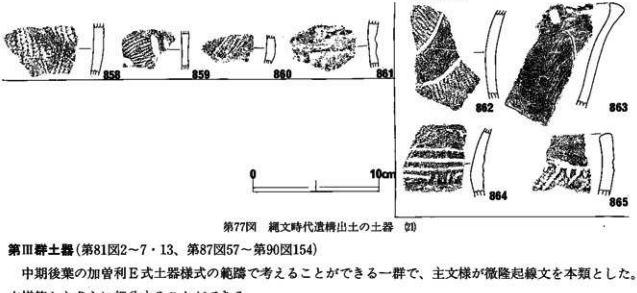
第74図　縄文時代遺構出土の土器 (18)



第75図　縄文時代遺構出土の土器 (19)



第76図　縄文時代遺構出土の土器 (20)



第77図　縄文時代遺構出土の土器　(1)

第Ⅲ群土器(第81図2～7・13、第87図57～第90図154)

中期後葉の加曽利E式土器様式の範疇で考えることができる一群で、主文様が微隆起線文を本類とした。文様等からさらに細分することができる。

A類(第81図2～7、第87図57～61、第88図64・65・68・69)

口縁部に無文帯を残し、その下位に微隆線で渦状のモチーフを施文する3などである。口縁部が「く」の字状に内湾する2・3や64と、緩く内湾する58・59の二者がある。前者は4のように胴部がくびれる深鉢形土器である。後者の器形は不明である。

文様の全体構成は明確でない。4のように胴下半部にまで文様が施文されると考えられる。頸部のモチーフをみると3のようにはっきりと渦状になるものと、渦が崩れて二つの区画になった2、それがさらに崩れたと考えられる6があり、これらをどのように理解するか、今後の課題となろう。また、5・7などは渦巻のモチーフとは別系統のように思えるが、数が少なく、今回は本類に含めておく。

B類(第81図13、第88図66～68・72～88)

U字状のモチーフが主となる類である。66はやや異なるが、一例のみなのでここに便宜的に含めておいた。

器形はほぼ垂直に立ち上がる平縁の深鉢形(13)と、やや内湾する口縁部をもつ深鉢形(72)の二者がある。

C類(第88図89～94、第89図95～110)

口縁に無文帯を残し、頸部に隆帯がめぐり、そこからさらに隆帯が垂下し、胴部を縦に区画する一群である。胴部の区画には交互に縄文が施文される。

全形をしり得る資料はなく断言できないが、95・96のように口縁がやや内傾しながら立ち上がり、胴部がやや膨らむ平縁の深鉢形と、101のように胴部がくびれる例もあると思われる。

95の頸部をめぐる隆帯には刻目があり、また、101では垂下する隆帯間に縄文を地文として蛇行する沈線が施文される。

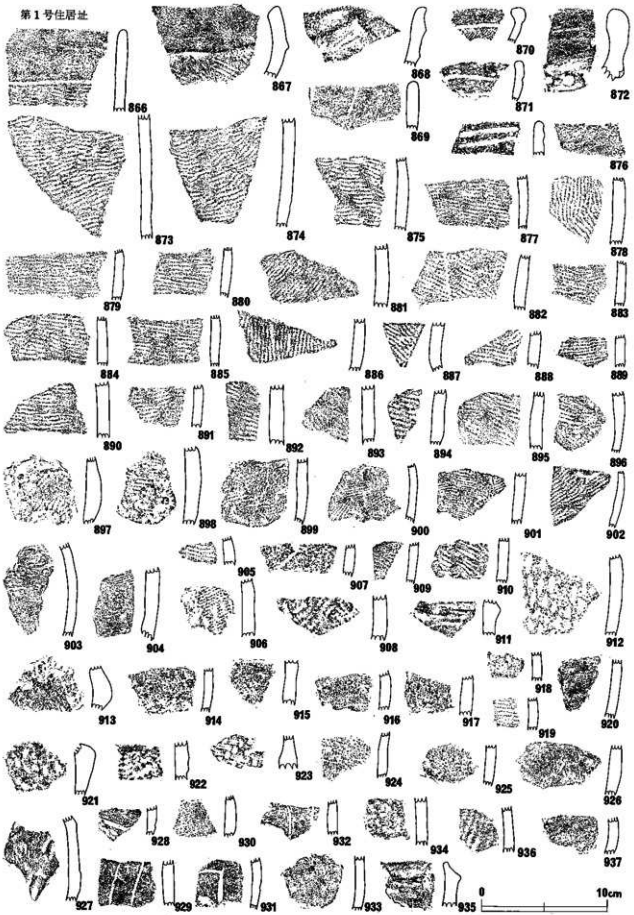
D類(第89図111～116、第90図117～154)

口縁部に無文帯を残し、頸部に隆帯が一条めぐる一群。頸部以下が縄文か、無文に二分される。

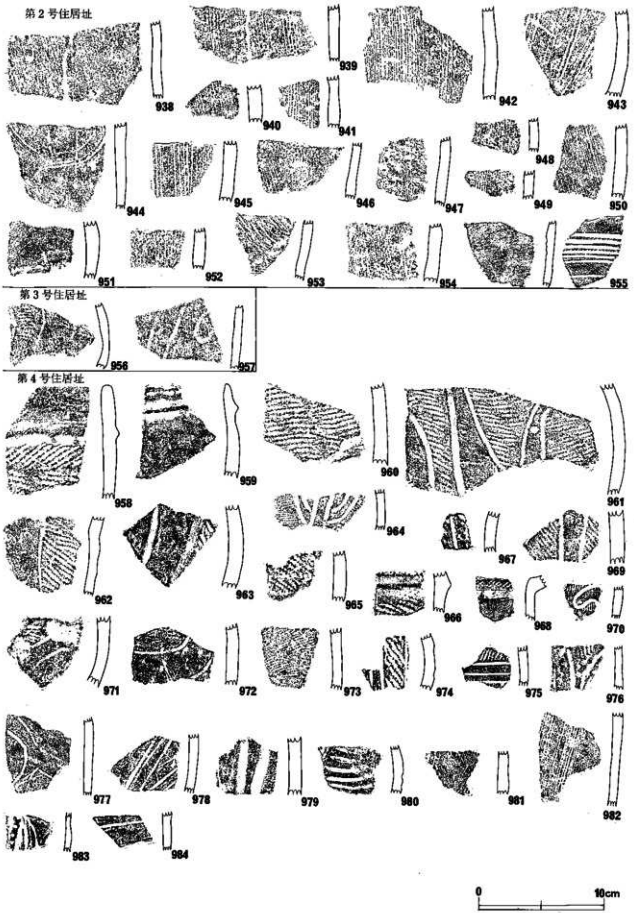
口縁部の形態にはやや内湾する117や、111のように垂直に立ち上がるものがある。124～127は口縁部と胴部の間に稜をつくるように直線的に内傾し、わずかに生じた稜線に粘土を付加している。また、口縁部の無文帯の幅が狭い135・136は別類と考えるべきであろうか。

第Ⅳ群土器(第81図12・14～16、第91図155～176)

文様が刻目隆帯によるものを一括した。全形をしり得る資料がなく、刻目隆線がないと胴部破片はⅠ群

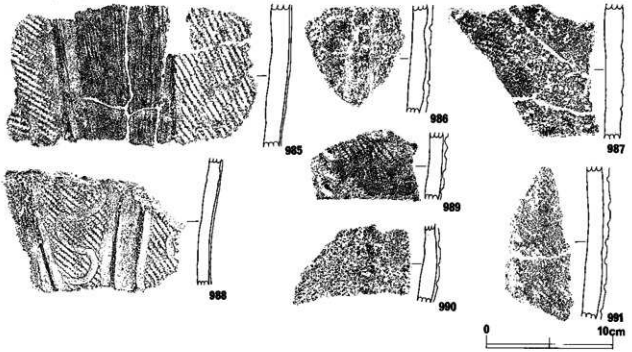


第78図　縄文時代遺構出土の土器 (22)



第79図　縄文時代遺構出土の土器　(23)

第5号住居址



第80図　縄文時代遺構出土の縄文土器　(2)

とII群と区別ができない。そのために、抽出した胴部破片は極めて少ない。

器形と隆帯のつけられた刻目のあり方から、さらに細分しておきたい。

A類(第91図155・156)

細身の隆帯上に細かい刻み目が施文される。156は加曽利E様式の範疇で考えられる。

B類(第81図12、第91図172・174)

胴部がややくびれる平縁の深鉢形で、口縁部に無文帯を残し、頸部に刻目隆帯が一条めぐり、そこから底部に向けて縄文を地文として、刻目隆帯が垂下する。

本類の刻目隆帯は他の類と比較するとやや細く、刻目も角張っている。

C類(第81図15、第91図157～167)

口縁部に無文帯を残し、頸部に刻目のある隆帯が一条めぐり、やや内湾する平縁の深鉢である。全形を知り得る資料がなく、全体のモチーフは不明である。頸部以下に縄文のみが多いと思われるが、159や163のように、胴部にやや太めで浅い沈線によって、逆U字状モチーフの上端かと思われる曲線が施文されるものもある。本類の隆帯はやや太めで、指頭で押さえたような丸みを帯びた刻目がある。

D類(第81図14)

口縁部が内湾し、頸部でくびれ、胴部がやや膨らむ深鉢である。B・C類と比べると、口縁部の無文帯が広い。

第V群土器(第82図22～24)

頸部に沈線と連続する円形の刺突文を施文することで、口縁部と胴部の文様を区画し、胴部に縦方向の条線が描かれる一群である。23は頸部に沈線がめぐり、口縁部が外反し、頸部が強くくびれる深鉢、24は頸部に連続する円形の刺突文がめぐり、口縁部がやや内湾し、頸部がくびれる同じような深鉢である。

第VI群土器(第82図28・29、第108図887)

中期後葉に属すひょうたん形注口土器である。

第Ⅶ群土器(第81図18・19、第91図177～第93図272)

胴部全体に縄文や条線が施文される一群で、縄文と条線の二者に細分できる。

A類(第81図18～20、第91図177～180)

縄文のみを本類とする。器形的には頸部がややくびれる(18)か、口縁が内湾する深鉢形(19)と口縁が内湾し波状の把手をつけるもの(20)等がある。胴部破片のみでは、Ⅰ群やⅡ群と区別できない。

B類(第82図25～27、第91図180～第93図272)

条線文のある類を本類とする。全形をしり得る資料はないが、26などを見ると口縁が直立し、胴部にわずかに膨らみがあるものの、そのまま底部にいたる深鉢形である。胴部破片のみでは第Ⅴ群土器と区別できない。

総じて、縦方向の条線文は乱雑かあるいは蛇行する。条線文が格子目状をなす184や、大きく蛇行する185などもある。

第Ⅷ群土器(第84図55～61、第93図273～306)

無文土器を一括した。口縁端部内側にわずかな屈曲をもち、口縁部が外反し、頸部がくびれる深鉢形(55～61)と、口縁端部内側の屈曲が認められず直立する(282～285)二者がある。前者は堀之内式土器様式、後者は加曽利E式土器様式の深鉢形と近似する。別群に分類すべきものかもしれないが、破片では両者を区別しにくく、本群で扱った。

第Ⅸ群土器(第82図30～第83図34、第94図307～第98図495)

称名寺式土器様式と考えられる土器群を一括した。破片資料が多く、全体の文様のモチーフをしることが難しいため、それを構成する要素で細分する。

A類(第82図30・31、第94図307～第96図436)

縄文帯で文様を構成する類である。これには主に関東地方を中心に分布する基本タイプ、中津式土器様式の系譜を引くと思われるタイプ、刻目隆線が垂下する例などが含まれているが、破片が小さく判然としないため、一括している。

M字状文を反転させている30・31は、口縁部下位に沈線がめぐるが、称名寺式土器様式ではあまりみられない例である。426・428は刻目のある隆線が垂下する類、429～436は中津式土器様式の系譜を引くものと考えられる。

B類(第82図33、第96図437～第97図448)

沈線と列点が文様モチーフとなる。33はM字状文のタイプであり、比較的整っている。

C類(第82図32、第97図449～490)

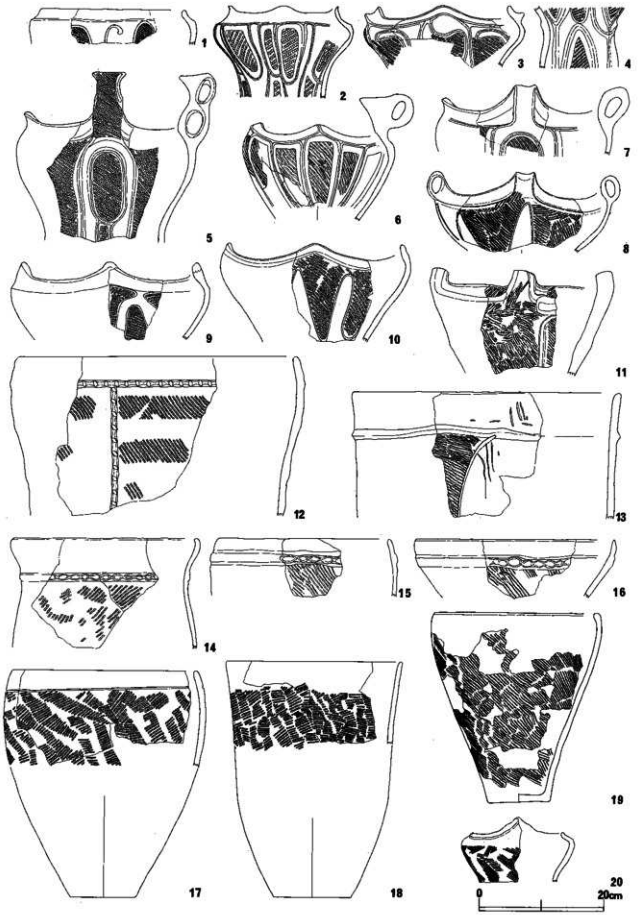
文様のモチーフが沈線によるものを一括している。32は平縁で胴部のくびれる深鉢で、J字状のモチーフが向かい合っており、帯状に区画する手法が崩れている。449・450・454は同一個体と思われるが、環状の把手をもち、胴部のくびれた深鉢と考えられる。やはり、帯状区画のモチーフが崩れ、あたかも3本の沈線で文様を施文しているようである。全体的にモチーフが崩れているのが目立つ。

D類(第98図491～494)

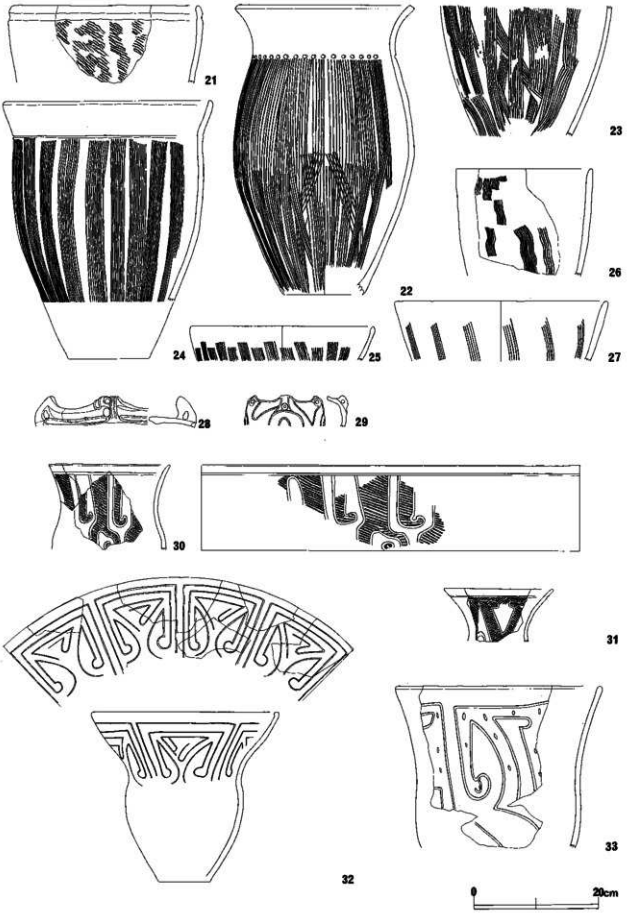
特異な例である。491は3本の沈線で三角形の文様を画く類であり、類例はわずかであるが、称名寺式土器様式にある。おそらく、文様の系譜が異なるのであろう。492・493は隆帯があるもの、494は浅鉢で中津式土器様式の系譜を引くものであろうか。

第Ⅹ群土器(第83図35～53、第85図70、第98図496～第104図740)

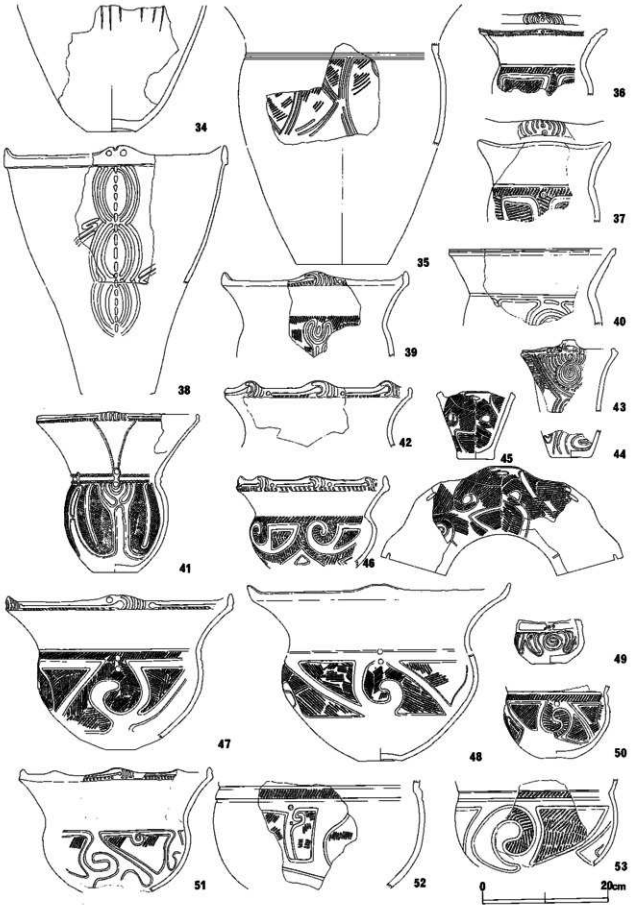
堀之内式および縁帯文系土器様式を一括した。当然のことながらこの二者と、その他に分類することができる。しかしながら、胴部破片の文様等ではそれらを明確に細分することはできなかった。したがって、



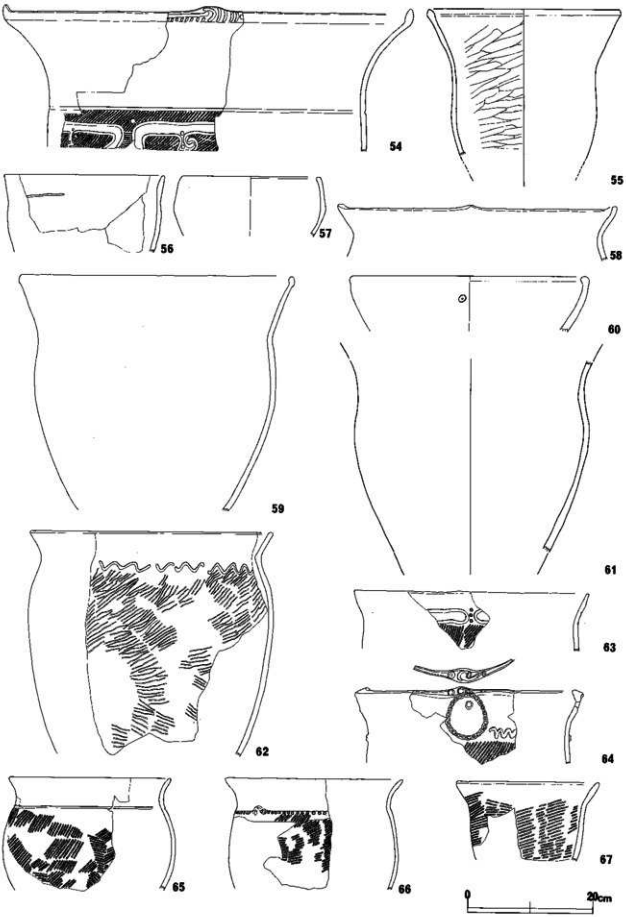
第81図　縄文土器 (1)



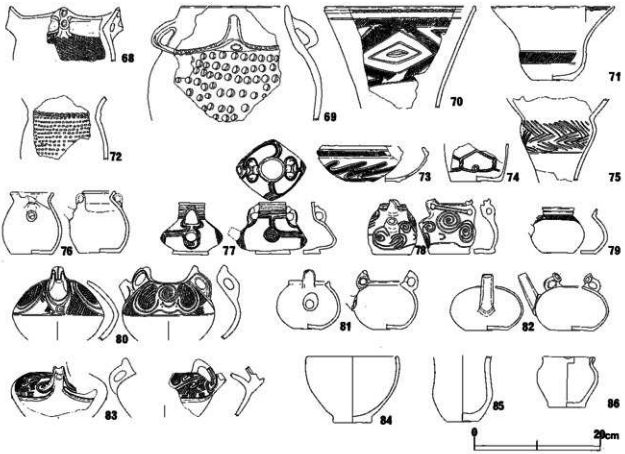
第82図　縄文土器 (2)



第83図　縄文土器 (3)



第84図　縄文土器 (4)



第85図　縄文土器 (5)

口縁部の形態を中心に分類した。

器形には38のように、波状口縁を呈し、胴部まで直線的な深鉢形、41のように口縁部が外反し、頸部がくびれ胴部が丸みを帯びる器形、47・48のように口縁部が外反し、胴部が球形に近い形状になる数種がある。口縁部の形態からは次のように分類される。

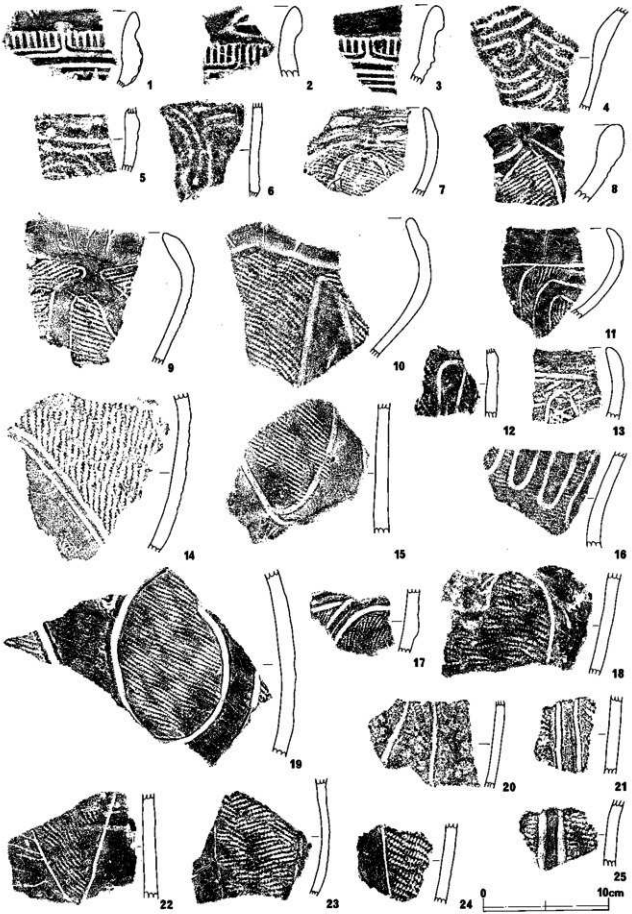
A類(第83図34・35・38・39～48・51　第98図496～第100図573)

堀之内式土器様式の範疇で考えることのできる口縁部である。原則として口縁部がわずかに屈曲し、一条の沈線が巡り、沈線と屈曲部の間に刻目が刻まれる。また、屈曲させたままで口縁部が無文のもの(545・548等)、屈曲させないもの(第99図546・549・537等)がある。屈曲する端部の幅は狭い。また、口縁部を屈曲させない546・549は堀之内式土器様式内でも古い段階と考えられ、称名寺式土器様式の系譜で考えることができよう。501は屈曲しないが、B類と考えるべきかもしれない。

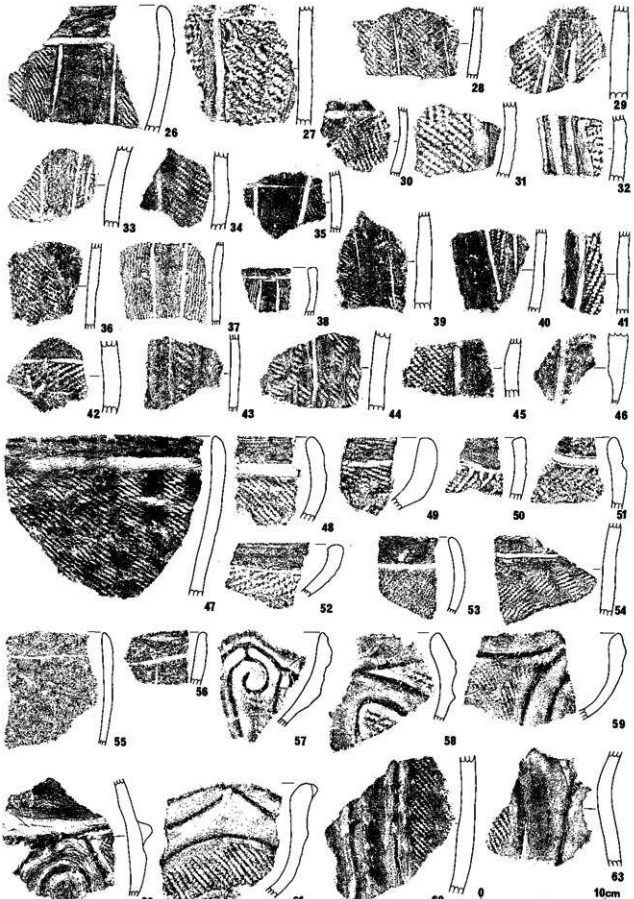
B類(第83図36・37　第100図574～601)

縁帯文系土器様式の範疇で考られる土器を一括した。口縁部が内側に屈曲しないもの(B-1類)と、幅広く屈曲するもの(B-2類)、わずかに屈曲するもの(B-3類)がある。

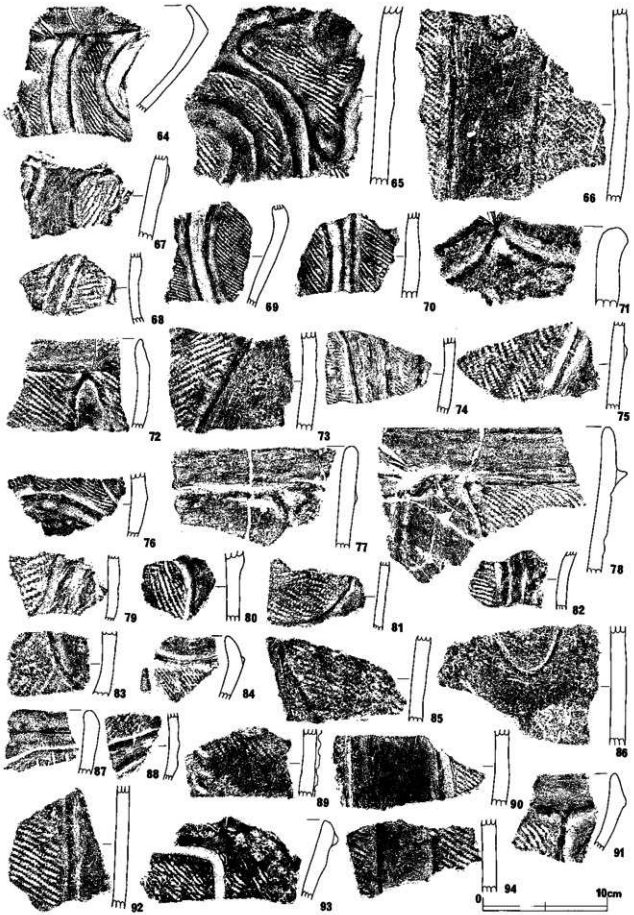
B－1・B－3類：口縁部がわずかに屈曲するB-3類(574)、屈曲しないB-1類(36・37 577～579)は口縁部内側に幅広く(()状のモチーフが沈線で施文される。また、36・38はよく似ている例であるが、これをみると、頸部のくびれ部に沈線を一条めぐらし、その下位に二本の沈線で枠状にかこみ縄文を充填している。36・37をみると、口縁部は緩やかな波状口縁を呈して外反し、頸部でくびれ、やや型をもった胴部の深鉢形になる。



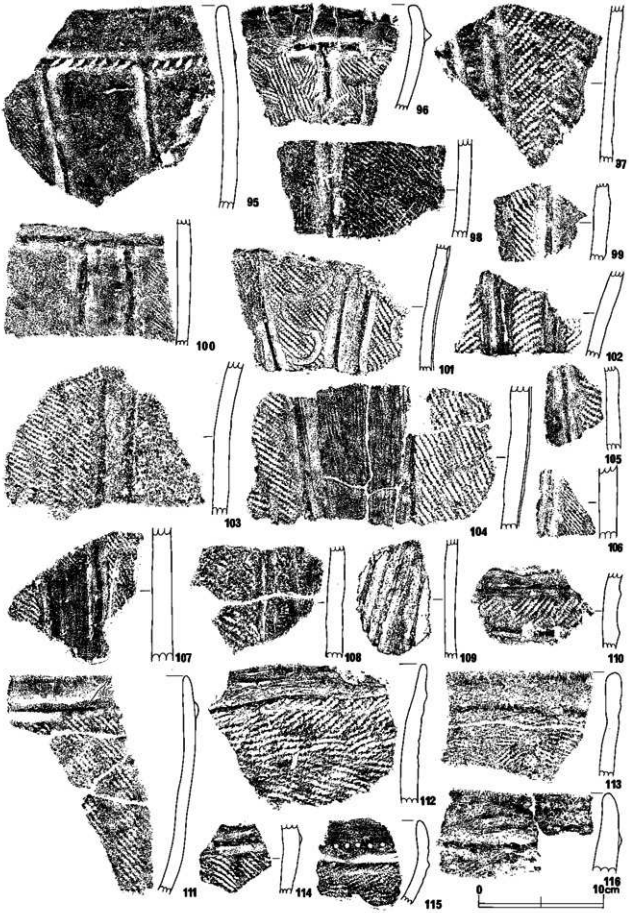
第86図　縄文土器拓影 (1)



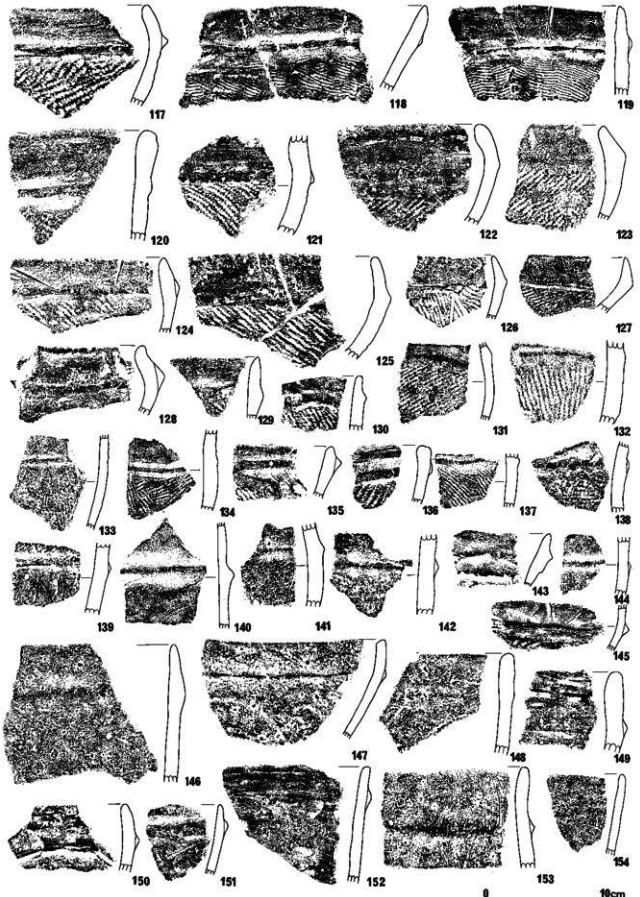
第87図　縄文土器拓影 (2)



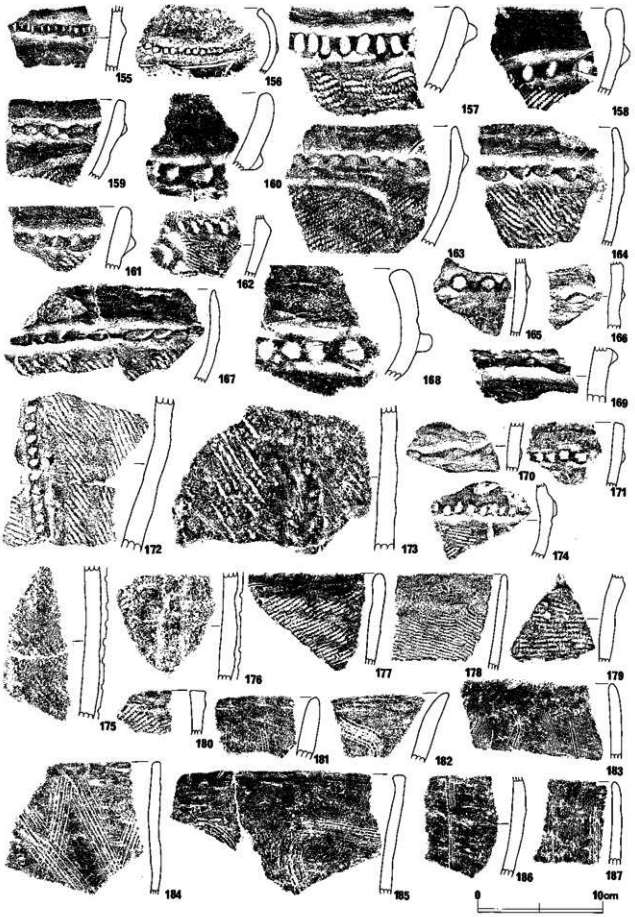
第88図　縄文土器拓影　(3)



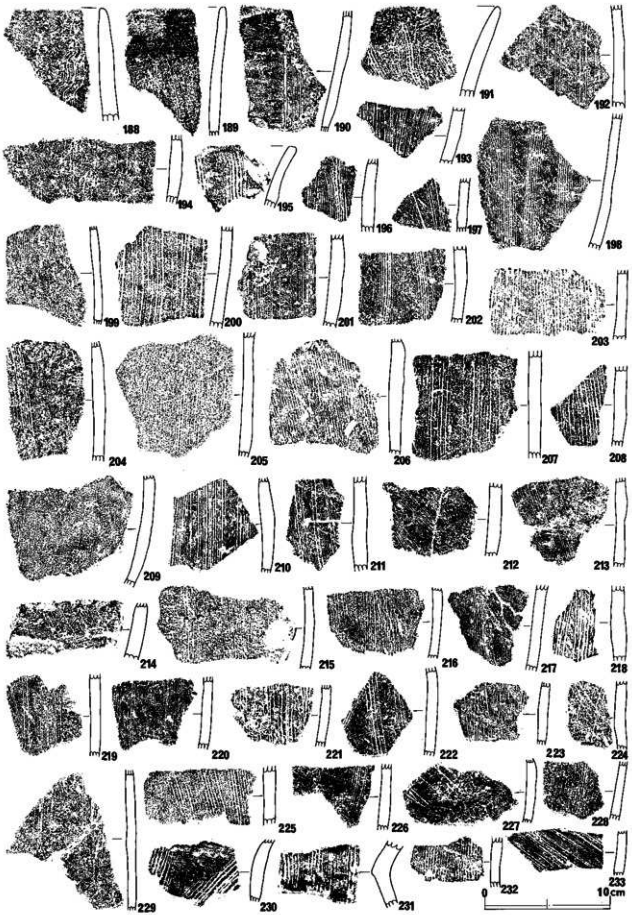
第89図　縄文土器拓影 (4)



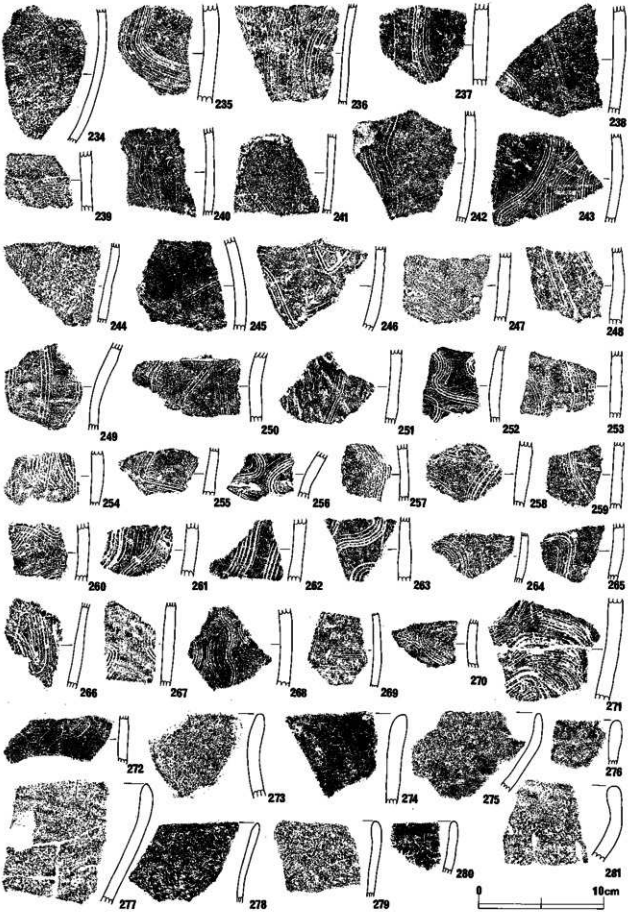
第90図　縄文土器拓影　(5)



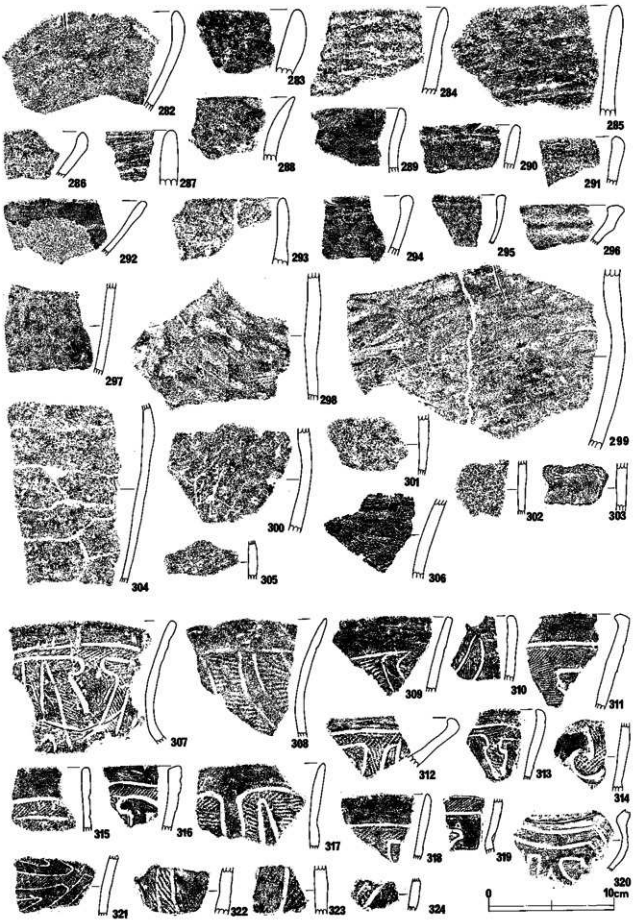
第91図　縄文土器拓影　(6)



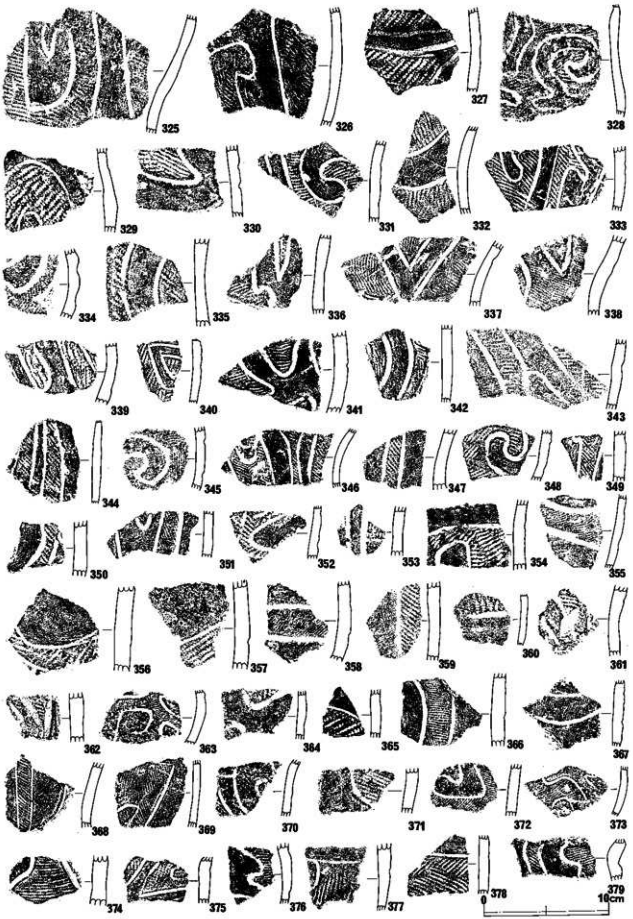
第92図　縄文土器拓影　(7)



第93図　縄文土器拓影 (8)

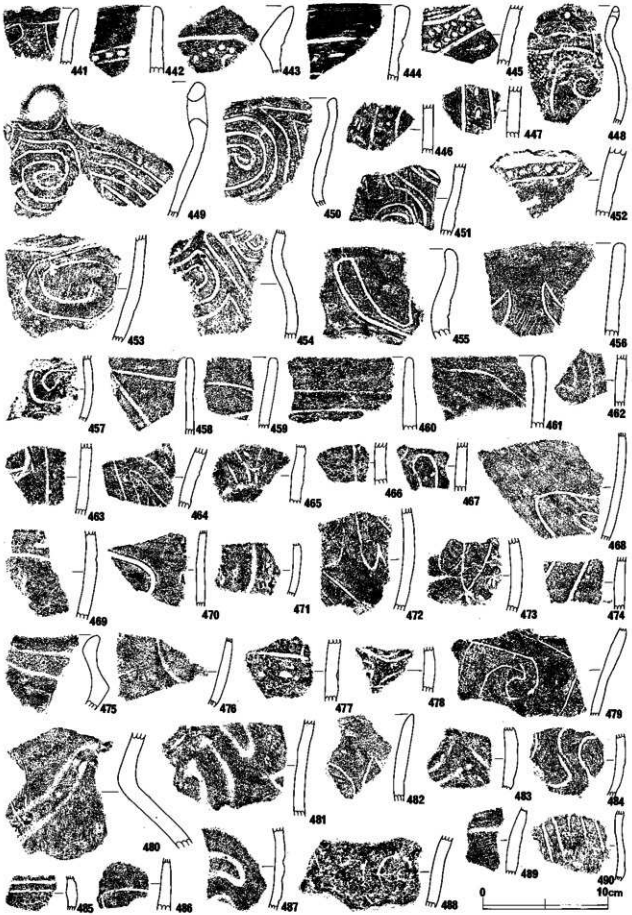


第94図　縄文土器拓影　(9)

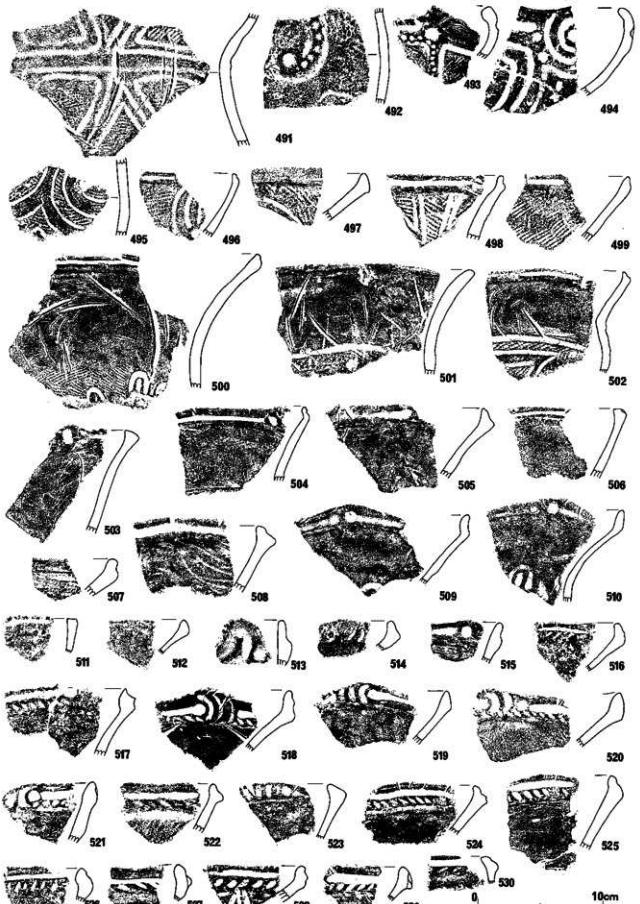


第95図　縄文土器拓影　⑩

第96図　縄文土器拓影 (11)



第97図　縄文土器拓影 (12)



第98図　縄文土器拓影　(3)